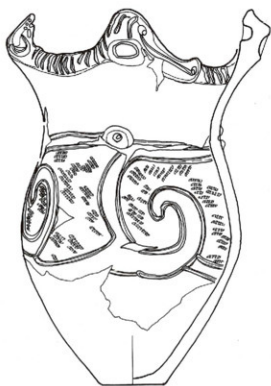


茨城県常陸大宮市

上ノ宿遺跡

— 第2次調査Ⅱ —

発掘調査報告書



2009

常陸大宮市教育委員会
大和リース株式会社
有限会社 日考研茨城

茨城県常陸大宮市

上ノ宿遺跡

－第2次調査Ⅱ－

発掘調査報告書

2009

常陸大宮市教育委員会
大和リース株式会社
有限会社 日考研茨城

ごあいさつ

常陸大宮市は、茨城県の北西部、県都水戸市から約20kmの八溝山地及び阿武隈山地の南端と関東平野周縁地北端の境界部に位置し、東に久慈川、南に那珂川、中央部に緒川、玉川が流れ、市の6割を山林が占めている。

久慈川と那珂川の二大河川の沿岸には、肥沃な土地が開け、豊かな自然に恵まれ古くから人々の生活の場となり、多くの歴史を重ねております。そのためこの地域には、古墳・塚・集落跡など多くの遺跡が存在しております。これらの遺跡は、当時の様子を知る手がかりとなることはもちろんのこと、現代の私たちが豊かに生活することができる先人の業績でもあります。

このような貴重な文化遺産を後世に伝えることは、私たちの大切な任務であり、郷土の発展のためにも貴重なことと考えております。このたびの調査は、店舗の建設に伴い、周知の遺跡である上ノ宿遺跡の発掘調査による記録保存を目的に行ったものであります。遺跡内からは、縄文・奈良・平安・中世時代の竪穴住居・土坑・柱穴状遺構・溝状遺構・土器等が多数検出されました。この調査報告によって地域の祖先の遺業をしのぶことができるとともに、文化財に対する意識が一層深まり、遺跡愛護の精神や郷土の文化を培う上で貴重な資料として役立てていただければ幸いです。

最後になりますが、発掘調査にあたり格別のご指導を賜りました茨城県埋蔵文化財指導員の川崎純徳先生、そしてご協力いただきました地元の関係者、また、一切の経費をご負担いただきました 大和リース株式会社様、遠正かつ慎重な調査をしていただきました発掘業者 有限会社日考研茨城様、各位に心から厚く感謝を申し上げます。

平成21年12月

茨城県常陸大宮市教育委員会

例 言

1. 本書は、大和リース株式会社の委託を受けて、常陸大宮市教育委員会の指導のもと、有限会社日考研茨城が行った、店舗建設に伴う記録保存調査を目的とした発掘調査報告書である。
2. 本書は、下記の遺跡を収録したものである。

遺跡名 上ノ宿(かみのしゅく)遺跡
所在地 常陸大宮市宇留野3061-1他14筆
調査面積 12,787㎡
3. 掘調査の現地調査及び整理調査は、下記の期間に実施した。

調査期間 平成20年6月11日～平成20年12月26日
整理期間 平成21年7月28日～平成21年12月27日
4. 発掘調査組織は下記の通りである。

調査担当 遠藤 啓子〔(有)日考研茨城〕 現地・整理
調査員 大湖 淳志〔(有)日考研茨城〕 現地・整理
現地調査作業員 相田三郎、大谷和枝、岡崎稔、小野豊、佐藤實、菅原裕子、佐賀実、
沢田すみ江、塩澤和紀、島崎清子、下山豊二、友部政夫、戸室均、
西宮芳江、藤岡勲、緑川覚吾、皆川典子、谷中昌、綿引昇市朗
整理調査員 大湖由紀子・大野美佳〔以上(有)日考研茨城〕
事務局 (有)日考研茨城
調査指導 常陸大宮市教育委員会生涯学習課
5. 本書の編集執筆は、小川和博・大湖淳志・遠藤啓子が行った。
6. 本書では以下のような遺構の略称に使用した記号は以下の通りである。

堅穴建物跡：S I 上坑・土坑墓：S K 掘立柱建物跡：S B 溝：S D
堅穴遺構その他：S X 柱穴(ピット)：P 旧石器時代調査地点：P G 攪乱：K
7. 本書中の色調に関する表現は新版標準上色帖(農林水産技術会議事務局監修2000年版)に従った。
8. 本書で使用した図面の方位は、すべて座標北であり、標高は海拔高である。
9. 本書に掲載した遺物のスクリーントーンについては、いずれも黒色処理が施されていることを示している。
10. 遺構および遺物の写真撮影は人沼淳志・小川和博が行った。
11. 調査の記録および出土遺物は、常陸大宮市教育委員会が保管している。
12. 発掘調査および報告書の作成に当たり、以下の方々のご教示・ご高配を賜った。記して、深く謝意を表す次第です。(敬称略・順不同)

茨城県教育委員会、(財)茨城県教育財団、土浦市上高津貝塚ふるさと歴史の広場、
川崎純徳、比毛君男、鴨志田篤二。

本文目次

ごあいさつ

例言

第1章 序章	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査経過とその概要	1
第3節 調査経過	2
第4節 遺跡の位置と周辺遺跡	2
1. 遺跡の位置	2
2. 周辺の遺跡	2
第2章 検出された遺構と遺物	8
第1節 概要	8
第2節 旧石器時代の調査	8
第1項 概要	8
第2項 基本層序	8
第3項 発見された旧石器時代の遺物	9
第3節 縄文時代の遺構と遺物	9
第1項 概要	9
第2項 土坑	9
第3項 遺構外の縄文時代の遺物	11
第4節 古代の遺構と遺物	12
第1項 竪穴建物跡	12
第2項 円形有段遺構	79
第3項 土坑	79
第5節 中世以降の遺構と遺物	90
第1項 掘立柱建物跡	90
第2項 井戸跡	94
第3項 方形区画遺構	94
第4項 溝状遺構	95
第5項 土坑墓	96
第6項 土坑	99
第7項 柱穴状遺構	115
第3章 まとめ	116

挿図目次

第1図	グリッド配置図	1
第2図	遺跡周辺地形図 (1:2,500)	3
第3図	遺跡の位置と周辺の遺跡 (1:25,000)	4
第4図	遺構配置図(1)	6
第5図	遺構配置図(2)	7
第6図	基本順序	8
第7図	旧石器時代遺物分布図・基本層序グリッド配置図 (PG1)	9
第8図	旧石器時代の石器	9
第9図	縄文時代の土坑(SK178・179・180)	10
第10図	土坑SK179出土遺物	10
第11図	遺構外山土遺物	10
第12図	竪穴建物SI01実測図	11
第13図	竪穴建物SI01出土遺物	11
第14図	竪穴建物SI28実測図	12
第15図	竪穴建物SI28カマド実測図	12
第16図	竪穴建物SI28出土遺物	13
第17図	竪穴建物SI29実測図	14
第18図	竪穴建物SI29カマド実測図	14
第19図	竪穴建物SI29出土遺物	14
第20図	竪穴建物SI30・31実測図	15
第21図	竪穴建物SI30出土遺物	15
第22図	竪穴建物SI31出土遺物	15
第23図	竪穴建物SI32実測図	16
第24図	竪穴建物SI33実測図	17
第25図	竪穴建物SI33カマド実測図	17
第26図	竪穴建物SI33出土遺物	17
第27図	竪穴建物SI62・63実測図	18
第28図	竪穴建物SI63出土遺物	18
第29図	竪穴建物SI64実測図	19
第30図	竪穴建物SI64カマド実測図	19
第31図	竪穴建物SI64出土遺物	19
第32図	竪穴建物SI65実測図	20
第33図	竪穴建物SI65カマド実測図	20
第34図	竪穴建物SI65出土遺物	21
第35図	竪穴建物SI66実測図	22
第36図	竪穴建物SI66カマド実測図	22
第37図	竪穴建物SI66出土遺物	22
第38図	竪穴建物SI67実測図	23
第39図	竪穴建物SI67カマド実測図	23
第40図	竪穴建物SI67出土遺物	23
第41図	竪穴建物SI68実測図	24
第42図	竪穴建物SI68カマド実測図	24
第43図	竪穴建物SI68出土遺物	24
第44図	竪穴建物SI69実測図	25
第45図	竪穴建物SI69カマド実測図	25
第46図	竪穴建物SI69出土遺物	25
第47図	竪穴建物SI70実測図	26
第48図	竪穴建物SI70出土遺物	26

第49図	竪穴建物SI71実測図	27
第50図	竪穴建物SI71カマド実測図	27
第51図	竪穴建物SI71出土遺物	27
第52図	竪穴建物SI72実測図	28
第53図	竪穴建物SI72カマド実測図	28
第54図	竪穴建物SI72出土遺物	28
第55図	竪穴建物SI73実測図	29
第56図	竪穴建物SI73カマド実測図	29
第57図	竪穴建物SI73出土遺物	30
第58図	竪穴建物SI74実測図	31
第59図	竪穴建物SI74出土遺物	31
第60図	竪穴建物SI75実測図	32
第61図	竪穴建物SI75カマド実測図	32
第62図	竪穴建物SI75出土遺物	32
第63図	竪穴建物SI76実測図	33
第64図	竪穴建物SI76出土遺物	33
第65図	竪穴建物SI77実測図	34
第66図	竪穴建物SI77出土遺物	34
第67図	竪穴建物SI78実測図	35
第68図	竪穴建物SI78カマド実測図	35
第69図	竪穴建物SI78出土遺物	35
第70図	竪穴建物SI79実測図	36
第71図	竪穴建物SI79カマド実測図	36
第72図	竪穴建物SI79出土遺物	36
第73図	竪穴建物SI80実測図	37
第74図	竪穴建物SI80カマド実測図	37
第75図	竪穴建物SI80出土遺物	37
第76図	竪穴建物SI81実測図	38
第77図	竪穴建物SI81出土遺物	38
第78図	竪穴建物SI82実測図	39
第79図	竪穴建物SI82カマド実測図	39
第80図	竪穴建物SI82出土遺物	39
第81図	竪穴建物SI83実測図	40
第82図	竪穴建物SI84実測図	40
第83図	竪穴建物SI84出土遺物	40
第84図	竪穴建物SI85実測図	41
第85図	竪穴建物SI85カマド実測図	41
第86図	竪穴建物SI85出土遺物	41
第87図	竪穴建物SI86・87実測図	42
第88図	竪穴建物SI86カマド実測図	42
第89図	竪穴建物SI86出土遺物	42
第90図	竪穴建物SI87出土遺物	42
第91図	竪穴建物SI88実測図	43
第92図	竪穴建物SI88カマド実測図	43
第93図	竪穴建物SI88出土遺物	43
第94図	竪穴建物SI89実測図	44
第95図	竪穴建物SI89カマド1・カマド2実測図	44
第96図	竪穴建物SI89出土遺物	44
第97図	竪穴建物SI90実測図	45
第98図	竪穴建物SI90カマド実測図	45

第99図	竪穴建物SI90出土遺物	45
第100図	竪穴建物SI91実測図	46
第101図	竪穴建物SI91出土遺物	46
第102図	竪穴建物SI92実測図	47
第103図	竪穴建物SI92カマド実測図	47
第104図	竪穴建物SI92出土遺物(1)	48
第105図	竪穴建物SI92出土遺物(2)	49
第106図	竪穴建物SI93実測図	50
第107図	竪穴建物SI93カマド実測図	50
第108図	竪穴建物SI93出土遺物	51
第109図	竪穴建物SI94実測図	52
第110図	竪穴建物SI94出土遺物	52
第111図	竪穴建物SI95実測図	53
第112図	竪穴建物SI95カマド実測図	53
第113図	竪穴建物SI95出土遺物(1)	53
第114図	竪穴建物SI95出土遺物(2)	54
第115図	竪穴建物SI96実測図	55
第116図	竪穴建物SI96カマド実測図	55
第117図	竪穴建物SI96出土遺物	55
第118図	竪穴建物SI97実測図	56
第119図	竪穴建物SI97カマド実測図	56
第120図	竪穴建物SI97出土遺物	56
第121図	竪穴建物SI98実測図	57
第122図	竪穴建物SI98カマド実測図	57
第123図	竪穴建物SI98出土遺物	57
第124図	竪穴建物SI99実測図	58
第125図	竪穴建物SI99カマド実測図	58
第126図	竪穴建物SI99出土遺物	58
第127図	竪穴建物SI100実測図	59
第128図	竪穴建物SI100カマド実測図	59
第129図	竪穴建物SI100出土遺物	59
第130図	竪穴建物SI101実測図	60
第131図	竪穴建物SI101カマド実測図	60
第132図	竪穴建物SI101出土遺物	60
第133図	竪穴建物SI102実測図	61
第134図	竪穴建物SI102カマド実測図	61
第135図	竪穴建物SI102出土遺物	61
第136図	竪穴建物SI103実測図	62
第137図	竪穴建物SI103カマド実測図	62
第138図	竪穴建物SI103出土遺物	62
第139図	竪穴建物SI104実測図	63
第140図	竪穴建物SI104カマド実測図	63
第141図	竪穴建物SI104出土遺物	63
第142図	竪穴建物SI105・107実測図(1)	64
第143図	竪穴建物SI105・107実測図(2)	65
第144図	竪穴建物SI105カマド実測図	65
第145図	竪穴建物SI107カマド実測図	65
第146図	竪穴建物SI105出土遺物(1)	66
第147図	竪穴建物SI105出土遺物(2)	67
第148図	竪穴建物SI107出土遺物	68

第149回	竪穴建物SI106実測図	69
第150回	竪穴建物SI106出土遺物	69
第151回	竪穴建物SI108実測図	70
第152回	竪穴建物SI108カマド実測図	70
第153回	竪穴建物SI108出土遺物	70
第154回	竪穴建物SI109・110・120実測図	71
第155回	竪穴建物SI109カマド実測図	71
第156回	竪穴建物SI110出土遺物	71
第157回	竪穴建物SI109出土遺物	72
第158回	竪穴建物SI111・112実測図	73
第159回	竪穴建物SI111カマド実測図	73
第160回	竪穴建物SI111出土遺物	73
第161回	竪穴建物SI112出土遺物	73
第162回	竪穴建物SI113実測図	74
第163回	竪穴建物SI113出土遺物	74
第164回	竪穴建物SI114実測図	75
第165回	竪穴建物SI114カマド実測図	75
第166回	竪穴建物SI114出土遺物	75
第167回	竪穴建物SI115・116・117実測図	76
第168回	竪穴建物SI116カマド実測図	76
第169回	竪穴建物SI117カマド実測図	76
第170回	竪穴建物SI115出土遺物	76
第171回	竪穴建物SI116出土遺物	77
第172回	竪穴建物SI117出土遺物	77
第173回	竪穴建物SI118・119実測図	78
第174回	竪穴建物SI118出土遺物	78
第175回	竪穴建物SI119出土遺物	78
第176回	円形有段遺構SX01実測図	79
第177回	円形有段遺構SX01出土遺物	79
第178回	土坑SK170・176・184・187・191・192・203・204・ 206・369・370実測図	80
第179回	土坑SK209・210・212・240・248・331・367実測図	81
第180回	土坑(古代)出土遺物(1)	82
第181回	土坑(古代)出土遺物(2)	83
第182回	中世以降の遺構	84
第183回	掘立柱建物跡SB08・09・10・11・12実測図	85
第184回	掘立柱建物跡SB13・14実測図	86
第185回	井戸SE01・02実測図	87
第186回	井戸SE02出土遺物	87
第187回	方形区画遺構SX02実測図(1)	88
第188回	方形区画遺構SX02実測図(2)	89
第189回	溝SD11・15出土遺物	90
第190回	土坑墓SK265・266・267・268・269・270・271・272・ 273・274・275・276・277・339実測図	91
第191回	土坑墓SK278・279・280・281・285・287・340実測図	92
第192回	土坑墓SK266・267・276・279・280・281・285出土遺物	93
第193回	土坑SK265出土遺物	94
第194回	中世土坑SK201・211・214・216・219・221・224・225・ 227・229・230・232・234・245・259実測図	102
第195回	中世土坑SK233・235・236・243・244・246・247・249・	

	251・252・282・283実測図	104
第196図	中世上坑SK294・295A・295B・296・297・298・299・300・301・302・303・304・305・306・307・312・313・314・315実測図	106
第197図	中世土坑SK317・323・324・325・327・328・334・341・351・358・359・360実測図	108
第198図	中世土坑出土遺物	110

写真図版目次

PL.1	1. 遺跡調査区航空写真、2. 遺跡調査区航空写真
PL.2	1. 遺跡調査区航空写真、2. 調査区全景
PL.3	1. 旧石器時代試掘グリット1、2. 上坑SK179、3. 竪穴建物跡SI67、4. 竪穴建物跡SI68、5. 竪穴建物跡SI69、6. 竪穴建物跡SI71、7. 竪穴建物跡SI72、8. 竪穴建物跡SI73
PL.4	1. 竪穴建物跡SI79、2. 竪穴建物跡SI80、3. 竪穴建物跡SI82、4. 竪穴建物跡SI88、5. 竪穴建物跡SI92、6. 竪穴建物跡SI73、7. 竪穴建物跡SI95、8. 竪穴建物跡SI96
PL.5	1. 竪穴建物跡SI97、2. 竪穴建物跡SI98、3. 竪穴建物跡SI100、4. 竪穴建物跡SI101、5. 竪穴建物跡SI102、6. 竪穴建物跡SI103、7. 竪穴建物跡SI110-1、8. 竪穴建物跡SI110-2
PL.6	1. 調査区全景、2. 井戸SE01、3. 溝SD06、4. 方形区画平地遺構全景、5. 土坑SK170、6. 土坑SK244、7. 土坑SK255、8. 土坑SK256
PL.7	1. 土坑SK286-1、2. 土坑SK265、286-2、3. 土坑SK266、267、275-1、4. 土坑SK266、267、275-2、5. 土坑SK268、6. 土坑SK269、7. 土坑SK273、8. 土坑SK276
PL.8	1. 土坑SK277、2. 土坑SK278、281、3. 土坑SK279、4. 土坑SK280
PL.9	1・2. 旧石器時代剥片、3～6. 土坑SK179、7・8. 遺構外出土石器
PL.10	1～3. 竪穴建物跡SI01、4～6. 竪穴建物跡SI28、7. 竪穴建物跡SI30、8～11. 竪穴建物跡SI64、12・13. 竪穴建物跡SI65(1)
PL.11	1～3. 竪穴建物跡SI65(2)、4. 竪穴建物跡SI67、5. 竪穴建物跡SI68、6～10. 竪穴建物跡SI69、11～13. 竪穴建物跡SI73
PL.12	1. 竪穴建物跡SI75、2～4. 竪穴建物跡SI77、5・6. 竪穴建物跡SI82、7～12. 竪穴建物跡SI85
PL.13	1. 竪穴建物跡SI87、2. 竪穴建物跡SI88、3. 竪穴建物跡SI89、4～15. 竪穴建物跡SI92
PL.14	1. 竪穴建物跡SI93、2. 竪穴建物跡SI94、3～8. 竪穴建物跡SI95、9. 竪穴建物跡SI96、10. 竪穴建物跡SI99、11. 竪穴建物跡SI100、12・13. 竪穴建物跡SI102
PL.15	1～5. 竪穴建物跡SI103、6・7. 竪穴建物跡SI104、8～14. 竪穴建物跡SI105
PL.16	1～4. 竪穴建物跡SI107、5・6. 竪穴建物跡SI108、7～13. 竪穴建物跡SI109、14. 竪穴建物跡SI111、15. 竪穴建物跡SI112
PL.17	1・2. 竪穴建物跡SI113、3・4. 竪穴建物跡SI114、5. 竪穴建物跡SI119 土製品1・2. 竪穴建物跡SI28、土製品3～7. 竪穴建物跡SI72、土製品8. 竪穴建物跡SI74、土製品9. 竪穴建物跡SI92、土製品10～12. 竪穴建物跡SI95、土製品13～19. 竪穴建物跡SI105、土製品20. 竪穴建物跡SI108、土製品21・22. 竪穴建物跡SI109、土製品23. 竪穴建物跡SI110
PL.18	石製品1. 竪穴建物跡SI29、石製品2. 竪穴建物跡SI73、石製品3. 竪穴建物跡SI92、石製品4・5. 竪穴建物跡SI94、石製品6. 竪穴建物跡SI104、

石製品 7. 竪穴建物跡SI105、石製品 8. 竪穴建物跡SI109、
石製品 9. 竪穴建物跡SI77、石製品10. 竪穴建物跡SI82、石製品11. 竪穴建物跡SI64、
石製品12. 竪穴建物跡SI93
鉄製品 1. 竪穴建物跡SI77、鉄製品 2. 竪穴建物跡SI79、鉄製品 3. 竪穴建物跡SI80、
鉄製品 4. 竪穴建物跡SI92、鉄製品 5. 竪穴建物跡SI95、鉄製品 6. 竪穴建物跡SI98、
鉄製品 7. 竪穴建物跡SI021、鉄製品 8. 竪穴建物跡SI104、
鉄製品 9~12. 竪穴建物跡SI105、鉄製品13・14. 竪穴建物跡SI107

PL.19

中世・竪穴遺構、土坑出土

1. 土坑SK211、2・3. 土坑SK212、4. 土坑SK214、5. 土坑SK216、
6・7. 土坑SK224、8. 土坑SK299、9. 土坑SK303、10. 土坑SK355、
11~13. 土坑SK360

中近世・土坑墓出土錢貨

1~4. 土坑墓SK266、5~9. 土坑墓SK267、10. 土坑墓SK279、
11~13. 土坑墓SK285、14~19. 土坑墓SK276、20~25. 土坑墓SK281

表目次

表1 上ノ宿遺跡と周辺遺跡一覧

表2 近世以降土坑一覧表

第1章 序章

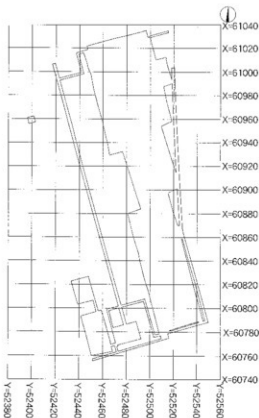
第1節 調査に至る経緯

本発掘調査は、店舗造成に伴う事前調査である。平成19年10月26日に大和リース株式会社から常陸大宮市教育委員会に埋蔵文化財の所在の有無の照会が提出され、それに基づき市教育委員会は、以前に今回の開発地城南側の上宿上坪遺跡の発掘調査を平成15年7月から実施し、また、平成18年5月からも上ノ宿遺跡の発掘調査を行った結果、多数の遺構・遺物が確認されていること、立地条件が良く開発箇所の周囲に古代の集落が所在することが確認されていることから、平成20年2月6日に茨城県教育委員会との協議により、本調査実施することとなり、有限会社日考研茨城に調査依頼をおこなう。承諾後、常陸大宮市教育委員会・大和リース株式会社・有限会社日考研茨城は三者協議を行い、平成20年6月11日～同年12月26日まで本調査を実施した。

(常陸大宮市教育委員会)

第2節 調査経過とその概要

上ノ宿遺跡の本調査は、平成20年6月11日から同年12月26日まで実施した。確認調査の結果に基づき、開発予定区域全面12,787㎡を調査することとなった。まず重機による表土除去から開始し、遺構確認のための精査を人力により行う。また更に調査区西側ならびに東側では排水施設掘削予定地に幅2mのトレンチ様調査区および南西側では浄化槽施設予定地を追加調査区として設定し発掘が実施されている。先の確認調査で把握されていた黒色土の落ち込み部はすべて堅穴建物跡であることが判明し、これら堅穴建物跡を中心に丁寧な精査を繰り返した。いずれの堅穴建物跡も奈良・平安時代に属し、調査区北端を除くほぼ全面から検出され、とくに南側調査区に集中して展開されていることが判明した。その他中世以降の掘立柱建物跡や土坑を検出する。またわずかであるが縄文時代後期の土坑も確認されている。なお、北側では中世段階の方形区画遺構が検出され、区画内には中世墓、堅穴遺構、土坑や柱穴が集中していた。



第1図 グリッド配置図

今回の本調査区における古代の堅穴建物跡は64軒である。8世紀前半から11世紀代に比定され、確認できるいずれの建物もカマドが設置され、屋内に柱穴をもたない屋内無柱建物が主体を占める。建物内からは多量の土師器・須恵器のほか灰釉陶器が出土しており、特に灰釉陶器では耳皿が目目される。また、北側では中世を中心とする溝に区画された方形区画遺構が検出され、区画内には土坑墓をはじめ堅穴遺構や土坑、柱穴が集中して確認された。

最後に平坦で遺構密度の薄い調査区の北西側に1ヶ所旧石器文化層を確認するため2m×2mのグリッドを設定し深層調査を実施した。上層の七本桜軽石層および今市軽石層と下層にあたるXI層鹿沼軽石層が鍵層となっているが、明確な旧石器文化層を検出できず、基本層序のみの観察となった。

なお、調査区の設定にあたっては、国家座標を基準とし、調査区北西隅のX軸=61,040m、Y軸=52,380mの交点を基準点とする20m×20mのグリッドを設定し、遺構の所在および遺構外出土遺物のすべての地点を明確にすることとした(第1図)。

また、遺構の記録は実測図の作成と写真撮影により行った。遺構の図化については堅穴建物跡・掘立柱建物跡の平面図、土層断面図は20分の1の縮尺で作図を行っている。また土坑、

カマドの平面図および土層断面図については10分の1の縮尺の図面を作成した。さらに遺構写真は35mmのカラーリバーサル・カラーフィルムにより撮影を行なった。

(大淵淳志・遠藤啓子)

第3節 調査経過

現場の本調査は平成20年6月11日から平成20年12月26日までの5ヶ月間にわたって実施した。また整理作業は平成21年7月28日から平成21年12月27日まで5ヶ月間にわたって実施した。以下その概要を工程表で表記した。

(大淵淳志・遠藤啓子)

工程	平成20年												平成21年									
	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	7月	8月	9月	10月	11月	12月									
調査準備 表土除去 遺構確認	■																					
遺構調査				■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
補足調査 掘																						
遺物洗浄 注 写真整理																						

第4節 遺跡の位置と周辺遺跡

1. 遺跡の位置（第2・3図）

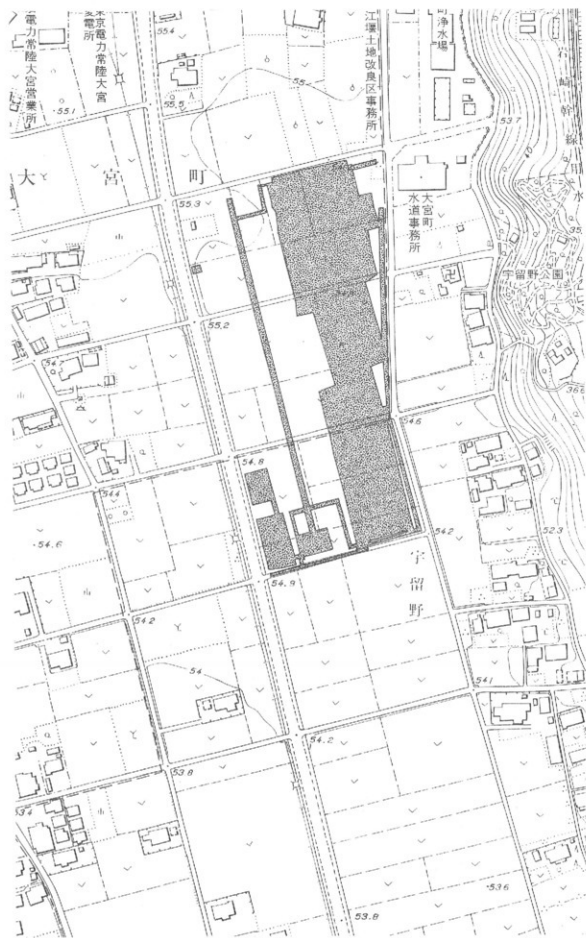
遺跡は、北緯36°32' 51" 95、東経140°25' 9" 7の茨城県北部、常陸大宮市宇留野3061-1他14筆に所在する。ここは水部線常陸大宮駅わすか600m、旧国道118号線に並行し、市街地の東端に位置する。付近の台地は八溝山系から延びた丘陵の一部が北から西側に突出した洪積世の台地が形成され、東に久慈川、西に那珂川によって大きく分断され、さらに市街地西に流れる玉川によって二分される。遺跡の立地する通称大宮台地は久慈川と玉川に挟まれた南北に細長く延びた舌状台地で、久慈川と玉川が下岩瀬付近で合流することによって収束する。こうした大宮台地は両河川とその支流によってさらに侵食され複雑な地形を呈している。遺跡は東に流れる久慈川の右岸で、直接影響を受け、より開析された比較的幅広く平坦な台地上に立地しているため、遺跡の範囲が明確に線引きできない。すなわち標高53.5m前後の平坦面が南北800m、東西1500mまで延びており、北は部垂城跡(040)、南は宇留野城跡(038)によって境されるものの、西側は玉川まで達する広さがあり、東端に位置する本遺跡から西側の玉川まで小規模な中富遺跡(062)のわずかに1遺跡しか確認されていない。こうした状況のなか本遺跡は南北700m、東西200mという大規模な範囲が遺跡として周知されている。さらに平成15年に発掘調査を実施した「上宿上坪遺跡(094)」とはほぼ同一遺跡と理解してもよいほど遺跡の境は明瞭ではない。なお東側の久慈川低地との比高差は約32.5mを測る。調査前の現況は畑地で、遺跡西側は市街の中心地である。

(大淵淳志・遠藤啓子)

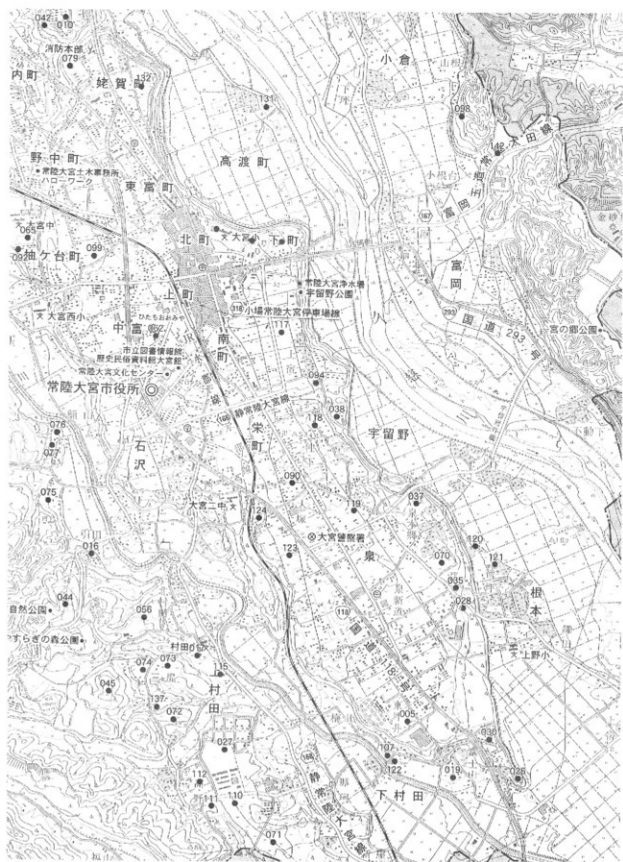
2. 周辺の遺跡（第3図）

上ノ宿遺跡が立地する常陸大宮市は東に久慈川、西に那珂川と県内を代表する主要河川に挟まれ、さらに中央には玉川が流れ、県北部において水利に恵まれた稀にみる肥沃な環境を呈している。そのため旧石器時代から中近世に至るまで多くの遺跡が周知されており、各時期それぞれ学史的に古くから注目されている遺跡が多いのも特徴である。いま時期ごとに主な遺跡を列挙してみても、旧石器時代の梶巾遺跡、縄文時代の坪井上遺跡、高ノ倉遺跡、弥生時代の小野天神前遺跡、上岩瀬富士山遺跡、小祝梶巾遺跡。古墳時代の下村田一騎山古墳や鎌塚古墳。奈良・平安時代の小野源氏平遺跡や鷹巣原遺跡等が知られている。これらはいずれも県内の歴史を語るべき必ず代表的な遺跡のひとつとして挙げられ、しかも全体的にみても数少ない発掘調査によって明らかにされた成果であり、逆にみると市内などの遺跡の調査を実施しても注目度の高い成果が期待できることを示唆している。

さて、ここで本遺跡周辺遺跡の概要について、すでに市教育委員会で報告されている分布調査に基づき簡単に触れ



第2図 遺跡周辺地形図 (1 : 2,500)



117上の宮遺跡 005坪井上遺跡 010鳴東遺跡 011宮中遺跡 016引田前遺跡 017北村田遺跡 018西井遺跡 024松崎寺古蹟 026宮上山古墳群 027一騎山古墳群
028坂本古墳群 030上野原上山遺跡 033坂本古蹟 037新小塚遺跡 038宇留野遺跡 040徳島城跡 042豊島瓦葺跡 044大沢自然公園遺跡 045宮家遺跡
056小中遺跡 062中野遺跡 085堀ヶ台遺跡 070春日野新遺跡 071釜山入遺跡 073三ツ又入遺跡 074三ツ又入遺跡 074三ツ又入遺跡 075宮の石遺跡
076根山B遺跡 079榎屋遺跡 090大塚遺跡 092堀ヶ台古蹟 094上野遺跡 098山崎遺跡 099尾道遺跡 107念仏塚 110根山B遺跡 111高野A遺跡
112高野B遺跡 115北村田日遺跡 118坪下遺跡 119坂木所遺跡 130泉坂下遺跡 121根本後坪遺跡 122念仏塚遺跡 123上野作遺跡 124穴丁遺跡 131高渡遺跡
132榎屋東遺跡 137三ツ又B遺跡 142宮岡七塚群

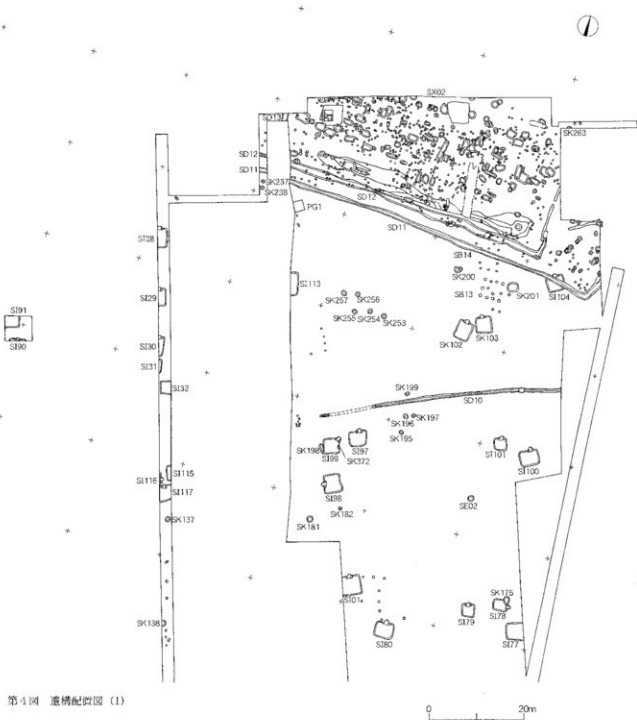
ていきたい。まず旧石器時代の遺跡については「梶中遺跡(007)」で調査され、槍先形尖頭器が出土し、「小野天神前遺跡」でも細石核が採集されている。そのほか市内最古といわれている「小野高ノ倉遺跡」および上坪遺跡(033)、鷹巣戸内遺跡(034)が知られている。次ぎの縄文時代になると急に遺跡数が増えてくる。周辺では昭和51、58年に調査された「梶中遺跡(007)」をはじめ、「諏訪台遺跡(050)」「宮中遺跡(011)」「富士山遺跡(003)」等21遺跡が知られ、また正式な調査は行われていないが、「河井台遺跡(096)」では多量の石鏃が採集されている。そのほか中期の大集落として確認された「坪井上遺跡」「高ノ倉遺跡」があり、縄文早期・中期から弥生時代に営まれた「小野天神前遺跡」は、主となる晩期段階で土偶や埴形土製品をはじめ石剣、石棒、独鈷石等祭祀具が多数出土している。そして当遺跡は県内でも数少ない弥生時代中期前半まで継続され、市内に限らず県内を代表する遺跡のひとつとなっている。そのほか周辺地域では、後期の「富士山遺跡(003)」や「梶中遺跡(003)」が著名である。以上のほか弥生時代の遺跡は明確ではないものが多い。

古墳時代では須恵器や形象埴輪を含めた豊富な埴輪の出土が知られている「鷹巣古墳群(023)」のほか、前方後方墳である「富士山4号墳」は墳長38mを測り、県内でも最古の古墳のひとつとして周知されている。また「糠塚古墳(022)」は80mの大形古墳である。なお集落跡も数は少ないが報告されている。「梶中遺跡(007)」では前・中期の住居跡が検出されている。さらに玉川左岸には「雷神山横穴群(091)」と「岩穴横穴群(139)」があり、いずれも5基ずつ確認されている。

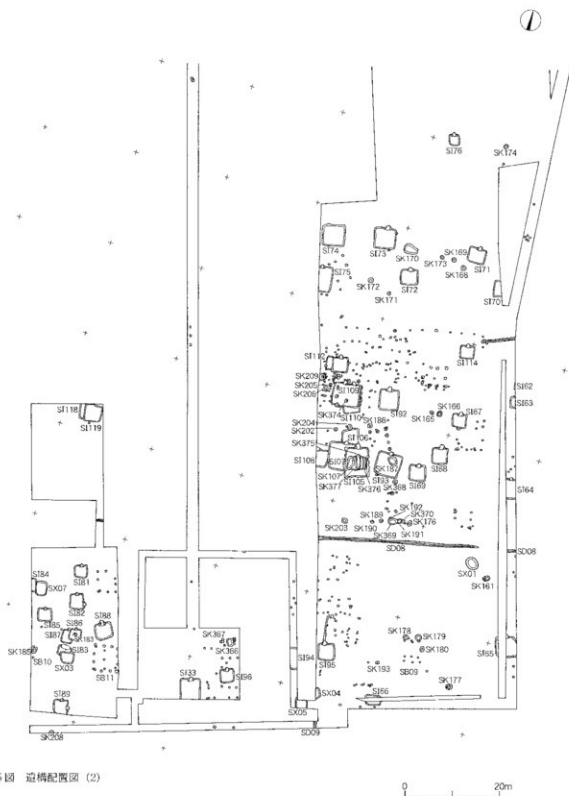
次ぎの奈良・平安時代では本遺跡を含め市内の大半の遺跡で確認されており、その数は115遺跡以上にのぼり市内の全体的に実に80%を占めている。そのなかで主要遺跡のひとつが「鷹巣原遺跡(010)」である。8世紀中葉から10世紀にかけて32軒の住居跡が確認されている。さらに隣接して「鷹巣瓦窯跡(042)」が知られており、ここで焼かれた瓦が住居跡のカマド構築材として利用されていた。そのほか最近調査された「上宿上坪遺跡(094)」や「上坪遺跡(033)」でも明確な集落跡として注目されている。これらに本遺跡が加わることで久慈川中流域における8世紀から10世紀にかけての拠点的集落がより鮮明になってきた。最後に中世では城跡として詳細な測量調査を実施した「前小屋城跡(037)」をはじめ「宇留野城跡(038)」や「菅又城跡(100)」が知られているが、平成15年に発掘調査した「上宿上坪遺跡(094)」では宇留野城跡北西側の一郭に位置する集落遺跡で、明瞭な郭跡は確認できなかったものの、溝や土坑から古瀬戸の平碗・茶釜、志戸呂の播鉢、常滑の甕や内耳土器、さらに碗の出土が報告されている。また近世の塚としては「富岡七ツ塚群(142)」が確認されている。(遠藤啓子)

表1 上ノ宿遺跡と周辺遺跡一覧

番号	遺跡名	種別	時代・時期	番号	遺跡名	種別	時代・時期
117	上ノ宿遺跡	集落跡	縄文、奈良・平安	076	額山A遺跡	集落跡	奈良・平安
010	鷹巣原遺跡	集落跡	縄文、奈良・平安、中世	077	額山B遺跡	集落跡	縄文、奈良・平安
011	宮中遺跡	集落跡	縄文、奈良・平安	082	鷹巣原B遺跡	集落跡	奈良・平安、中世
016	引田前遺跡	集落跡	奈良・平安	088	馬場先遺跡	集落跡	縄文、古墳、奈良・平安
017	北村台遺跡	集落跡	縄文、奈良・平安、中世	090	大塚遺跡	集落跡	縄文、奈良・平安
019	西坪井遺跡	集落跡	弥生、古墳、奈良・平安	091	雷神山横穴群	横穴群	古墳
024	松崎寺古墳	古墳	古墳	092	袖ヶ台古墳	古墳	古墳
027	一嶺古墳群	古墳群	古墳	094	上宿上坪遺跡	集落跡	縄文、古墳、奈良・平安
028	根本古墳群	古墳群	古墳	096	河井台遺跡	集落跡	奈良・平安
034	鷹巣戸内遺跡	集落跡	旧石器、奈良・平安	097	田子内遺跡	集落跡	奈良・平安
035	根本遺跡	包遺地	古墳	098	山根遺跡	集落跡	不明
037	前小屋遺跡	城跡群	奈良・平安、中世	099	見慶遺跡	集落跡	奈良・平安、中世
038	宇留野城跡	城跡群	中世	107	念仏塚	経塚	近世
040	部運城跡	城跡群	中世	112	高野6遺跡	集落跡	奈良・平安
044	大宮自然公園遺跡	集落跡	縄文、奈良・平安	115	北村B遺跡	集落跡	奈良・平安、中世
045	富室遺跡	集落跡	縄文、古墳、奈良・平安	119	駄木所遺跡	集落跡	奈良・平安
056	小中遺跡	集落跡	奈良・平安	120	泉坂下遺跡	集落跡	奈良・平安
062	中富遺跡	集落跡	縄文、奈良・平安	122	念仏塚遺跡	集落跡	古墳
065	鶴ヶ台遺跡	集落跡	奈良・平安、中世	123	上高作遺跡	集落跡	縄文、奈良・平安
068	石寺遺跡	集落跡	奈良・平安	124	六丁遺跡	集落跡	奈良・平安
070	春日神社前遺跡	集落跡	古墳、奈良・平安	142	富岡七ツ塚群	塚群	近世
072	前三ツ沢A遺跡	集落跡	縄文、奈良・平安	131	高瀬遺跡	集落跡	縄文、奈良・平安
073	後三ツ沢A遺跡	集落跡	奈良・平安	132	神賀東遺跡	集落跡	古墳、奈良・平安
074	後三ツ沢B遺跡	集落跡	縄文、奈良・平安、中世	137	前三ツ沢B遺跡	集落跡	奈良・平安
075	熊の石遺跡	集落跡	奈良・平安				



第4図 遺構配置図(1)



第5図 遊構配置図(2)

0 20m

第2章 検出された遺構と遺物

第1節 概要 (第4・5図)

上ノ宿遺跡は南北700m、東西200mという広大な範囲が遺跡として周知されており、東に流れる久慈川の右岸で、標高53.5m前後の平坦面上に立地している。なお、昭和56、59年に隣接する地点が発掘調査され、縄文時代および古代の集落跡が確認されただけでなく、さらに中世では宇留野城跡と密接に関連する集落跡として注目されていた遺跡であり、今回の調査ではその集落の広がりも確認できた。しかし、以前調査された地点に隣接しているとはいえ、限られた範囲であったが、ここから旧石器時代の石器、縄文時代の土坑、奈良・平安時代の竪穴建物跡、円形有段遺構、土坑、中世の掘立柱建物跡、溝、方形区画遺構、土坑墓、土坑等が検出された。なお、現状は畑地であった。

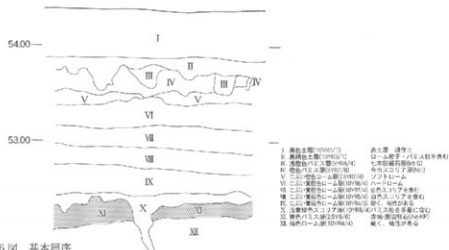
第2節 旧石器時代の調査 (第6～8図)

第1項 概要

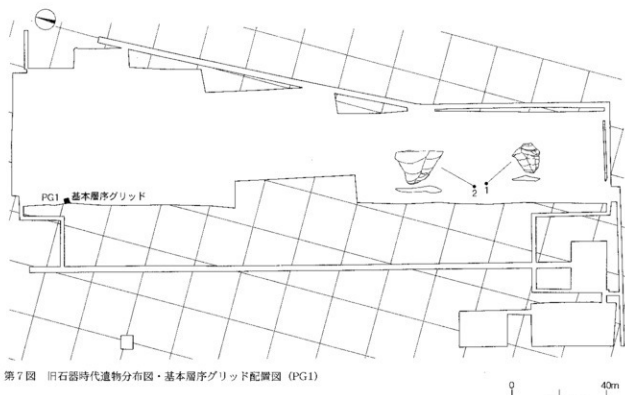
今回の調査で、旧石器時代に係る文化層を確認するために、深掘調査を実施した。調査区北西側に2×2mのグリッドを設定して調査した。あいにく明確な旧石器文化層や遺物は検出できなかったものの、市内の資料蓄積としてローム層の調査を行い、今後の調査の資料に供したい。ここでの難層はⅢおよびⅣ層の今市・七本桜軽石層とⅪ層の鹿沼軽石堆積層である。なお、旧石器時代の遺物として安山岩製の剥片2点が調査区南側より出土した。

第2項 基本層序 (第6図)

- I層 黒色土(10YR2/1)表土。耕作土である。
 II層 黒褐色土(10YR3/1)ローム粒子・スコリア粒を含む。
 III層 浅褐色パミス層(5YR8/4)七本桜軽石層(Nt-S)。粒子が粗く、締まりがある。
 IV層 橙色パミス層(5YR7/8)今市スコリア層(Nt-I)。粒子は比較的粗いが締まりがある。
 V層 にぶい橙色土(7.5Y7/4)白色粒子を含む。比較的締まりに欠ける。軟質ローム層である。
 VI層 にぶい黄褐色土(10YR6/4)白色粒子を含み、締まりがあり、堅緻である。硬質ローム層。
 VII層 にぶい黄褐色土(10YR7/4)白色粒子を含む。締まりがあり、堅緻である。
 VIII層 にぶい黄褐色土(10YR5/4)白色粒子を含む。締まりがあり、堅緻である。
 IX層 にぶい黄褐色土(10Y4/3)締まりがあり、粘性にとむ。堅緻である
 X層 浅黄褐色土(10YR8/4)黄色パミス粒を多く含む。
 XI層 黄色土(2.5Y8/6)赤城-鹿沼(Ag-KP)の堆積層である。粒子は比較的粗く、締まりがあるが、粘性に欠ける。
 XII層 褐色土(10YR4/4)かなり硬く粘性にとむ。



第6図 基本層序



第7図 旧石器時代遺物分布図・基本層序グリッド配置図 (PG1)



第8図 旧石器時代の石器

第3項 発見された旧石器時代の遺物 (第7・8図)

調査区南側から安山岩製の剥片2点が出土した。出土層位はV層にぶい橙色軟質ローム層上面である。第8図1は安山岩製の剥片である。形状は菱形を呈する縦長剥片である。表面には良好のパブルが発展している。長さ4.92cm、幅4.26cm、厚さ0.75cm、重量10.98g。2も安山岩製の剥片。縦長剥片。表裏面とも大きく剥離している。長さ5.29cm、幅7.3cm、厚さ0.99cm、重量29.96gを測る。

(小川和博)

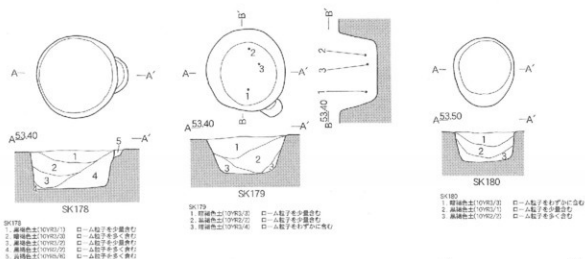
第3節 縄文時代の遺構と遺物 (第9～11図)

第1項 概要

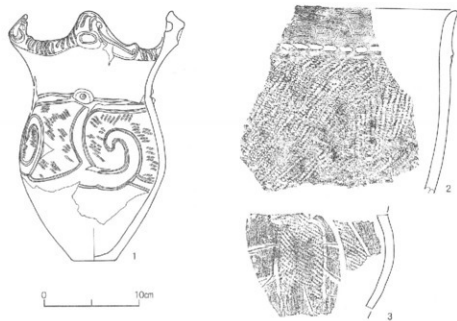
調査区から縄文時代後期初頭の土坑3基が検出された。なかでも土坑SK179から完形に近い深鉢土器が覆上下層から出土している。また周辺から縄文土器と伴に磨製石斧・台石が検出された。

第2項 土坑 (第9・10図)

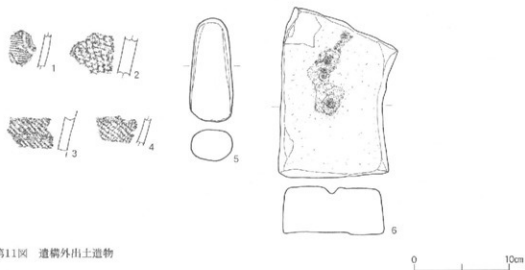
1) 土坑SK178 (第9図)



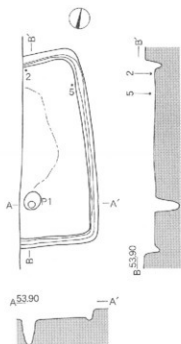
第9図 縄文時代の土坑 (SK178・179・180)



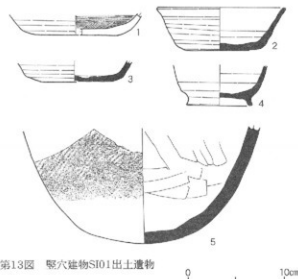
第10図 土坑SK179出土遺物



第11図 遺構外出土遺物



第12図 竪穴建物SK101実測図



第13図 竪穴建物SK101出土遺物

調査区の南側に位置し、平面形は確認面で長径1.27m、短径1.26mを測り、円形を呈する。また検出面からの深度は最大53.0cmを測り、壁面は垂直気味に立ち上がる円筒形である。底面はほぼ平坦で、全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。覆土は4層に分層でき、自然堆積層である。遺物の出土はなかったが、覆土の締りの状況から判断して縄文時代と推定する。

2) 土坑SK179 (第9・10図)

調査区の南側に位置し、平面形は確認面で長径1.27m、短径1.20mを測り、円形を呈する。また検出面からの深度は最大60.8cmを測り、壁面は外傾気味に立ち上がる円筒形である。底面はほぼ平坦で、全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。覆土は3層に分層でき、自然堆積層である。遺物は完形に近い深鉢土器をはじめ、大型深鉢土器の破片等が覆土下層から出土した。時期は後期初頭・網取1式期である。

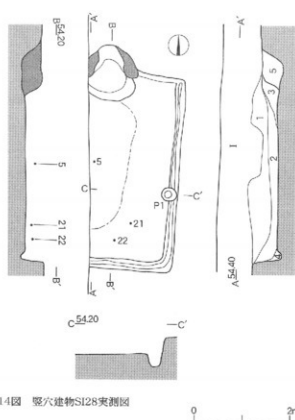
第10図1は4単位の波状口縁をもつ深鉢で、体部が外側に張り出す。波頂部はC字状沈線、もしくは横長のC字状沈線を口縁上端部まで延長させ、さらに縦位沈線で充填させる。口頸部は無文帯。胴部は二本の平行沈線によるJ字文を配し、沈線間を無文とする。地文は単節LRを充填させる。網取1式。2は大型の深鉢。幅狭の口縁部を無文帯とし、横位の鎖状隆帯を区画文とする。地文は単節LR縄文。網取1式。3は深鉢胴部破片。逆U字区画文を充填させる区画内はLR縄文を地文とする。1・2よりも古期であろう。

3) 土坑SK180 (第9図)

調査区の南側に位置し、平面形は確認面で長径1.07m、短径0.94mを測り、楕円形を呈する。また検出面からの深度は最大44.9cmを測り、壁面は垂直気味に立ち上がる。底面はほぼ平坦で、全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。覆土は3層に分層でき、自然堆積層である。遺物の出土はなかったが、覆土の締りの状況から判断して縄文時代と推定する。

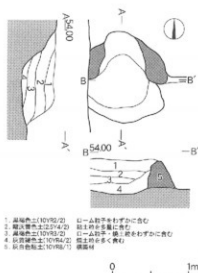
第3項 遺構外の縄文時代の遺物 (第11図)

1) 縄文土器 (第11図1~4)



第14図 竪穴建物SI28実測図

- 1 黒褐色土(10V95/1) 野焼土
- 2 黒褐色土(10V95/2) コーム状平多わずかに含む
- 3 黒褐色土(10V95/3) コーム状平多わずかに含む
- 4 黒褐色土(10V95/4) コーム状平・粘土質多わずかに含む
- 5 黒褐色土(10V95/5) コーム状平・コーム状ブロック少量含む
- 6 灰白色土(10V95/6) 水子付緑泥岩



- 1 黒褐色土(10V95/2) コーム状平多わずかに含む
- 2 黒褐色土(10V95/2) 粘土質多わずかに含む
- 3 黒褐色土(10V95/2) コーム状平・粘土質多わずかに含む
- 4 灰白色土(10V95/6) 野焼土

第15図 竪穴建物SI28カマド実測図

1は二本の平行溝線による交互充填施文。単節LRの細縄文を地文とする。後期初頭・称名寺1式期。2は単節LR縄文施文。3は単節RL縄文施文。4も単節RL縄文施文。2～4は中期終末・加曾利E4式に比定される。

2) 石器 (第11図5・6)

5は緑色凝灰岩製の定角式磨製石斧。断面隅丸方形を呈し、全体を丁寧に研磨されている。刃部の一部に刃潰れが認められる。長10.8cm、幅4.37cm、厚さ2.79cm、重量220.0gを測る。6は凝灰岩製の台石。表面は平坦に研磨され、中央に凹部を有する。長さ181.0cm、幅114.57cm、厚さ51.07cm、重量1,565.0gを測る。

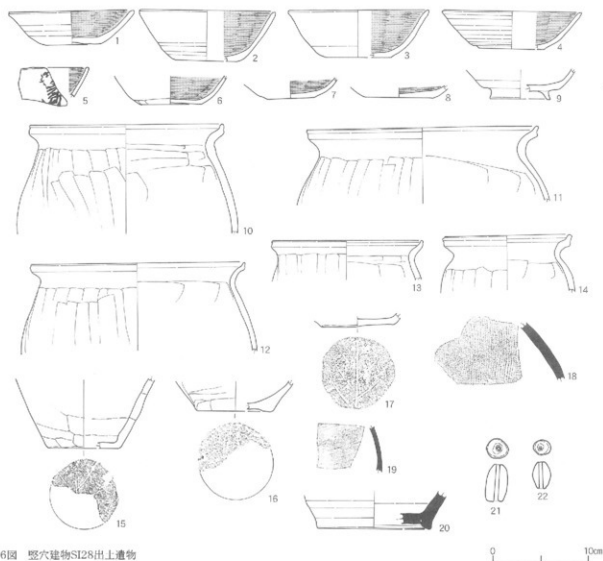
第4節 古代の遺構と遺物 (第12～181図)

第1項 竪穴建物跡

1) 竪穴建物跡SI01 (第12・13図)

調査区の中央に位置し、建物西側は第1次調査において発掘済である(小川他2008)。今回東側約1/3を調査することができ、これをもって完掘することができた。規模は南北軸長4.13m、検出された東西軸長1.50mで、第1次調査分を加えると3.87mを測り、平面形は方形となる。カマドは北壁に設置されており、主軸方位はN-14°-Wを示す。床面は平坦で、壁面は外観気味に立ち上がり、壁高は13.5～23.0cmを測る。壁溝は全周する。規模は上面幅で15.0～24.0cm、深さ3.5～14.5cmの横断面U字状を呈する。柱穴は1本穿ってある。P1は径41.0×30.0cmの楕円形、深さ53.0cmを測る。覆土はレンズ状堆積を示す自然堆積である。カマドは第1次調査で調査済みである。北壁面に設置されており、遺存状況は比較的良好であった。

遺物は土師器・灰。須恵器・灰、甕が出土している。1は土師器・灰。内面はヘラミガキの後に黒色処理を施している。2～5は須恵器である。2・3は灰。4は高台付灰。5は甕の下半部破片で、外面はタタキにより器面調整を施している。



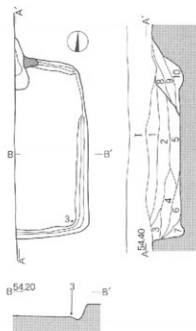
第16図 竪穴建物SI28出土遺物

これら出土遺物は9世紀前半に比定される。

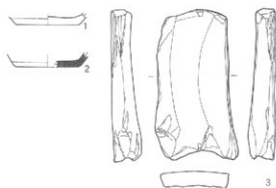
2) 竪穴建物跡SI28 (第14～16図)

調査区の北西側に位置し、建物西側は未調査区域に広がっており、全容を把握できない。規模は南北軸長4.10m、検出された東西軸長1.90mを測り、平面形は方形を呈するものと推定される。カマドは北壁に設置されており、主軸方位はN-6°-Wを示す。床面は平坦で、壁面はほぼ垂直気味に立ち上がり、壁高は33.0～44.0cmを測る。壁溝は北辺に掘削部の欠ける部分のみられるが、検出された東辺および南辺で確認される。規模は上面幅で16.5～23.5cm、深さ2.0～8.0cmの横断面U字状を呈する。柱穴は1本確認できた。P1は径30.0×29.0cmの円形、深さ28.0cmを測る。覆土は5層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。カマドは北壁辺に設置されており、遺存状況は良好である。北壁面を22.0～60.0cm半円形に掘り込んで煙道部としている。規模は焚口部から煙道部までの長さ120cm、検出された両袖間の最大幅101.0cm、袖部構築材は灰白色粘土で構築されている。

遺物は土師器・坏、高台付坏、甕、須恵器・甕が出土している。1～17は土師器である。1～8は坏で内面がヘラミガキの後に黒色処理を施している。1の底部は回転糸切り。5は外面に判読できないが墨書されている。9は高台付坏。内面はヘラミガキの後に黒色処理を施している。10～17は甕。10～14は内湾気味の体部から口縁部は強く

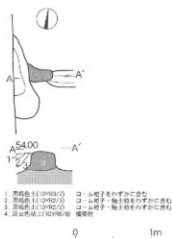


第17図 竪穴建物SI29実測図



第19図 竪穴建物SI29出土遺物

- | | |
|------------------|--------------|
| 1. 黒褐色土(SI99Q②) | 粘土質 |
| 2. 黒褐色土(SI99Q③) | ローム状平面的な面に含む |
| 3. 黒褐色土(SI99Q④) | ローム状平面的な面に含む |
| 4. 黒褐色土(SI99Q⑤) | ローム状平面的な面に含む |
| 5. 黒褐色土(SI99Q⑥) | ローム状平面的な面に含む |
| 6. 黒褐色土(SI99Q⑦) | ローム状平面的な面に含む |
| 7. 黒褐色土(SI99Q⑧) | ローム状平面的な面に含む |
| 8. 黒褐色土(SI99Q⑨) | ローム状平面的な面に含む |
| 9. 黒褐色土(SI99Q⑩) | ローム状平面的な面に含む |
| 10. 黒褐色土(SI99Q⑪) | ローム状平面的な面に含む |
| 11. 黒褐色土(SI99Q⑫) | ローム状平面的な面に含む |
| 12. 黒褐色土(SI99Q⑬) | ローム状平面的な面に含む |



第18図 竪穴建物SI29カマド実測図

外反し、口縁端部は積み上げられている。15～17の底部は木葉痕を残留している。18～20は須恵器。18・19は平行タタキ。21・22は土製品・管状土甕で、紡錘状を呈する。21は長さ4.04cm、幅2.17cm、孔径0.40cm、重量15.12g。22は長さ2.77cm、幅1.81cm、孔径0.43cm、重量7.10g。これら出土遺物は10世紀前葉に比定される。

3) 竪穴建物跡SI29 (第17～19図)

調査区の北西側に位置し、建物東側は未調査区域に広がっている。規模は南北軸長3.80m、検出された東西軸長1.55mを測り、平面形は方形を呈するものと推定される。カマドは北壁に設置されており、主軸方位はN-8°-Wを示す。床面は平坦で、壁面はほぼ垂直気味に立ち上がり、壁高は22.5～30.0cmを測る。壁溝は北辺に一部掘削部が欠ける部分が見られるが、検出された西辺および南辺で確認される。規模は上面幅で20.0～27.0cm、深さ3.0～6.0cmの横断面U字状を呈する。

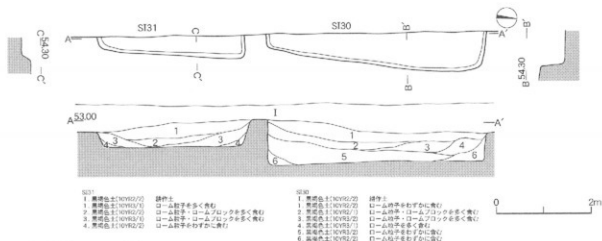
覆土は8層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。

カマドは北壁辺に設置されており、遺存状況は比較的良好である。北壁面を43.0cm三角形に掘り込んで煙道部としている。規模は焚口部から煙道部までの長さ110.0cm、検出された両軸間の最大幅50.0cm、袖部構築材は灰白色粘土で構築されている。

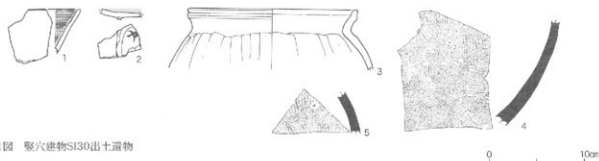
遺物は土師器・埴。須恵器・埴。石製品である砥石が出土している。3は珪質千枚岩製の砥石。長方形を呈し、表面および側面に研磨面が認められ、とくに表面は研ぎ減りし凹面となる。長さ15.7cm、幅7.22cm、厚さ1.90cm、重量420.5g。

これら出土遺物は9世紀代に比定される。

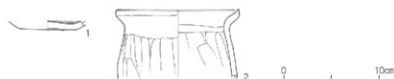
4) 竪穴建物跡SI30 (第20・21図)



第20図 竪穴建物SI30・31実測図



第21図 竪穴建物SI30出土遺物



第22図 竪穴建物SI31出土遺物

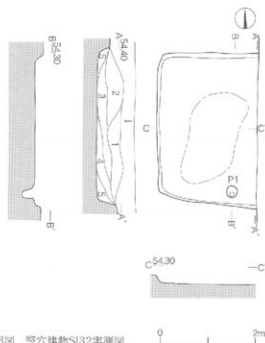
調査区の北西側に位置し、建物東側大半が未調査区域に広がっている。規模は南北軸長4.58m。検出された東西軸長0.78mを測り、平面形は方形を呈するものと推定される。カマドは北壁に設置されているものとする主軸方位はN-3°-Wを示す。床面は平坦で、壁面はほぼ垂直気味に立ち上がり、壁高は49.5~55.0cmを測る。覆土は6層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。

遺物は土師器・坏、高台付坏、甕、須恵器・甕が出土している。1~3は土師器である。1は坏の体部破片。内面はヘラミガキの後に黒色処理を施している。2は高台付坏の高台部の破片。高台は貼付け、内面はヘラミガキの後に黒色処理。底面に判読できないが墨書されている。4・5は須恵器。甕の胴部破片、外面は平行タキにより器面調整を施している。

これら出土遺物は9世紀代に比定される。

5) 竪穴建物跡SI31 (第20・22図)

調査区の北西側に位置し、建物東側大半が未調査区域に広がっている。規模は南北軸長3.04m。検出された東西軸



第23図 竪穴建物SI32実測図

- | | |
|-----------------|-------------------|
| 1. 須恵器Ⅰ(1995/7) | 須恵器 |
| 1. 須恵器Ⅰ(1995/7) | ローム型ターコームブロック多量含む |
| 2. 須恵器Ⅰ(1995/7) | ローム型ターコームブロック多量含む |
| 2. 須恵器Ⅰ(1995/7) | ローム型ターコームブロック多量含む |
| 4. 須恵器Ⅰ(1995/7) | ローム型ターコームブロック多量含む |
| 4. 須恵器Ⅰ(1995/7) | ローム型ターコームブロック多量含む |
| 4. 須恵器Ⅰ(1995/7) | ローム型ターコームブロック多量含む |

長0.41mを測り、平面形は方形を呈するものと推定される。カマドは北壁に設置されているものとする主軸方位は $N-7^{\circ}-W$ を示す。床面はほぼ平坦で、壁面は外傾気味に立ち上がり、壁高は12.5~23.5cmを測る。覆土は3層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。

遺物は土師器・坏、甕が出土している。1は坏の底部破片。内面はヘラミガキの後に黒色処理。2は小型甕。これら出土遺物は9世紀代に比定される。

6) 竪穴建物跡SI32 (第23図)

調査区の北西側に位置し、建物東側半分が未調査区域に広がっている。規模は南北軸長3.19m、検出された東西軸長2.12mを測り、平面形は方形を呈するものと推定される。カマドは北壁に設置されているものとする主軸方位は $N-2^{\circ}-W$ を示す。床面はほぼ平

坦で、壁面はほぼ垂直気味に立ち上がり、壁高は7.0~13.5cmを測る。内壁際に梯子穴が穿ってある。径2.4.0×22.0cm、深さ25.0cm。覆土は5層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。

遺物は出土しなかったが、9世紀代と推定する。

7) 竪穴建物跡SI33 (第24~26図)

調査区の南西側に位置し、建物東壁辺のみ未調査区域に広がっている。規模は南北軸長4.43m、検出された東西軸長4.51mを測り、平面形は方形。カマドは北壁に設置されており、主軸方位は $N-15^{\circ}-W$ を示す。床面はほぼ平坦で、壁面は外傾して立ち上がり、壁高は23.0~36.0cmを測る。壁溝は北辺に一部掘削部が欠ける部分がみられるが、検出された西辺および南辺で確認される。規模は上面幅で15.0~39.0cm、深さ6.0~23.5cmの横断面U字状を呈する。柱穴は主柱穴4本が穿ってある。P1は径62.0×58.0cmの円形、深さ58.5cm。P2は径40.0×28.0cmの楕円形、深さ54.5cm。P3は径47.0×43.0cmの円形、深さ41.5cm。P4は径62.0×55.0cmの円形、深さ51.3cmを測る。覆土は4層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。

カマドは北壁辺に設置されており、遺存状況は比較的良好である。北壁面を26.0~32.0cm三角形に掘り込んで煙道部としている。規模は焚口部から煙道部までの長さ109.0cm、検出された両袖間の最大幅95.0cm、袖部構築材は灰白色粘土で構築されている。

遺物は土師器・坏、甕。須恵器・坏が出土している。

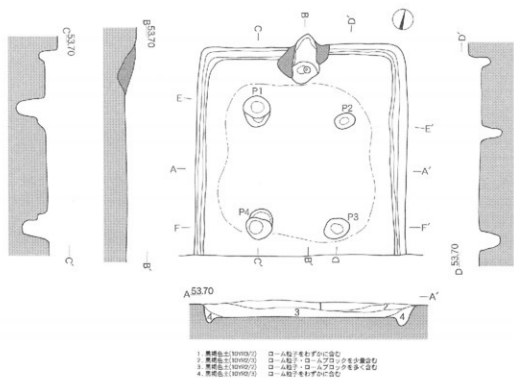
1・2は土師器。1は坏で底部回転糸切り痕を残す。流れ込み資料であろう。2は甕。膨らむ体部から口縁部が僅かに外反する。3・4は須恵器・坏。底部回転ヘラキリ。

これら出土遺物は8世紀後葉に比定される。

8) 竪穴建物跡SI62 (第27図)

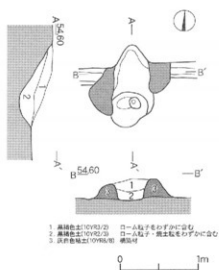
調査区の南側に位置し、建物東側大半が未調査区域に広がっている。検出された規模は南北軸長2.05m、東西軸長0.23mを測り、平面形は方形を呈するものと推定される。カマドは北壁に設置されたものとする主軸方位は $N-12^{\circ}-W$ を示す。床面はほぼ平坦で、壁面はほぼ垂直気味に立ち上がり、壁高は18.5~24.0cmを測る。覆土は4層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。

遺物は出土しなかったが、覆土の状況から9世紀代と推定される。



第24図 竪穴建物SI33実測図

0 2m



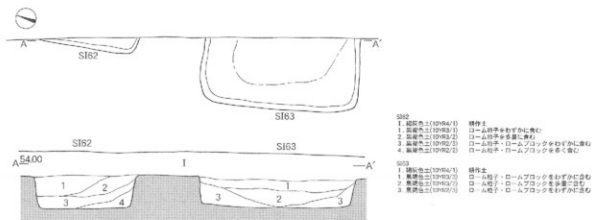
第25図 竪穴建物SI33カマド実測図

0 1m

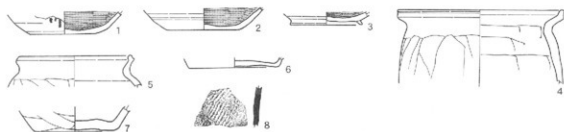


第26図 竪穴建物SI33出土遺物

0 10cm



第27回 竪穴建物SI62・63実測図



第28回 竪穴建物SI63出土遺物

9) 竪穴建物跡SI63 (第27・28回)

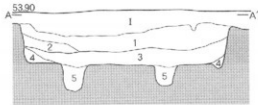
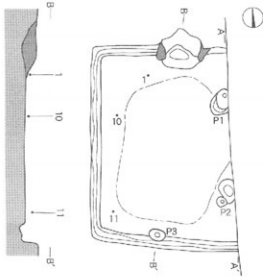
調査区の南側に位置し、建物東側が未調査区域に広がっている。規模は南北軸長3.28m、検出された東西軸長1.52mを測り、平面形は方形を呈するものと推定される。カマドが北壁に設置されているものとする主軸方位は $N-10^{\circ}-W$ を示す。床面はほぼ平坦で、壁面は外傾気味に立ち上がり、壁高は21.5~28.0cmを測る。覆土は3層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。

遺物は土師器・坏、高台付杯、甕、須恵器・甕が出土している。1~7は土師器。1は坏の体部下半部の破片。口クロ成形で、底部は二次底部面を有し、二次底部面および底部は回転ヘラケズリ。内面はヘラミガキの後に黒色処理を施し、外面に判読できないが墨書されている。3は高台付杯の高台部の破片。高台は貼付け、内面はヘラミガキの後黒色処理。4~7は甕。4・5は内湾気味の体部から口縁部は強く外反し、口縁端部は摘み上げられている。8は須恵器・甕。胴部破片で、外面は平行タタキにより器面調整を施している。

これら出土遺物は9世紀後葉に比定される。

10) 竪穴建物跡SI64 (第29~31回)

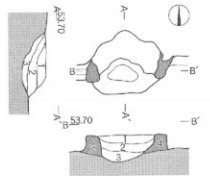
調査区の南側に位置し、建物東側が未調査区域に広がっている。規模は南北軸長4.20m、検出された東西軸長2.91mを測り、平面形は方形を呈するものと推定される。カマドは北壁に設置されており、主軸方位は $N-3^{\circ}-E$ を示す。床面は平坦で、壁面はほぼ垂直気味に立ち上がり、壁高は16.0~30.5cmを測る。壁溝は北辺に一部掘削部が欠ける部分がみられるが、検出された北辺西側、西辺および南辺で確認される。規模は上面幅で15.4~24.0cm、深さ4.0~8.0cmの横断面U字状を呈する。柱穴は主柱穴2本と梯子穴と思われる南辺際に重複して3本穿っている。P1は径23.0×20.0cmの円形、深さ55.3cm。P2は径35.0×22.0cmの楕円形、深さ11.7cm。P3は径15.0×



第29図 竪穴建物SI64実測図

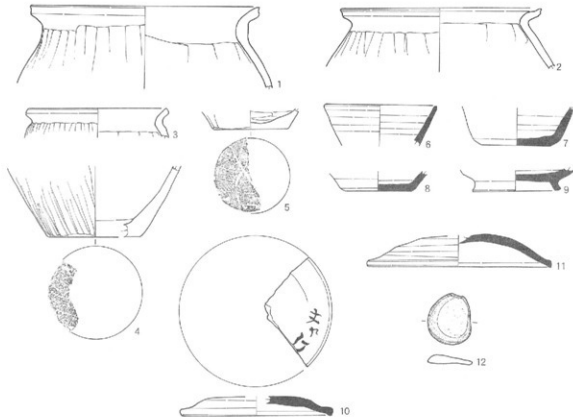
0 2m

- | | |
|-----------------|----------------------|
| 1 褐色土(10YR4/1) | ローム地すべりかじ遺構 |
| 2 褐色土(10YR4/2) | ローム地すべり・ロームブロックを多数含む |
| 3 黄褐色土(10YR5/2) | ローム地すべり・ロームブロックを多数含む |
| 4 黄褐色土(10YR5/2) | ローム地すべり・ロームブロックを多く含む |
| 5 黒色土(10YR2/1) | ローム地すべりかじ遺構 |



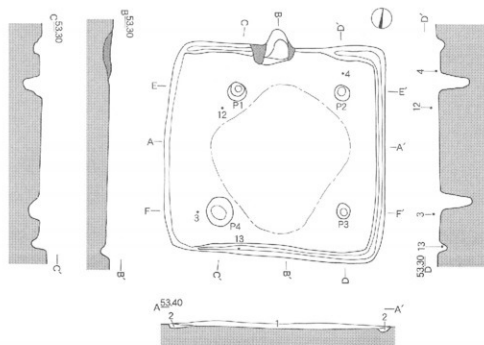
- | | |
|-----------------|----------------------|
| 1 褐色土(10YR4/1) | ローム地すべりかじ遺構 |
| 2 褐色土(10YR4/2) | 羅土層を多数含む・ローム地すべりかじ遺構 |
| 3 黄褐色土(10YR5/2) | ローム地すべりを含む |
| 4 黄褐色土(10YR5/2) | ローム地すべり |

第30図 竪穴建物SI64カマド実測図

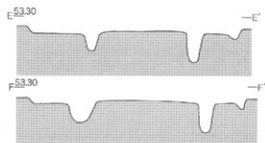


第31図 竪穴建物SI64出土遺物

0 10cm

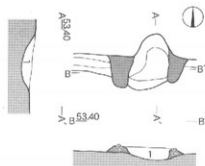


1. 北壁(埋土170/95/40)ローム粘土・ロームブロックをわずかに含む
2. 埋土(赤土10/9/2) ローム粘土をわずかに含む



第32図 竪穴建物SI65実測図

0 2m



1. 北壁(埋土170/95/40)ローム粘土・埋土をわずかに含む
2. 灰白色粘土(10/9/2) カマド実測図

第33図 竪穴建物SI65カマド実測図

0 1m

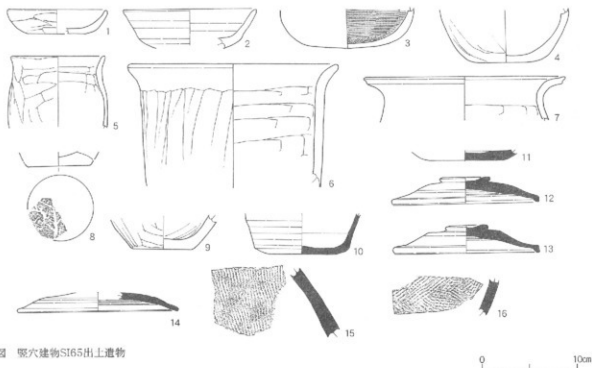
13.5cmの円形、深さ13.9cmを測る。覆土は5層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。カマドは北壁辺に設置されており、遺存状況は比較的良好である。北壁面を36.0～48.0cm半円形に掘り込んで煙道部としている。規模は焚口部から煙道部までの長さ87.0cm、検出された両袖間の最大幅125.0cm、袖部構築材は灰白色粘土で構築されている。

遺物は土師器・残。須恵器・坏、高台付坏、蓋。石製品の磨石が出土している。

1～5は土師器。1～3は甕。内湾気味の体部から口縁部は強く外反し、口縁端部は摘み上げられている。4・5は底部に木葉痕を残置している。6～11は須恵器。10は蓋。墨書がみられる。12は砂岩製の磨石。長さ5.30cm、幅4.52cm、厚さ1.02cm、重量31.58g。これら出土遺物は9世紀前葉に比定される。

11) 竪穴建物跡SI65 (第32～34図)

調査区の南側に位置し、規模は南北軸長4.36m、東西軸長4.59mを測り、平面形は方形。カマドは北壁に設置され



第34図 竪穴建物SI65出土遺物

ており、主軸方位は $N-8^{\circ}-W$ を示す。床面は平坦で、壁面はほぼ垂直気味に立ち上がり、壁高は $6.0\sim 18.0\text{cm}$ を測る。壁溝は西辺と北辺に一部掘削部が欠ける部分が見られるが、検出された東辺および南辺で確認される。規模は上面幅で $18.0\sim 30.0\text{cm}$ 、深さ $3.5\sim 17.0\text{cm}$ の横断面U字状を呈する。柱穴は主柱穴4本穿ってある。P1は径 $38.0\times 36.0\text{cm}$ の円形、深さ 32.3cm 。P2は径 $36.0\times 32.5\text{cm}$ の円形、深さ 63.5cm 。P3は径 $35.0\times 30.0\text{cm}$ の円形、深さ 65.0cm 。P4は径 $60.0\times 52.0\text{cm}$ の円形、深さ 35.3cm を測る。覆土は2層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。カマドは北壁辺に設置されており、遺存状況はやや不良である。北壁面を 30.0cm 半円形に掘り込んで煙道部としている。規模は焚口部から煙道部までの長さ 71.0cm 、検出された両袖間の最大幅 82.0cm 、袖部構築材は灰白色粘土で構築されている。

遺物は土師器・坏、埴、甕、須恵器・坏、蓋、甕が出土している。1～9は土師器。1は坏。体部ヘラケズリ。10～16は須恵器。12～14は蓋。扁平のツマミが付く。15・16は甕の胴部破片で、外面はタタキにより器面調整を施している。これら出土遺物は8世紀中葉に比定される。

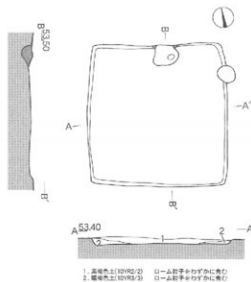
12) 竪穴建物跡SI66 (第35～37図)

調査区の南側に位置する。規模は南北軸長 2.89m 、東西軸長 2.91m を測り、平面形は方形。カマドは北壁に設置されており、主軸方位は $N-0^{\circ}$ を示す。床面は平坦で、壁面は外傾気味に立ち上がり、壁高は $2.5\sim 15.5\text{cm}$ を測る。覆土は2層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。カマドは北壁辺に設置されており、遺存状況は不良である。北壁面の掘り込みはなく、規模は焚口部から煙道部までの長さ 112.0cm 、検出された両袖間の最大幅 72.0cm 、袖部構築材は灰白色粘土で構築されている。

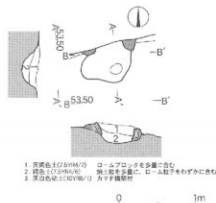
遺物は須恵器・甕の破片が出土。外面はタタキにより器面調整を施している。9世紀代と推定される。

13) 竪穴建物跡SI67 (第38～40図)

調査区の南側に位置し、規模は南北軸長 3.00m 、東西軸長 3.11m を測り、平面形は方形。カマドは北壁に設置されており、主軸方位は $N-3^{\circ}-W$ を示す。床面は平坦で、壁面は外傾気味に立ち上がり、壁高は $16.0\sim 21.0\text{cm}$ を測る。壁溝は全周し、上面幅で $8.0\sim 21.0\text{cm}$ 、深さ $2.0\sim 3.0\text{cm}$ の横断面U字状を呈する。覆土は2層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。カマドは北壁辺に設置されており、遺存状況は比較的良好である。北壁面を $62.0\sim$



第35図 竪穴建物SI66実測図



第36図 竪穴建物SI66カマド実測図



第37図 竪穴建物SI66出土遺物

63.0cm三角形に掘り込んで煙道部としている。規模は焚口部から煙道部までの長さ117.0cm、検出された両袖間の最大幅86.0cm、袖部構築材は灰白色粘土で構築されている。

遺物は土師器・皿、甕、須恵器・坏、甕が出土。1～8は土師器。1は皿で外面に墨書「大家」と習書されている。2～4は甕。5・6は須恵器。5の坏底部は回転ヘラキリ。6は甕の胴部破片で、外面はタタキにより器面調整を施している。これら出土遺物は9世紀後葉に比定される。

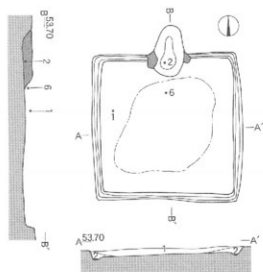
14) 竪穴建物跡SI68 (第41～43図)

調査区の南側に位置し、規模は南北軸長3.56m、東西軸長3.39mを測り、平面形は方形。カマドは北壁に設置されており、主軸方位はN-11°-Wを示す。床面は平坦で、壁面はほぼ垂直気味に立ち上がり、壁高は17.5～34.5cmを測る。壁溝は北辺に一部掘削部が欠ける部分が見られる。規模は上面幅で12.0～23.0cm、深さ16.0cmの横断面U字状を呈する。柱穴は梯子穴で、P1は径35.0×23.0cmの楕円形、深さ35.0cmを測る。覆土は3層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。カマドは北壁辺に設置されており、遺存状況はやや不良である。北壁面を63.0～76.0cm三角形に掘り込んで煙道部としている。規模は焚口部から煙道部までの長さ121.0cm、検出された両袖間の最大幅102.0cm、袖部構築材は灰白色粘土で構築されている。

遺物は土師器・甕、須恵器・坏、高坏が出土。1～4は土師器・甕。1・2は内湾気味の体部から口縁部は強く外反し、口縁端部は揃み上げられている。5～7は須恵器。5の坏底部は回転ヘラキリ。これら出土遺物は8世紀後葉に比定される。

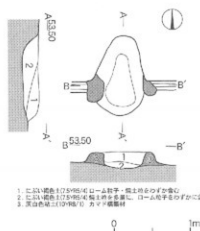
15) 竪穴建物跡SI69 (第44～46図)

調査区の南側に位置し、規模は南北軸長3.32m、東西軸長3.61mを測り、平面形は方形。カマドは北壁東寄りに設置されており、主軸方位はN-8°-Wを示す。床面は平坦で、壁面は外傾気味に立ち上がり、壁高は10.0～26.0cmを測る。壁溝はほぼ全周するが、カマド脇に掘削部が欠ける部分が見られる。規模は上面幅で13.5～28.0cm、深さ0.5～14.0cmの横断面U字状を呈する。覆土は5層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。カマドは北壁辺に設置されており、遺存状況は比較的良好である。北壁面を50.0～71.0cm楕円形に掘り込んで煙道部としている。規模は焚口部から煙道部までの長さ112.0cm、検出された両袖間の最大幅117.0cm、袖部構築材は灰白色粘土で構



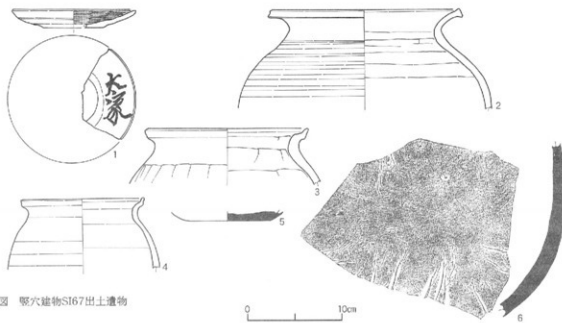
1. 黒褐色土(10VYR2-2) ローム粘土・ロームブロックをのぶかに塗布
2. 黒褐色土(10VYR3-2) ローム粘土・ロームブロックをのぶかに塗布

第38図 竪穴建物SI67実測図



1. 黒褐色土(10VYR2-2) ローム粘土・粘土塊をのぶかに塗布
2. 黒褐色土(10VYR3-2) ローム粘土・粘土塊をのぶかに塗布
3. 黒褐色土(10VYR2-2) カマド構築材

第39図 竪穴建物SI67カマド実測図



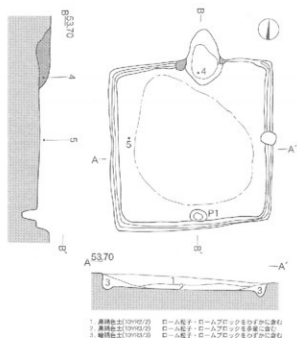
第40図 竪穴建物SI67出土遺物

築されている。

遺物は土師器・杯、高台付杯、甕。1の杯体部はヘラケズリ。2～6は高台付杯。内面はヘラミガキの後に黒色処理を施している。2の外面に判読できないが墨書されている。これら出土遺物は9世紀前葉に比定される。

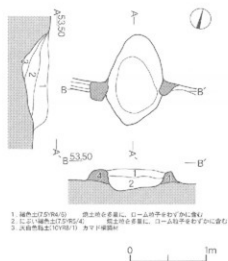
16) 竪穴建物跡SI70 (第47・48図)

調査区の中央に位置する。建物東側半分が未調査区域に広がっている。規模は南北軸長3.48m。検出された東西軸長1.54mを測り、平面形は方形を呈するものと推定される。カマドは北壁に設置されているものとする主軸方位はN-7°-Wを示す。床面は平坦で、壁面はほぼ垂直気味に立ち上がり、壁高は8.5～15.5cmを測る。覆土は4層に

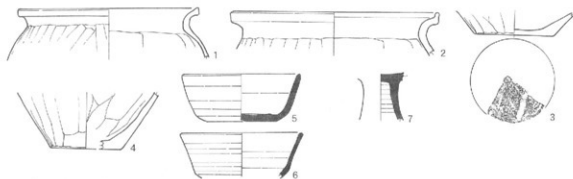


第41図 竪穴建物SI68実測図

0 1 2m



第42図 竪穴建物SI68カマド実測図



第43図 竪穴建物SI68出土遺物

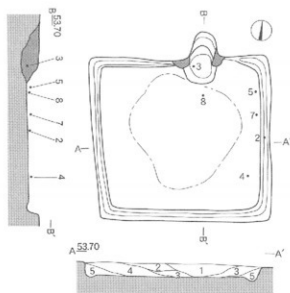
0 10cm

分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。

遺物は土師器・坏が出土している。1の坏内面はヘラミガキが施している。9世紀代と推定する。

17) 竪穴建物跡SI71 (第49～51図)

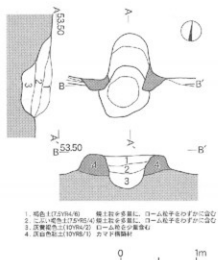
調査区の中央に位置し、規模は南北軸長3.16m、東西軸長3.79mを測り、平面形は方形。カマドは北壁に設置されており、主軸方位はN-1°-Eを示す。床面は平坦で、壁面はほぼ垂直気味に立ち上がり、壁高は8.0～18.5cmを測る。壁溝は北辺東側と東辺北側に掘削部が欠ける部分が見られる。規模は上面幅で12.5～15.5cm、深さ0.5～6.5cmの横断面U字状を呈する。柱穴は隅柱穴4本と梯子穴1本の計5本が穿ってある。隅柱穴のP1は径19.0×17.5cmの円形、深さ21.0cm。P2は径17.5×16.5cmの円形、深さ22.0cm。P3は径16.5×15.0cmの円形、深さ23.0cm。P4は径18.0×15.0cmの円形、深さ25.0cm。梯子穴P5は径20.0×20.0cmの円形、深さ8.0cm。覆土は2層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。カマドは北壁辺に設置されており、遺存状況は比較的良好で



- | | |
|----------------|-------------------------|
| 1. 厚焼色土10YR6/2 | ローム粘土・ロームブロックをわずかに含む |
| 2. 褐色土10YR6/4 | ローム粘土を多く、ロームブロックをわずかに含む |
| 3. 厚焼色土10YR6/3 | ローム粘土・ロームブロックをわずかに含む |
| 4. 赤褐色土10YR5/2 | ローム粘土・ロームブロックを多く含む |
| 5. 厚焼色土10YR6/3 | ローム粘土・ロームブロックをわずかに含む |

第44図 竪穴建物SI69実測図

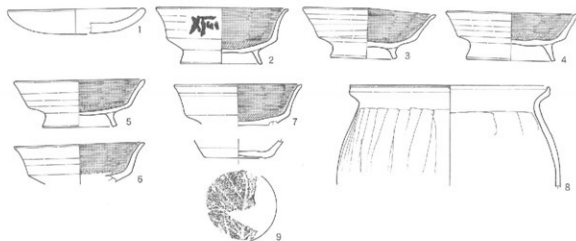
0 2m



- | | |
|----------------|--------------|
| 1. 褐色土10YR6/4 | ローム粘土を多く含む |
| 2. 赤褐色土10YR5/2 | ローム粘土を多く含む |
| 3. 厚焼色土10YR6/3 | ローム粘土をわずかに含む |
| 4. 厚焼色土10YR6/3 | ローム粘土を多く含む |

第45図 竪穴建物SI69カマド実測図

0 1m



第46図 竪穴建物SI69出土遺物

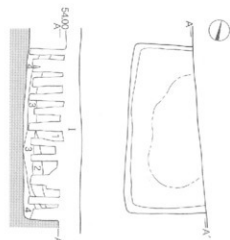
0 10cm

ある。北壁面を47.0～50.0cm楕円形に掘り込んで煙道部としている。規模は焚口部から煙道部までの長さ118.0cm、検出された両袖間の最大幅97.0cm、袖部構築材は灰白色粘土で構築されている。

遺物は土師器・甕、須恵器・坏、益、甕が出土。1～4は土師器・甕で、3の底部に木葉痕が残留している。5～9は須恵器。6の坏底部は手持ちヘラケズリ。これら出土遺物は9世紀前葉に比定される。

18) 竪穴建物跡SI72 (第52～54図)

調査区の中央に位置し、規模は南北軸長3.30m、東西軸長3.85mを測り、平面形は方形。カマドは北壁に設置されており、主軸方位はN-11°-Wを示す。床面は平坦で、壁面は外傾気味に立ち上がり、壁高は9.0～16.0cmを測る。



第47図 竪穴建物SI70実測図



第48図 竪穴建物SI70出土遺物

- | | |
|------------------|---------------------|
| 1. 須恵器Ⅱ(12/98/1) | 須恵器Ⅱ |
| 2. 須恵器Ⅱ(12/98/2) | ローム粘土をわずかに含む |
| 3. 須恵器Ⅱ(12/98/3) | ローム粘土・ロームフロッグを多量に含む |
| 4. 須恵器Ⅱ(12/98/2) | ローム粘土・ロームフロッグを多く含む |

壁溝は北辺西側、西辺北側に掘削部が欠ける部分がみられる。規模は上面幅で11.0～24.0cm、深さ2.0～11.5cmの横断面U字状を呈する。柱穴は8本穿ってある。主柱穴4本と壁柱穴4本で、主柱穴P1は径18.5×17.0cmの円形、深さ52.5cm、P2は径18.5×18.0cmの円形、深さ53.5cm、P3は径21.5×19.5cmの円形、深さ48.5cm、P4は径19.0×17.0cmの円形、深さ49.5cm、壁柱穴北側P5は径18.0×15.0cmの円形、深さ40.1cm、P6は径25.0×21.0cmの楕円形、深さ37.0cm、壁柱穴南側P7は径22.0×16.5cmの楕円形、深さ39.0cm、P8は径22.0×20.0cmの円形、深さ47.0cmを測る。覆土は2層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。カマドは北壁辺に設置されており、遺存状況はやや不良である。北壁面を25.0～43.0cm半円形に掘り込んで煙道部としている。規模は焚口部から煙道部までの長さ117.0cm、検出された両袖間の最大幅132.0cm、袖部構築材は灰白色粘土で構築されている。

遺物は土師器・坏、甕。須恵器・甕。土製品である管状土鍾5点、1～3は土師器、1の坏体部はヘラケズリ、4の須恵器・甕の胴部破片で、外面はタタキにより器面調整を施している。5～9は管状土鍾である。計測は下記のとおりである。

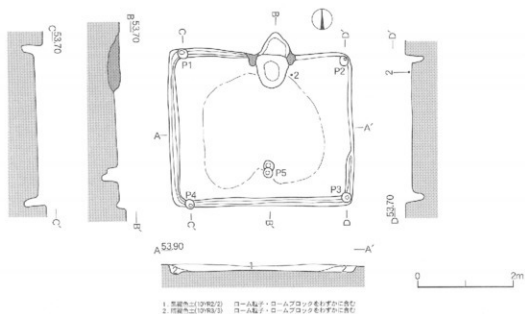
番号	長さcm	幅cm	孔径	重量g	番号	長さcm	幅cm	孔径	重量g	番号	長さcm	幅cm	孔径	重量g
5	5.96	1.62	0.47	14.26	6	5.81	1.26	0.40	8.18	7	5.30	1.15	0.49	4.68
8	4.07	1.30	0.50	4.10	9	4.94	1.37	0.50	6.22					

これら出土遺物は8世紀前半に比定される。

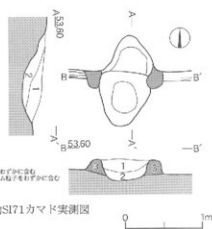
19) 竪穴建物跡SI73 (第55～57図)

調査区の中央に位置し、規模は南北軸長4.63m、東西軸長4.48mを測り、平面形は方形。カマドは北壁に設置されており、主軸方位はN-4°-Wを示す。床面は平坦で、壁面は外傾気味に立ち上がり、壁高は17.0～27.0cmを測る。壁溝はほぼ全周し、規模は上面幅で14.0～38.0cm、深さ2.5～17.5cmの横断面U字状を呈する。柱穴は主柱穴4本とカマド両脇の壁柱穴2本の6本穿ってある。主柱穴P1は径33.0×26.0cmの楕円形、深さ43.0cm、P2は径36.0×30.0cmの楕円形、深さ62.5cm、P3は径44.5×40.0cmの円形、深さ53.0cm、P4は径55.0×47.0cmの楕円形、深さ63.5cm、壁柱穴西側P5は径34.0×24.0cmの楕円形、深さ40.0cm、東側P6は径34.0×29.0cmの楕円形、深さ47.0cm、覆土は4層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。カマドは北壁辺に設置されており、遺存状況は比較的良好である。北壁面を51.0～60.0cm三角形に掘り込んで煙道部としている。規模は焚口部から煙道部までの長さ144.0cm、検出された両袖間の最大幅135.0cm、袖部構築材は灰白色粘土で構築されている。

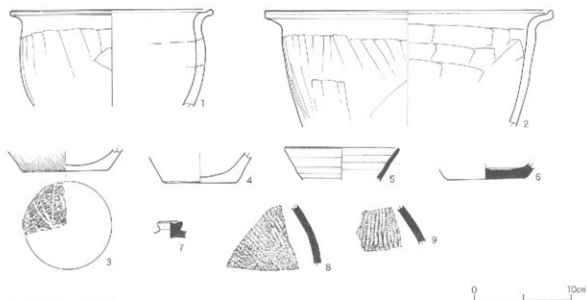
遺物は土師器・甕。須恵器・坏、甕。石製品である砥石。1～4は土師器・甕、5～10は須恵器で、5・7・8



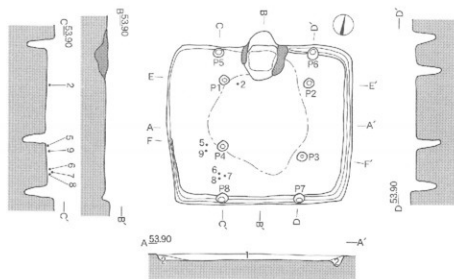
第49図 竪穴建物SI71実測図



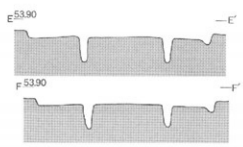
第50図 竪穴建物SI71カマド実測図



第51図 竪穴建物SI71出土遺物

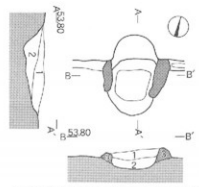


- 1 黒褐色土(NV93/1) ローム粘土・ロームブロックをわずかに含む
- 2 黒褐色土(NV93/2) ローム粘土・ロームブロックをわずかに含む



第52図 竪穴建物SI72実測図

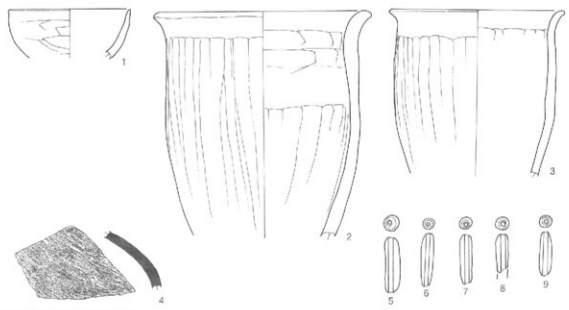
0 2m



- 1 IC511層位土(TS195-4) 黒土灰を多量に、ローム粘土をわずかに含む
- 2 黒褐色土(TS195/2) ローム粘土・黒土灰をわずかに含む
- 3 灰中褐色土(NV94/1) カキ土層位

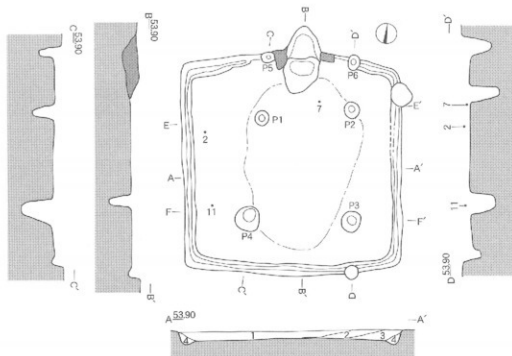
第53図 竪穴建物SI72カマド実測図

0 1m

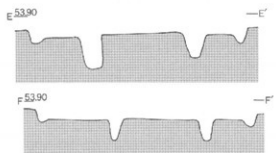


第54図 竪穴建物SI72出土遺物

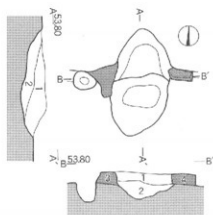
0 10cm



1. 黒褐色土(10%以下) 2. 黒褐色土(10%以下) 3. 黒褐色土(10%以下) 4. 黒褐色土(10%以下)
5. 赤褐色土(10%以下) 6. 赤褐色土(10%以下) 7. 赤褐色土(10%以下) 8. 赤褐色土(10%以下)
9. 赤褐色土(10%以下) 10. 赤褐色土(10%以下) 11. 赤褐色土(10%以下) 12. 赤褐色土(10%以下)



第55図 竪穴建物SI73実測図



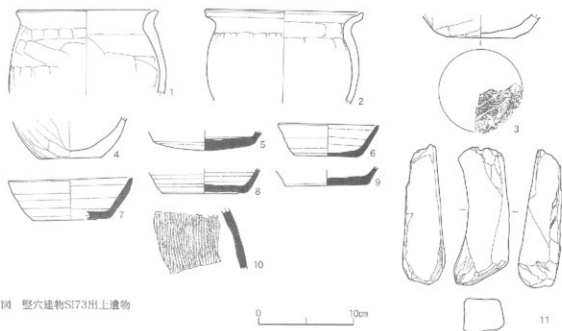
1. 黒褐色土(10%以下) 2. 黒褐色土(10%以下) 3. 黒褐色土(10%以下) 4. 黒褐色土(10%以下)
5. 赤褐色土(10%以下) 6. 赤褐色土(10%以下) 7. 赤褐色土(10%以下) 8. 赤褐色土(10%以下)
9. 赤褐色土(10%以下) 10. 赤褐色土(10%以下) 11. 赤褐色土(10%以下) 12. 赤褐色土(10%以下)

第56図 竪穴建物SI73カマド実測図

の底部回転ヘラキリ。9は手持ちヘラケズリ。10は糞で外面はタタキにより器面調整を施している。11は凝灰岩製の底石。わずかに弓なりに湾曲し、断面長方形。表面および両側面に研磨面がみられ、とくに図左側面の研ぎ減りは著しい。長さ14.49cm、幅5.64cm、厚さ4.35cm、重量465.0g。これら出土遺物は8世紀中葉に比定される。

20) 竪穴建物跡SI74 (第58・59図)

調査区の中央に位置し、規模は南北軸長4.48m、東西軸長5.03mを測り、平面形は方形。削平されているが、カマドは北壁に設置されており、主軸方位は $N-10^{\circ}-W$ を示す。床面は平坦で、壁面は外傾気味に立ち上がり、壁高は1.0~6.5cmを測る。壁溝はほぼ全周し、規模は上面幅で10.0~22.0cm、深さ4.0~13.0cmの横断面U字状を呈する。柱穴は主柱穴4本と梯子穴1本の5本穿ってある。主柱穴P1は径32.0×30.0cmの円形、深さ47.5cm。P2は



第57回 竪穴建物SI73出土遺物

径41.5×28.0cmの楕円形、深さ71.0cm。P 3は径51.0×48.0cmの円形、深さ32.5cm。P 4は径43.0×39.0cmの円形、深さ22.4cm。梯子穴P 5は径36.5×34.0cmの円形、深さ20.1cmを測る。覆土は黒褐色土の単一層。自然堆積である。カマドは削平され、規模等について不明である。

遺物は土師器・甕。須恵器・蓋。土製品である管状土鉢。1～3は土師器。4は須恵器。3の底部はヘラケズリ。5は管状土鉢で、紡錘状を呈する。長さ4.46cm、幅1.45cm、孔径0.60cm、重量7.72g。これら出土遺物は8世紀中葉に比定される。

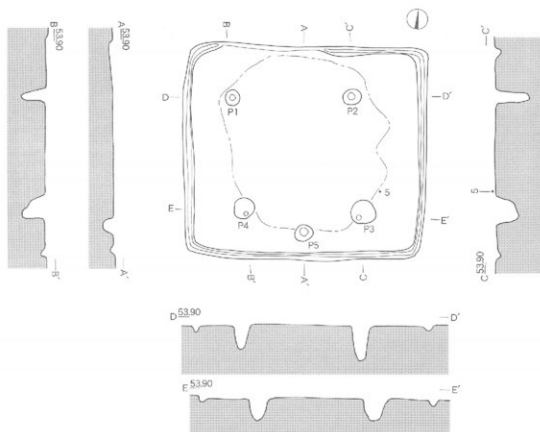
21) 竪穴建物跡SI75 (第60～62回)

調査区の中央に位置し、建物西側半分は未調査区域に広がっている。規模は南北軸長5.54m、検出された東西軸長2.70mを測り、平面形は方形を呈するものと推定される。カマドは北壁に設置されており、主軸方位はN-11°-Wを示す。床面は平坦で、壁面は外傾気味に立ち上がり、壁高は3.0cmを測る。壁溝は東辺に一部掘削部が欠ける部分のみみられる。規模は上面幅で12.0～19.0cm、深さ4.0～12.0cmの横断面U字状を呈する。柱穴は支柱穴2本検出できた。P 1は径38.5×34.0cmの円形、深さ67.1cm。P 2は径45.0×42.0cmの円形、深さ61.9cmを測る。覆土は明瞭ではない。カマドは北壁辺に設置されており、遺存状況は不良である。北壁面を6.0cm半円形に掘り込んで煙道部としている。規模は焚口部から煙道部までの長さ71.0cm、検出された両袖間の最大幅72.0cm、袖部構築材は灰白色粘土で構築されている。

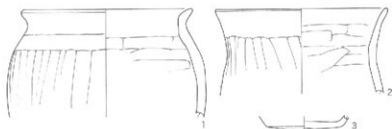
遺物は土師器・甕が出土。1の口縁部は短く外反する。2の底部に木葉痕が残留する。これら出土遺物は8世紀代に比定される。

22) 竪穴建物跡SI76 (第63～64回)

調査区の中央に位置し、規模は南北軸長2.24m、東西軸長2.25mを測り、平面形は方形。カマドは北壁に設置されており、主軸方位はN-12°-Wを示す。床面は平坦で、壁面は外傾気味に立ち上がり、壁高は6.5cmを測る。柱穴は梯子穴1本が穿ってある。P 1径21.0×18.5cmの円形、深さ26.0cmを測る。覆土は自然堆積であろう。カマドは北壁辺に設置されているものの、遺存状況は不良で、袖部が削平されている。北壁面を28.0～44.0cm半円形に掘り込んで煙道部としている。規模は焚口部から煙道部までの長さ70.0cm、検出された両袖間の火床部は最大幅43.0cmを測る。



第58図 竪穴建物SI74実測図

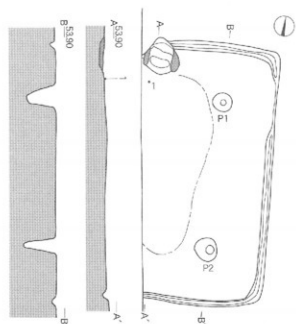


第59図 竪穴建物SI74出土遺物

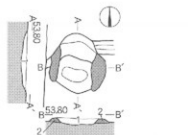
遺物は土師器・甕が出土。底部破片である。9世紀代と推定する。

23) 竪穴建物跡SI77 (第65・66図)

調査区の中央に位置し、建物東側は未調査区域に広がっている。規模は南北軸長3.61m、検出された東西軸長3.82mを測り、平面形は方形を呈するものと推定される。削平されているが、カマドは北壁に設置されており、主軸方位はN-13°-Wを示す。床面は平坦で、壁面は外傾して立ち上がり、壁高は7.5~20.0cmを測る。壁溝はほぼ全周し、規模は上面幅で11.0~23.0cm、深さ0.5~16.5cmの横断面U字状を呈する。柱穴は主柱穴1本と梯子穴1本の2本が検出できた。主柱穴P1は径26.5×19.5mの楕円形、深さ57.5cm。出入口部の規模は、南北軸長67.0cm、東西軸長101.0cmを測り、その内側に梯子穴P2が穿ってある。径59.0×42.0cmの円形、深さ5.2cmを測る。カマドは削平され規模等は不明である。覆土は4層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。

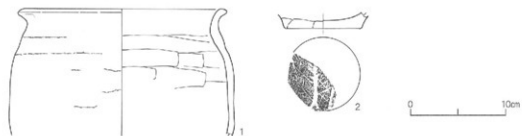


第60図 竪穴建物SI75実測図



1. 北壁の褐色土の下の層に埋もれた須恵器、ローム製手板の跡に接する
2. 褐色土の下の層に埋もれたカマド遺構

第61図 竪穴建物SI75カマド実測図



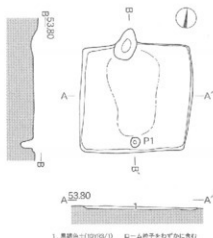
第62図 竪穴建物SI75出土遺物

遺物は土師器・坏、甕。須恵器・坏、甕。石製品である紡錘車、鉄製品である鉄鏝が出土している。1～5は土師器。1の坏底部は回転ヘラケズリ。内面はヘラミガキの後に黒色処理を施している。4の甕底部に木葉痕が残留する。6～9は須恵器。6・7の坏底部はいずれも手持ちヘラケズリ。9は甕の胴部破片で、外面はタキにより器面調整を施している。10は滑石製紡錘車。側面を直線的に削って調整して円筒形としており、丁寧な造作である。上面径4.36cm、下面径4.07cm、高さ2.88cm、孔径0.69cm、重量108.5g。11は鉄鏝の茎部折損品。錆化が著しい。長さ3.31cm、刃幅1.23cm、刃厚さ0.21cm、重量4.18g。

これら出土遺物は8世紀中葉に比定される。

24) 竪穴建物跡SI78 (第67～69図)

調査区の中央に位置し、北東および南東側に擾乱を受けている。規模は南北軸長2.44m、東西軸長3.37mを測り、平面形は長方形を呈する。カマドは東壁に設置されており、主軸方位はN-87°-Eを示す。床面は平坦で、壁面は外傾して立ち上がり、壁高は6.5cmを測る。覆土は自然堆積である。カマドは東壁辺に設置されており、遺存状況はやや不良である。北壁面を50.0cm半円形に掘り込んで煙道部としている。規模は焚口部から煙道部までの長さ



第63図 竪穴建物SI76実測図



第64図 竪穴建物SI76出土遺物

73.0cm、検出された両袖間の最大幅66.0cm、袖部構築材は灰白色粘土で構築されている。

遺物は須恵器・坏が出土。2の坏底部は回転ヘラケズリ。9世紀前葉と推定する。

25) 竪穴建物跡SI79 (第70～72図)

調査区の中央に位置し、規模は南北軸長2.54m、東西軸長2.73mを測り、平面形は方形。カマドは北壁に設置されており、主軸方位はN-6°-Wを示す。床面は平坦で、壁面は外傾気味に立ち上がり、壁高は3.0～10.0cmを測る。覆土は自然堆積である。カマドは北壁辺に設置されており、遺存状況は不良である。北壁面を5.0～8.0cm半円形に掘り込んで煙道部としている。規模は焚口部から煙道部までの長さ74.0cm、検出された両袖間の最大幅65.0cm(袖部なし)、を測るものと推定する。

遺物は鉄製刀子1点のみである。1は刃先及び茎端を折損している細身の刀子。現存する長さ6.67cm、刃幅0.50cm、背幅0.36cm、重量6.66g。出土は刀子1点のみであり、時期を確定できないが、9世紀代であろう。

26) 竪穴建物跡SI80 (第73～75図)

調査区の中央に位置し、規模は南北軸長3.31m、東西軸長3.99mを測り、平面形は方形。カマドは北壁に設置されており、主軸方位はN-4°-Wを示す。床面は平坦で、壁面は外傾して立ち上がり、壁高は11.5～22.5cmを測る。壁溝は北辺に一部掘削部が欠ける部分のみみられるが、検出された西辺および南辺で確認される。覆土は2層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。カマドは北壁辺に設置されており、遺存状況はやや不良である。北壁面を52.0～61.0cm半円形に掘り込んで煙道部としている。規模は焚口部から煙道部までの長さ84.0cm、検出された両袖間の最大幅118.0cm、袖部構築材は灰白色粘土で構築されている。

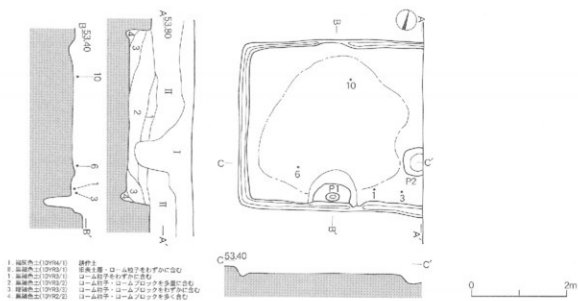
遺物は土師器・高台付坏、甕、甕、鉄滓1点が出土。1は高台付坏の底部破片。内面はヘラミガキの後に黒色処理を施している。5は鉄滓で、塊形滓である。重量は150.5gである。

9世紀代と推定する。

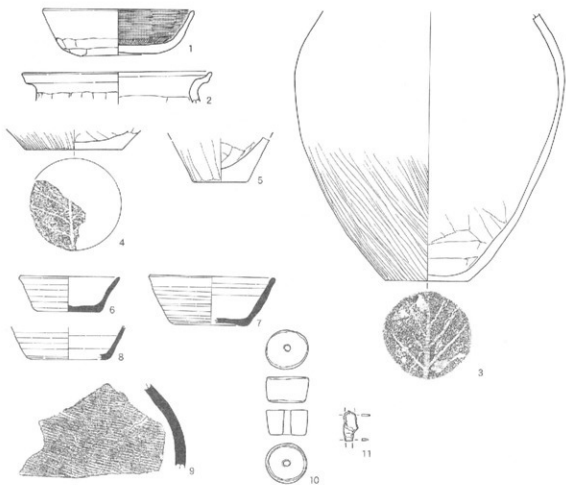
27) 竪穴建物跡SI81 (第76・77図)

調査区の南西側に位置し、規模は南北軸長2.77m、東西軸長2.86mを測り、平面形は方形。カマドは北壁に設置されており、主軸方位はN-12°-Wを示す。床面はほぼ平坦で、壁面は外傾して立ち上がり、壁高は2.5cmを測る。覆土は自然堆積である。カマドは北壁辺に設置されており、遺存状況は不良である。北壁面を20.0～35.0cm楕円形に掘り込んで煙道部としている。規模は焚口部から煙道部までの長さ68.0cm、検出された両袖間の最大幅67.0cm、袖部構築材は灰白色粘土で構築されている。

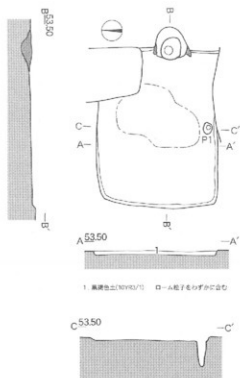
遺物は土師器・甕の口縁部破片が1点出土している。出土遺物は8世紀代であるが、遺構の形状から9世紀代と推



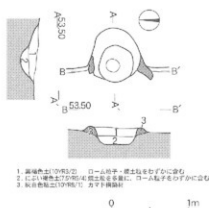
第66図 竪穴建物SI77実測図



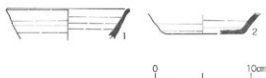
第66図 竪穴建物SI77出土遺物



第67図 竪穴建物跡SI78実測図



第68図 竪穴建物跡SI78カマド実測図



第69図 竪穴建物跡SI78出土遺物

定する。

28) 竪穴建物跡SI82 (第78～80図)

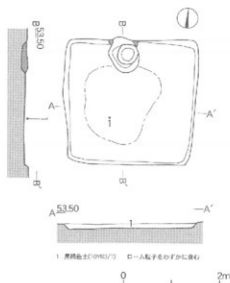
調査区の南西側に位置し、規模は南北軸3.40長m、東西軸長3.12mを測り、平面形は台形に近い方形。カマドは北壁に設置されており、主軸方位はN-14°-Wを示す。床面は平坦で、壁面は外傾して立ち上がり、壁高は11.0～20.5cmを測る。壁溝は南辺西側、西辺南側で確認され、その規模は上面幅で10.0～17.5cm、深さ1.5～2.0cmの横断面J字状を呈する。覆土は自然堆積である。カマドは東壁辺と北壁辺の2ヶ所確認でき、すでに東壁辺カマドは破壊され、新期に北壁辺に設置されている。北壁辺の遺存状況は比較的良好である。北壁面を26.0～43.0cm半円形に掘り込んで煙道部としている。規模は焚口部から煙道部までの長さ74.0cm、検出された両袖間の最大幅100.0cm、袖部構築材は灰白色粘土。また東壁面は43.0～53.0cm半円形に掘り込んで煙道部としている。火床の規模は長さ58.0cm、最大幅70.0cmを測る。

遺物は土師器・坏、皿、甕、須恵器・甕、石製品として砥石が出土。1～9は土師器。1～4は坏で、3の底部に判読できないが墨書されている。11は埴貫千枚岩製の垂飾り。小型の撚形を呈し、右端部が欠損している。また頂部に穿孔されている。長さ5.03cm、幅3.14cm、厚さ0.72cm、重量17.74g。これら出土遺物は9世紀後葉に比定される。

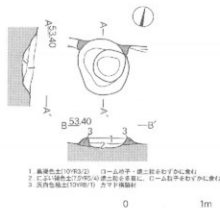
29) 竪穴建物跡SI83 (第81図)

調査区の南西側に位置し、北西側および南東側に大きく攪乱を受けている。規模は南北軸長2.35m、東西軸長2.82mを測り、平面形は長方形を呈する。カマドの設置は不明である。北軸を主軸とすると、主軸方位はN-1°-Eを示す。床面はほぼ平坦で、明瞭な壁面を確認できるのは少ないが、壁高は1.0～2.0cmを測る。覆土は確認できなかった。

遺物の出土はなく、時期は不明である。



第70図 竪穴建物SI79実測図



第71図 竪穴建物SI79カマド実測図



第72図 竪穴建物SI79出土遺物

30) 竪穴建物跡SI84 (第82・83図)

調査区の南西側に位置する。建物西側大半が未調査区域に広がっている。確認できる規模は南北軸長3.00m、検出された東西軸長0.65mを測り、平面形は方形を呈するものと推定される。カマドは北壁に設置されているものとする。主軸方位はN-12°-Wを示す。床面は平坦で、壁面は外傾して立ち上がり、壁高は11.5~17.0cmを測る。覆土は5層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。

遺物は須恵器・坏が出土している。1の坏底部は回転ヘラキリ。8世紀後葉に比定される。

31) 竪穴建物跡SI85 (第84~86図)

調査区の南西側に位置し、規模は南北軸長2.85m、東西軸長3.23mを測り、平面形は方形。カマドは北壁に設置されており、主軸方位はN-9°-Wを示す。床面は平坦で、壁面は外傾して立ち上がり、壁高は16.0cmを測る。柱穴は梯子穴1本穿ってある。P1は径42.0×25.0cmの楕円形、深さ22.5cmを測る。覆土は2層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。

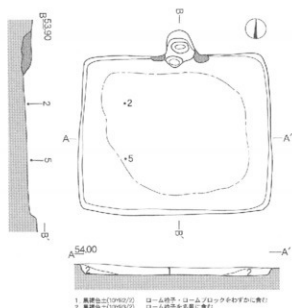
カマドは北壁辺に設置されており、遺存状況は不良である。北壁面を22.0~42.0cm箱形に掘り込んで煙道部としている。規模は焚口部から煙道部までの長さ80.0cm、検出された両袖間の最大幅79.0cm、袖部構築材は灰白色粘土で構築されている。

遺物は土師器・坏、皿、高台付坏、甕が出土。1~7の坏内面はヘラミガキの後に黒色処理。4の外面に判読できないが墨書されている。8・9は皿、10は高台付坏。いずれも内面はヘラミガキの後に黒色処理。11~22は甕。これら出土遺物は9世紀後葉に比定される。

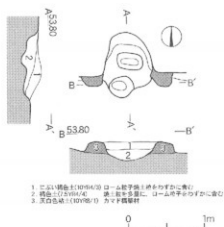
32) 竪穴建物跡SI86 (第87~89図)

調査区の南西側に位置し、西側でSI87と重複している。本跡が新期である。規模は南北軸長2.24m、東西軸長2.52mを測り、平面形は方形。カマドは北壁に設置されており、主軸方位はN-4°-Wを示す。床面は平坦で、壁面は外傾して立ち上がり、壁高は2.0~5.5cmを測る。覆土は自然堆積である。カマドは北壁辺に設置されており、遺存状況は不良である。北壁面を35.0~42.0cm三角形に掘り込んで煙道部としている。規模は焚口部から煙道部までの長さ75.0cm、検出された両袖間の最大幅63.0cm、袖部構築材は灰白色粘土で構築されている。

遺物は土師器・坏、皿、鉢。須恵器・坏が出土。1~5は土師器。1・2の坏内面はヘラミガキの後に黒色処理。

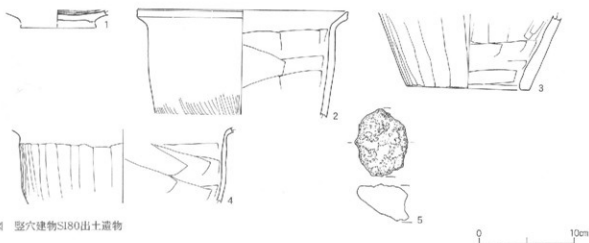


第73図 竪穴建物SI80実測図



第73図 竪穴建物SI80カマド実測図

第75図 竪穴建物SI80出土遺物

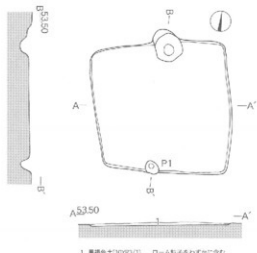


3・4は皿。外面に墨書「真家」と習書されている。4の外面には「家」と墨書されている。5は鉢で、内面はヘラミガキの後に黒色処理。これら出土遺物は9世紀後葉に比定される。

33) 竪穴建物跡SI87 (第87・90図)

調査区の南西側に位置し、北東側でSI86に切られている。規模は南北軸長2.67m、東西軸長2.54mを測り、平面形は方形。カマドは北壁に設置されており、主軸方位はN-0°を示す。床面はほぼ平坦で、壁面は外傾して立ち上がり、壁高は1.0cmを測る。覆土は8層自然堆積である。カマドは北壁辺に設置されており、遺存状況は不良である。北壁面を45.0cm半円形に掘り込んで煙道部としている。規模は焚口部から煙道部までの長さ49.0cm、検出された両袖間の最大幅51.0cm。

遺物は土師器・甕が出土。9世紀代に比定される。



第76図 竪穴建物SI81実測図



第77図 竪穴建物SI81出土遺物

34) 竪穴建物跡SI88 (第91～93図)

調査区の南西側に位置し、規模は南北軸長4.07m、東西軸長4.10mを測り、平面形は方形。カマドは北壁に設置されており、主軸方位はN-5°-Wを示す。床面はほぼ平坦で、壁面は外傾して立ち上がり、壁高は7.5～22.0cmを測る。壁溝は全周し、規模は上面幅で11.0～24.0cm、深さ1.0～8.5cmの横断面J字状を呈する。柱穴は梯子穴1本穿ってある。径39.0×31.0cmの楕円形、深さ23.3cmを測る。覆土は3層に分層でき、レンズ

状堆積を示す自然堆積である。

カマドは北壁辺に設置されており、遺存状況はやや不良である。北壁面を59.0～72.0cm三角形に掘り込んで煙道部としている。規模は焚口部から煙道部までの長さ117.0cm、検出された両袖間の最大幅114.0cm、袖部構築材は灰白色粘土で構築されている。

遺物は土師器・甕、須恵器・坏、壺が出土。1は土師器・甕。2は須恵器・蓋。扁平のツマミが付く。3は甕の胴部破片で、外面はタタキにより器面調整を施している。これら出土遺物は8世紀中葉に比定される。

35) 竪穴建物跡SI89 (第94～96図)

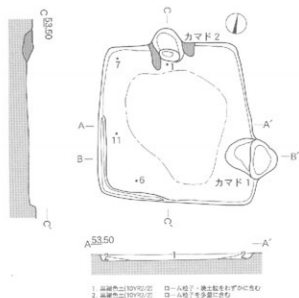
調査区の南西側に位置し、南側が未調査区域に広がっている。規模は南北軸長2.90m、検出された東西軸2.98長mを測り、平面形は方形を呈するものと推定される。カマドは北壁に設置されており、主軸方位はN-8°-Wを示す。床面は平坦で、壁面はほぼ垂直気味に立ち上がり、壁高は11.0～17.5cmを測る。覆土は4層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。カマドは新旧2基確認でき、2基ともに破壊されているが、北側カマド1が新期である。北壁面を31.0～47.0cm半円形に掘り込んで煙道部としている。規模は焚口部から煙道部までの長さ83.0cm、検出された両袖間の最大幅53.0cm、袖部構築材は灰白色粘土で構築されている。古期のカマド2東壁面を31.0～40.0cm半円形に掘り込んで煙道部としている。規模は焚口部から煙道部までの長さ67.0cm、検出された両袖間の最大幅51.0cm。

遺物は土師器・坏、甕、須恵器・長頸瓶、甕が出土。1～7は土師器。1～3の坏内面はヘラミガキの後に黒色処理。底部回転ヘラケズリ。8・9は須恵器。8は甕の胴部破片で、外面はタタキにより器面調整を施している。これら出土遺物は9世紀後葉に推定される。

36) 竪穴建物跡SI90 (第97～99図)

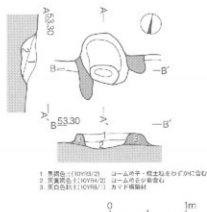
調査区の北西側に位置し、南側大半が未調査区域に広がっている。規模は南北軸長0.28m、検出された東西軸長3.54mを測り、平面形は方形を呈するものと推定される。カマドは北壁に設置されており、主軸方位はN-7°-Wを示す。床面は平坦で、壁面はほぼ垂直気味に立ち上がり、壁高は17.0～25.0cmを測る。覆土は5層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。カマドは北壁辺に設置されており、遺存状況はやや不良である。北壁面を34.50cm半円形に掘り込んで煙道部としている。規模は焚口部から煙道部までの長さ62.0cm、検出された両袖間の最大幅113.0cm、袖部構築材は灰白色粘土で構築されている。

遺物は土師器・高台付坏、甕、須恵器・坏が出土。1の高台付坏内面はヘラミガキの後に黒色処理。3の須恵器・

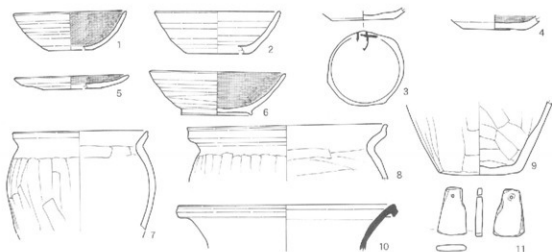


第78図 竪穴建物SI82実測図

0 2m



第79図 竪穴建物SI82カマド実測図



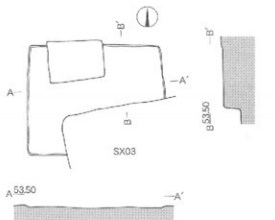
第80図 竪穴建物SI82出土遺物

0 10cm

坏。底部は回転ヘラケズリ。これら出土遺物は9世紀前葉に比定される。

37) 竪穴建物跡SI91 (第100・101図)

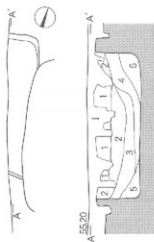
調査区の北西側に位置し、南東隅部のみ検出されている。規模は検出された南北軸長2.34m、東西軸長2.67mを測り、平面形は方形を呈するものと推定される。カマドは北壁に設置されているものとする、主軸方位はN-3° -



第81図 竪穴建物SI83実測図



第83図 竪穴建物SI84出土遺物



- | | |
|------------------|-------------|
| 1. 縄文赤土(10094/1) | 遺構土 |
| 2. 縄文赤土(10094/2) | ローム層をわずかに含む |
| 3. 縄文赤土(10094/3) | ローム層を多く含む |
| 4. 縄文赤土(10094/4) | ローム層を多く含む |
| 5. 縄文赤土(10094/5) | ローム層を多く含む |

第82図 竪穴建物SI84実測図

Wを示す。床面は平坦で、壁面はほぼ垂直気味に立ち上がり、壁高は3.0~7.0cmを測る。壁溝は確認面で全周し、その規模は上面幅で17.0~20.0cm、深さ3.0~5.5cmの横断面U字状を呈する。柱穴は梯子穴1本穿ってある。P 1は径21.0×21.0cmの円形、深さ33.0cmを測る。覆土は5層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。

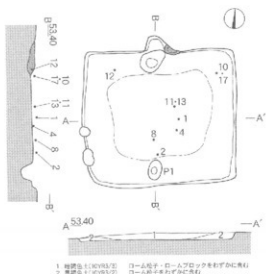
遺物は土師器・坏が出土。内面はヘラミガキの後に黒色処理。底部は回転ヘラケズリ。これらは9世紀前葉に比定される。

38) 竪穴建物跡SI92 (第102~105図)

調査区の南側に位置し、規模は南北軸長4.56m、東西軸長4.40mを測り、平面形は方形。カマドは北壁に設置されており、主軸方位はN-9° -Wを示す。床面は平坦で、壁面はほぼ垂直気味に立ち上がり、壁高は21.0~43.0cmを測る。壁溝は北壁辺、東壁辺北側、西壁辺北側に掘削部が欠ける部分のみみられる。規模は上面幅で9.5~21.0cm、深さ1.0~11.0cmの横断面U字状を呈する。覆土は2層に分層でき、埋め戻し土層である。カマドは北壁辺に設置されており、遺存状況は比較的良好である。北壁面を40.0~62.0cm半円形に掘り込んで煙道部としている。規模は焚口部から煙道部までの長さ119.0cm、検出された両袖間の最大幅114.0cm、袖部構築材は凝灰岩と灰白色粘土で構築されている。

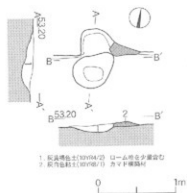
遺物は土師器・坏、皿、鉢、台付甕、甕、須恵器・甕、灰釉陶器・長頸瓶が出土。1~51は土師器、1~17は坏で、坏内面はヘラミガキの後に黒色処理。13・15の底部回転糸切り。20・21は墨書土器。18・19・22~30は皿、内面はヘラミガキの後に黒色処理。31は鉢。内面はヘラミガキの後に黒色処理。32は台付甕。33~51は甕。33~45は内湾気味の体部から口縁部は強く外反し、口縁端部は揃み上げられている。46・47は底部に木葉痕を残置する。52は灰釉陶器・長頸瓶の口縁部破片。65は瓶の底部破片。55は管状土鍾。細長い紡錘状を呈する。長さ7.01cm、幅1.73cm、孔径0.40cm、重量14.5g。56は結晶片岩製の砥石。下端を折損している。形状三角形を呈し、両面・両側面に研磨面がみられる。長さ8.51cm、幅3.62cm、厚さ2.27cm、重量83.0g。57は鉄洋。重量41.32g。これら出土遺物は9世紀後葉から10世紀前半に比定される。

39) 竪穴建物跡SI93 (第106~108図)



1 埴輪土(IV94②) コーム状子・ローム字リツクをわすめに焼く
2 埴輪土(IV95②) コーム状子をわすめに焼く

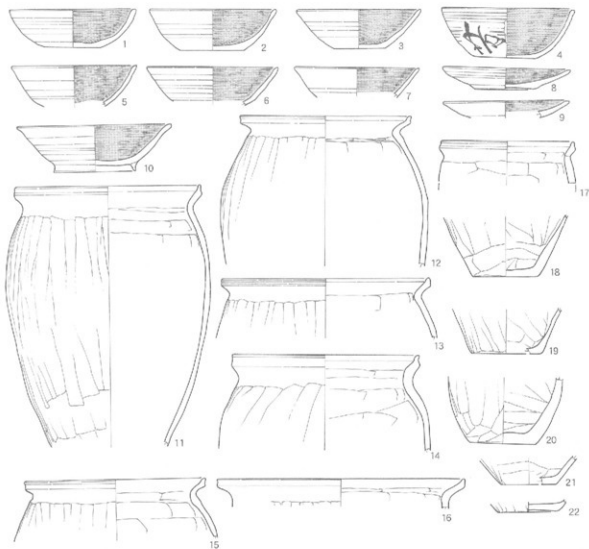
第94図 竪穴建物SI85実測図



1 埴輪土(IV94②) コーム状子・ローム字リツクをわすめに焼く
2 埴輪土(IV95②) コーム状子をわすめに焼く

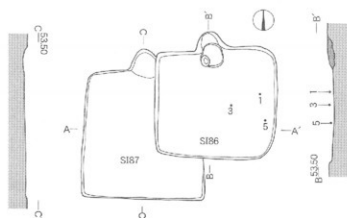


第95図 竪穴建物SI85カマド実測図



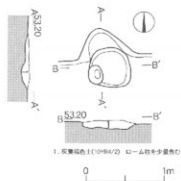
第96図 竪穴建物SI85出土遺物





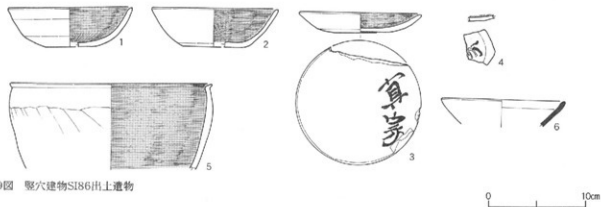
1. 漆黒土(10793/2) ローム粒をわずかに含む
 2. 漆黒土(10793/3) ローム粒を、ローム粒の付着をわずかに含む
 3. 漆黒土(10793/1) ローム粒をわずかに含む

第87図 竪穴建物SI86・87実測図



1. 灰層地土(10794/2) ローム粒を少量含む

第88図 竪穴建物SI86カマド実測図



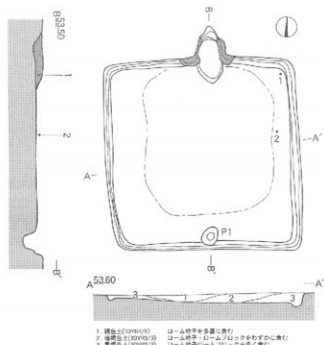
第89図 竪穴建物SI86出土遺物



第90図 竪穴建物SI87出土遺物

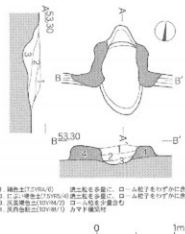


調査区の南側に位置し、規模は南北軸長5.10m、東西軸長5.32mを測り、平面形は方形。カマドは北壁に設置されており、主軸方位はN-1°-Wを示す。床面はほぼ平坦で、壁面は外傾して立ち上がり、壁高は4.5~14.0cmを測る。壁溝は全周し、規模は上面幅で10.0~21.0cm、深さ0.5~6.0cmの横断面U字状を呈する。柱穴は主柱穴、壁柱穴、カマド脇の壁柱穴、梯子穴の計7本穿ってある。主柱穴は3本で、P1は径44.5×42.0cmの円形、深さ53.8cm、P2は径34.0×29.0cmの円形、深さ23.3cm。P3は径40.0×38.0cmの円形、深さ66.8cm。壁柱穴P4は径23.0×16.0cmの楕円形、深さ51.5cm。カマド脇壁柱穴西側P5は径28.0×21.5cmの円形、深さ31.0cm。東側P6は径



第91図 竪穴建物SI88実測図

0 2m



第92図 竪穴建物SI88カマド実測図

0 1m



第93図 竪穴建物SI88出土遺物

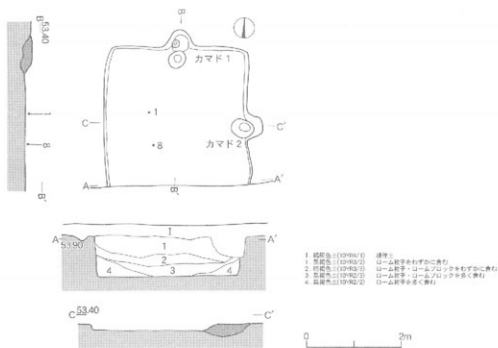
0 10cm

32.0×31.0cmの円形、深さ42.7cm。梯子穴P7は径49.0×32.0cmの楕円形、深さ45.5cmを測る。覆土は2層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。カマドは北壁辺に設置されており、遺存状況はやや不良である。北壁面を45.0～46.0cm半円形で掘り込んで煙道部としている。規模は焚口部から煙道部までの長さ118.0cm、検出された両袖間の最大幅108.0cm、袖部構築材は灰白色粘土で構築されている。

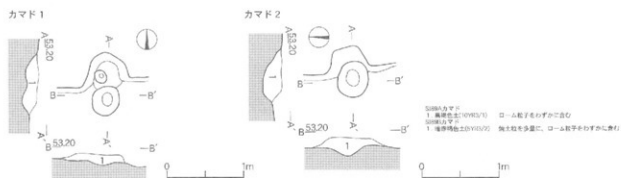
遺物は土師器・埴、埴、甕、須恵器・甕。石製品である磨石が出土。1～6は土師器。1埴外面に判読できないが墨書されている。2は埴。体部が内傾する。6の甕底部に木葉痕が残留する。7は甕の胴部破片で、外面はタタキにより器面調整を施している。8は安山岩製の磨石の破片。向面に磨面が認められ、石斧状を呈する。長さ5.91cm、幅7.52cm、厚さ2.84cm、重量14.0g。これら出土遺物は8世紀中葉に比定される。

40) 竪穴建物跡SI94 (第109・110図)

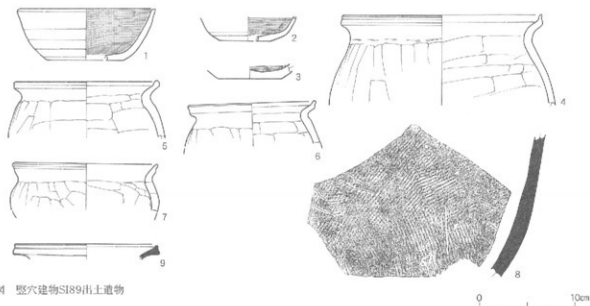
調査区の南西側に位置し、東および西側が未調査区域に広がっている。規模は南北軸長4.54m、検出された東西軸長1.29mを測り、平面形は方形を呈するものと推定される。カマドは北壁に設置したものとすると、主軸方位はN-8°-Wを示す。床面は平坦で、壁面はほぼ垂直気味に立ち上がり、壁高は30.0～53.5cmを測る。覆土は8層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。



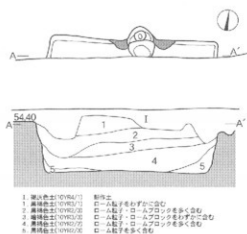
第94図 竪穴建物SI89実測図



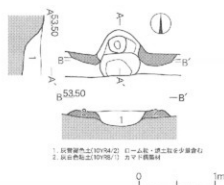
第95図 竪穴建物SI89カマド1・カマド2実測図



第96図 竪穴建物SI89出土遺物

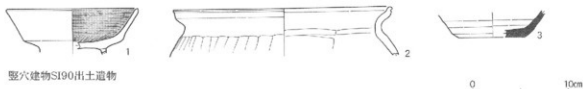


第97図 竪穴建物SI90実測図



第98図 竪穴建物SI90カマド実測図

第99図 竪穴建物SI90出土遺物



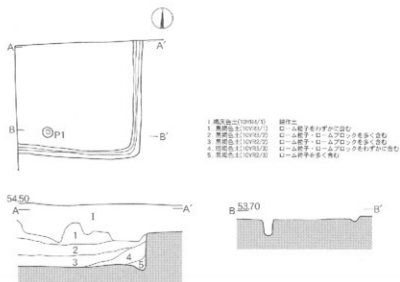
遺物は土師器・坏、高台付坏、盤、高坏、甕。砥石が出土。1の坏内面はヘラミガキの後に黒色処理。2～6は高台付坏。内面はヘラミガキの後に黒色処理を施している。12・13は珪質千枚岩製の砥石。12は上端部を欠損している。表面および両側面に研磨面がみられる。長さ14.13cm、幅6.57cm、厚さ1.18cm、重量150.0g。13は表面と左側面に研磨面がみられる。長さ7.29cm、幅4.69cm、厚さ1.13cm、重量51.98g。

これら出土遺物は9世紀前葉に比定される。

41) 竪穴建物跡SI95 (第111～114図)

調査区の南側に位置し、規模は南北軸長3.48m、東西軸長3.36mを測り、平面形は方形。カマドは北壁に設置されており、主軸方位はN-16°-Wを示す。床面は平坦で、壁面はほぼ垂直気味に立ち上がり、壁高は38.0～51.0cmを測る。壁溝は北壁辺西側に掘削部が欠ける部分がみられる。規模は上面幅で11.0～25.5cm、深さ7.0cmの横断面U字状を呈する。覆土は3層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。カマドは北壁辺に設置されており、遺存状況は比較的良好である。北壁面を42.0～70.0cm半円形に掘り込んで煙道部としている。規模は焚口部から煙道部までの長さ112.0cm。検出された向袖間の最大幅113.0cm、袖部構築材は灰白色粘土で構築されている。

遺物は土師器・坏、高台付坏、皿、鉢、甕。須恵器・甕、甕が出土。1～27は土師器。1～5は坏で内面はヘラミガキの後に黒色処理。6・7・11・12は高台付坏で内面はヘラミガキの後に黒色処理。8～10は皿。内面はヘラミガキの後に黒色処理。8は黒書土器。13～20・24・26は甕。13～20は内湾気味の体部から口縁部は強く外反し、口縁端部は積み上げられている。26は底部に木葉痕を残留。21～23・25・27は鉢。28～32は須恵器。32は須恵器・甕の底部を再利用した転用砥石である。ちょうど底部面を海面としている。径11.5cmを測る。33～35は管状土鏡である。33は長さ2.60cm、幅1.93cm、孔径0.35cm、重量10.92g。34は長さ2.78cm、幅1.80cm、孔径0.18cm、重量9.10g。35は細長い紡錘状を呈する。長さ2.61cm、幅0.93cm、孔径0.21cm、重量2.20g。36は刀子。刃先のみ残存する。錆化が著しい。現存長6.90cm、刃幅1.95cm、背厚0.29cm、重量16.56g。これら出土遺物は9世紀後葉に比定される。



第100図 竪穴建物SI91実測図

0 2m



第101図 竪穴建物SI91出土遺物

0 10cm

42) 竪穴建物跡SI96 (第115～117図)

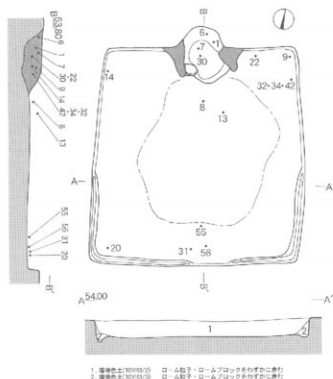
調査区の南西側に位置し、規模は南北軸長2.70m、東西軸長2.96mを測り、平面形は方形、カマドは北壁に設置されており、主軸方位はN-23°-Wを示す。床面はほぼ平坦で、壁面は外傾して立ち上がり、壁高は17.5～28.0cmを測る。覆土は3層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。カマドは北壁辺に設置されており、遺存状況は比較的良好である。北壁面を61.0cm半円形に掘り込んで煙道部としている。規模は焚口部から煙道部までの長さ116.0cm、検出された両袖間の最大幅113.0cm(袖部片側なし)、袖部構築材は灰白色粘土で構築されている。

遺物は土師器・坏、高台付坏、盤、甕、須恵器・高坏が出土。1～9は土師器。1～4は坏内面のヘラミガキの後に黒色処理。6は盤。内面はヘラミガキの後に黒色処理を施している。5・9は高台付坏。7・8は甕。10は須恵器・高坏。これら出土遺物は9世紀前葉に比定される。

43) 竪穴建物跡SI97 (第118～120図)

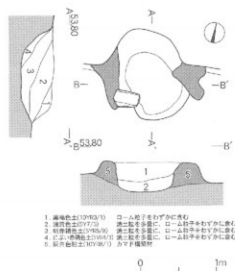
調査区の北西側に位置し、規模は南北軸長3.15m、東西軸長3.81mを測り、平面形は方形。カマドは北壁に設置されており、主軸方位はN-20°-Wを示す。床面はほぼ平坦で、壁面は外傾して立ち上がり、壁高は18.0～26.5cmを測る。柱穴は梯子穴1本穿ってある。径31.0×24.5cmの楕円形、深さ6.5cmを測る。覆土は4層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。カマドは北壁辺に設置されており、遺存状況は比較的良好である。北壁面を35.0～54.0cm半円形に掘り込んで煙道部としている。規模は焚口部から煙道部までの長さ100.0cm、検出された両袖間の最大幅132.0cm、袖部構築材は灰白色粘土で構築されている。

遺物は土師器・坏、須恵器・甕が出土。1・2は土師器・坏内面はヘラミガキの後に黒色処理。2の底部は回転ヘラケズリ。4～7は須恵器・甕の胴部破片で、外面はタタキにより器面調整を施している。これら出土遺物は9世紀後葉に比定される。



第102図 竪穴建物跡SI92実測図

0 2m



第103図 竪穴建物跡SI92カマド実測図

0 1m

44) 竪穴建物跡SI98 (第121～123図)

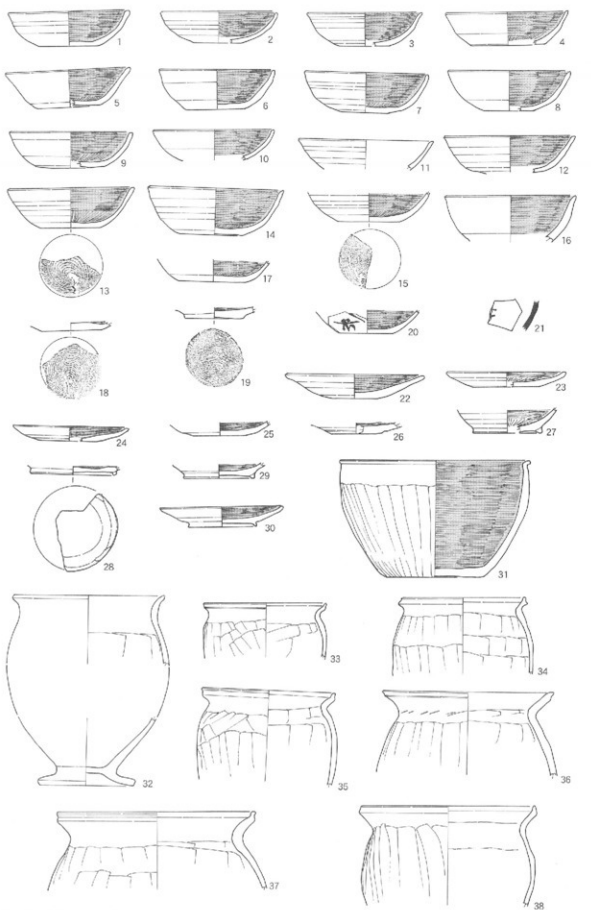
調査区の北西側に位置し、規模は南北軸長3.57m、東西軸長3.90mを測り、平面形は方形。カマドは北壁に設置されており、主軸方位はN-23°-Wを示す。床面は平坦で、壁面はほぼ垂直気味に立ち上がり、壁高は33.0～43.0cmを測る。壁溝は北壁辺西側に掘削部が欠ける部分のみみられる。規模は上面幅で12.0～21.0cm、深さ11.5cmの横断面U字状を呈する。柱穴は梯子穴1本穿ってある。径21.0×17.5cmの楕円形、深さ28.0cmを測る。覆土は4層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。カマドは北壁辺に設置されており、遺存状況は比較的良好である。北壁面を52.0～53.0cm三角形に掘り込んで煙道部としている。規模は焚口部から煙道部までの長さ143.0cm、検出された両袖間の最大幅149.0cm、袖部構築材は灰白色粘土で構築されている。

遺物は土師器・甕、須恵器・坏、高台付坏。鉄滓が出上。1～8は土師器・甕。1～3は内湾気味の体部から口縁部は強く外反し、口縁端部は揃み上げられている。4・5は底部に木炭痕を残置する。7～9は須恵器。10は鉄滓。重量は32.96gを測る。これら出土遺物は8世紀後葉に比定される。

45) 竪穴建物跡SI99 (第124～126図)

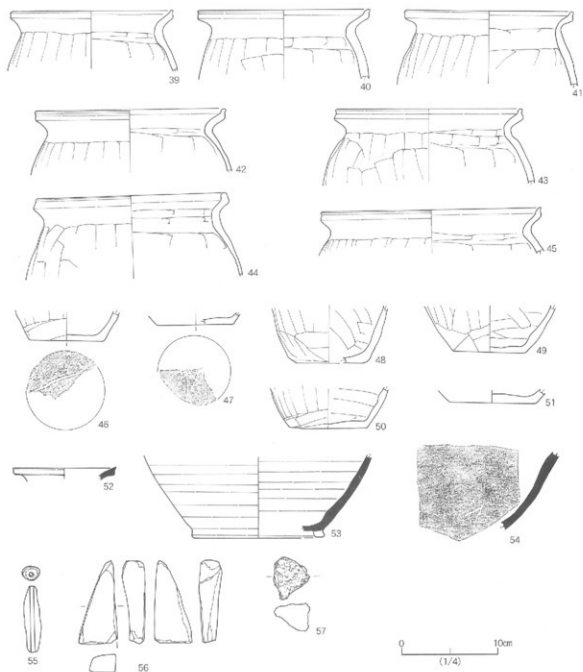
調査区の北西側に位置し、規模は南北軸長3.28m、東西軸長3.56mを測り、平面形は方形。カマドは北東壁隅に設置されており、主軸方位はN-15°-Wを示す。床面はほぼ平坦で、壁面は外傾して立ち上がり、壁高は1.5～13.5cmを測る。柱穴は梯子穴1本穿ってある。径30.0×24.0cmの楕円形、深さ11.0cmを測る。覆土は自然堆積である。カマドは北東壁隅に設置されたいわゆるコーナーカマドである。遺存状況は比較的良好である。北壁面を56.0～62.0cm半円形に掘り込んで煙道部としている。規模は焚口部から煙道部までの長さ86.0cm、検出された両袖間の最大幅90.0cm、袖部構築材は灰白色粘土で構築されている。

遺物は土師器・坏、須恵器・坏、甕が出上。1の土師器・坏は内面はヘラミガキの後に黒色処理。2・3は須恵器。2は坏。3は甕の胴部破片で、外面はタタキにより器面調整を施している。これら出土遺物は8世紀後葉に比定される。



第104図 竪穴建物S192出土遺物 (1)

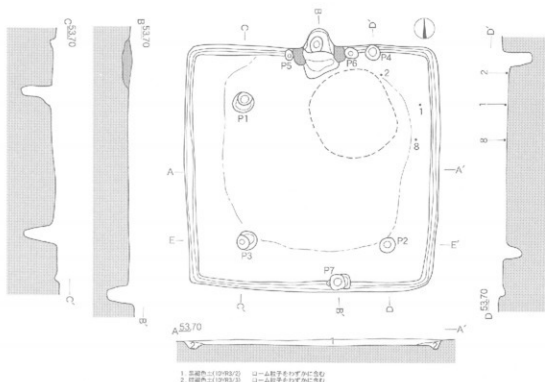
0 10cm



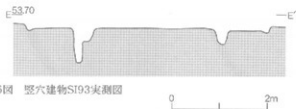
第105図 竪穴建物SI92出土遺物(2)

46) 竪穴建物跡SI100 (第127~129図)

調査区の北東側に位置し、規模は南北軸長3.44m、東西軸長3.83mを測り、平面形は方形。カマドは北壁東寄りに設置されており、主軸方位はN-24°-Wを示す。床面はほぼ平坦で、壁面は外傾して立ち上がり、壁高は14.0~25.5cmを測る。壁溝は北東壁辺に掘削部が欠ける部分が見られる。規模は上面幅で13.0~23.0cm、深さ0.5~7.0cmの横断面U字状を呈する。柱穴は梯子穴1本穿ってある。径79.0×49.0cmの円形、深さ3.2cmを測る。覆土は3層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。カマドは北壁辺に設置されており、遺存状況は比較的良好



第106図 竪穴建物SI93実測図

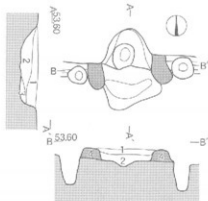


である。北壁面を45.0~51.0cm箱形に掘り込んで煙道部としている。規模は焚口部から煙道部までの長さ101.0cm、検出された両袖間の最大幅118.0cm、袖部構築材は灰白色粘土で構築されている。

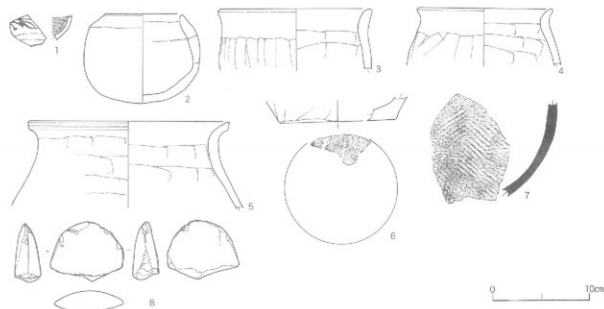
遺物は土師器・高台付坏、甕、須恵器・坏、甕が出土。1は土師器・高台付坏。内面はヘラミガキの後に黒色処理。3・4は須恵器。3の坏底部は回転ヘラキリ。これら出土遺物は9世紀前葉に比定される。

47) 竪穴建物跡SI101 (第130~132図)

調査区の北東側に位置し、規模は南北軸長2.92m、東西軸長2.59mを測り、平面形は方形。カマドは東壁に設置されており、主軸方位はN-82°-Eを示す。床面はほぼ平坦で、壁面は外傾して立ち上がり、壁高は5.5~14.5cmを測る。壁溝は東壁辺と南壁辺に認められ、規模は上面幅で13.0~15.5cm、深さ3.0cmの横断面U字状を呈する。覆土は2層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。カマドは東壁辺に設置されており、遺存状況は比較的良好である。北壁面を33.0~50.0cm箱形に掘り込んで煙道部としている。規模は焚口部から煙道部までの長さ100.0cm、検出された両袖間の最大幅91.0cm、袖部構築材は灰白色粘土で構築されている。



第107図 竪穴建物SI93カマド実測図



第108図 竪穴建物SI93出土遺物

遺物は土師器・甕。須恵器・甕が出土。1は土師器・甕。口縁端部は摘み上げられている。2は須恵器・甕。口唇部が強く外反する。これら出土遺物は9世紀代と推定する。

48) 竪穴建物跡SI102 (第133～135図)

調査区の北東側に位置し、規模は南北軸長3.99m、東西軸長3.35mを測り、平面形は長方形。カマドは北壁に設置されており、主軸方位はN-11°-Eを示す。床面はほぼ平坦で、壁面は外傾して立ち上がり、壁高は14.0～25.0cmを測る。壁溝は北東壁辺南側に掘削部が欠ける部分のみみられる。規模は上面幅で6.0～19.0cm、深さ0.5～3.5cmの横断面U字状を呈する。柱穴は梯子穴1木穿ってある。径40.0×22.0cmの楕円形、深さ47.5cm。覆土は3層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。カマドは北壁辺に設置されており、遺存状況は比較的良好である。北壁面を69.0～71.0cm三角形に掘り込んで煙道部としている。規模は焚口部から煙道部までの長さ131.0cm、検出された両袖間の最大幅124.0cm、袖部構築材は灰白色粘土で構築されている。

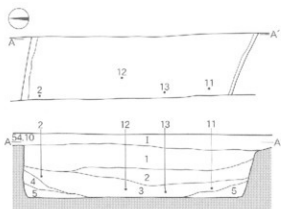
遺物は土師器・高台付杯、甕。刀子が出土。1・2は土師器・高台付杯。内面はヘラミガキの後に黒色処理。3～5は甕。内湾気味の体部から口縁部は強く外反し、口縁端部は摘み上げられている。6は刀子。刃部のみ残存する。錆化が著しい。現存長6.53cm、刃幅3.17cm、背厚0.57cm、重量19.06g。これら出土遺物は9世紀前葉に比定される。

49) 竪穴建物跡SI103 (第136～138図)

調査区の北東側に位置し、規模は南北軸長2.84m、東西軸長3.23mを測り、平面形は方形。カマドは北壁に設置されており、主軸方位はN-20°-Wを示す。床面はほぼ平坦で、壁面は外傾して立ち上がり、壁高は3.0～8.0cmを測る。壁溝は全周し、規模は上面幅で18.0～58.0cm、深さ7.0～16.0cmの横断面U字状を呈する。覆土は3層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。カマドは北壁辺に設置されており、遺存状況は比較的良好である。北壁面を58.0～61.0cm三角形に掘り込んで煙道部としている。規模は焚口部から煙道部までの長さ121.0cm、検出された両袖間の最大幅109.0cm、袖部構築材は灰白色粘土で構築されている。

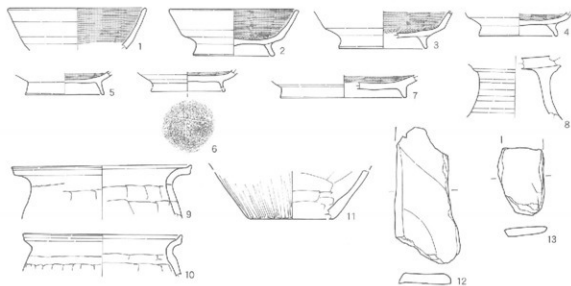
遺物は土師器・甕。須恵器・杯、蓋が出土。1・2の土師器・甕は丸底で、外面ヘラケズリ。3は須恵器・杯。底部は回転ヘラケズリ。4・5は蓋。扁平のツマミが付く。これら出土遺物は8世紀中葉に比定される。

50) 竪穴建物跡SI104 (第139～141図)



1. 成土色(100M/L) 砂粘土
2. 成土色(110M/L) ローム層下・ローム層を若干含む
3. 成土色(110M/L) ローム層・ローム層を多く含む
4. 成土色(110M/L) ローム層・ローム層を多く含む
5. 成土色(110M/L) ローム層・ローム層を若干含む
6. 土質(成土色)ローム層を多く含む

第109図 竪穴建物ST94実測図

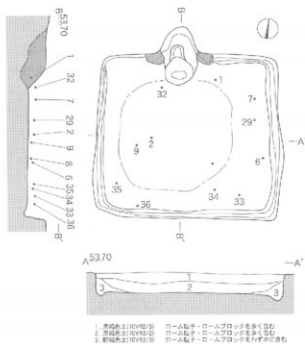


第110図 竪穴建物ST94出土遺物



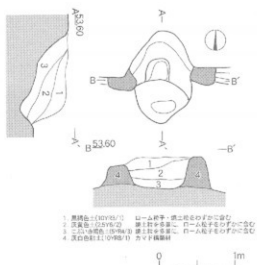
調査区の北東側に位置し、建物斜め中央に溝SD11によって切られている。規模は南北軸長3.42m、東西軸長4.23mを測り、平面形は方形。カマドは北壁に設置されており、主軸方位はN-25°-Wを示す。床面はほぼ平坦で、壁面は外傾して立ち上がり、壁高は30.0~38.0cmを測る。壁溝は全周し、規模は上面幅で12.0~23.0cm、深さ1.0~8.5cmの横断面U字状を呈する。覆土は3層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。カマドは北壁辺に設置されており、遺存状況は比較的良好である。北壁面を53.0~59.0cm三角形に掘り込んで煙道部としている。規模は焚口部から煙道部までの長さ104.0cm、検出された両袖間の最大幅105.0cm、袖部構築材は灰白色粘土で構築されている。

遺物は土師器・坏、甕、須恵器・坏、刀子、砥石が出土。1~9は土師器。1の坏底部は回転ヘラケズリ。内面はヘラミガキの後に黒色処理。4~9は甕。内湾気味の体部から口縁部は強く外反し、口縁端部は揃み上げられている。10は須恵器・高台付坏。11は刀子。刃部・茎部ともに折損している。錆化が著しい。柄は刃・背に直角に付けられている。現存長4.23cm、刃幅1.20cm、背厚0.29cm、重量4.46g。12は砂質凝灰岩製の砥石である。ほぼ自然礫に



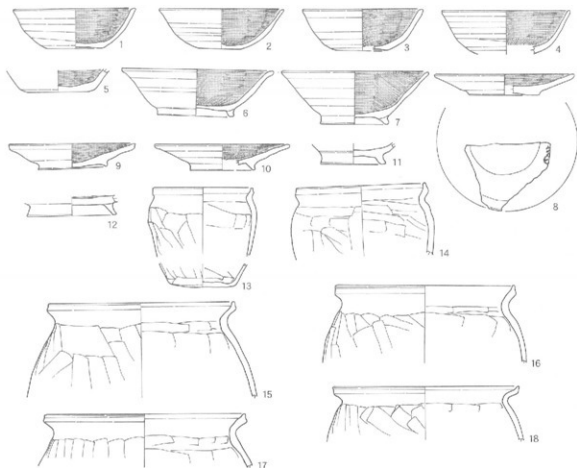
第111図 竪穴建物SI96実測図

0 2m



第112図 竪穴建物SI95カマド実測図

0 1m



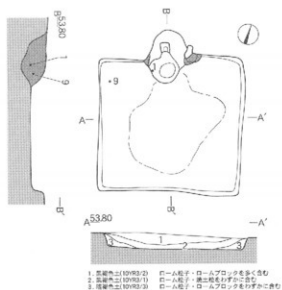
第113図 竪穴建物SI95出土遺物(1)

0 10cm



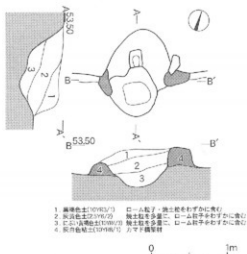
第114図 堅穴建物SI95出土遺物 (2)

0 10cm

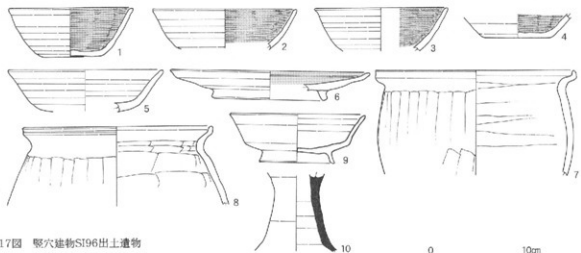


第115図 竪穴建物SI96実測図

0 2m



第116図 竪穴建物SI96カマド実測図



第117図 竪穴建物SI96出土遺物

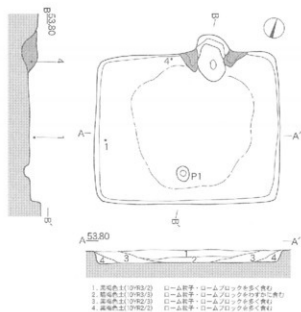
0 10cm

近く断面は側面と裏面で確認できる。長さ24.30cm、幅8.30cm、厚さ8.86cm、重量1480.0g。

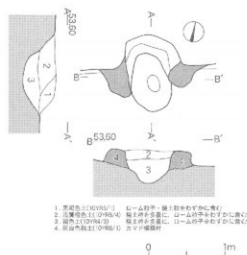
これら出土遺物は9世紀前葉に比定される。

51) 竪穴建物跡SI105 (第142～144・146・147図)

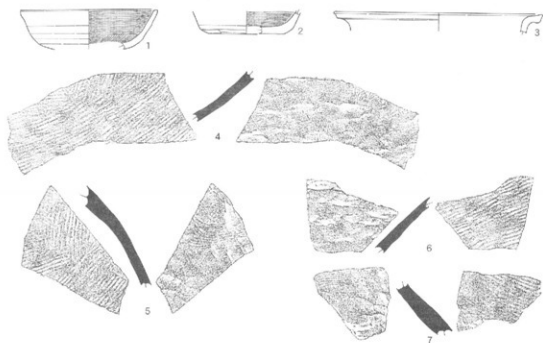
調査区の南側に位置し、西側でSI107と重複し、本跡が新期である。規模は南北軸6.25長m、東西軸長5.04mを測り、平面形は長方形。カマドは北壁に設置されており、主軸方位はN-11°-Wを示す。床面は平坦で、壁面はほぼ垂直気味に立ち上がり、壁高は17.0～36.5cmを測る。柱穴は主柱穴4本、壁柱穴11本の計15本穿ってある。主柱穴P1は径42.0×38.0cmの円形、深さ97.2cm。P2は径44.0×37.0cmの円形、深さ42.5cm。P3は径61.0×54.0cmの円形、深さ80.9cm。P4は径50.0×45.0cmの円形、深さ86.3cm。壁柱穴P5は梯子穴を兼ねる。径47.0×39.0cmの円形、深さ54.1cm。壁柱穴北西隅P6は径40.0×39.0cmの円形、深さ57.0cm。北東隅P7は径39.0×35.0cmの円形、深さ61.5cm。東壁辺北側からP8は径42.0×39.0cmの円形、深さ51.7cm。北側P9は径



第118図 竪穴建物SI97実測図



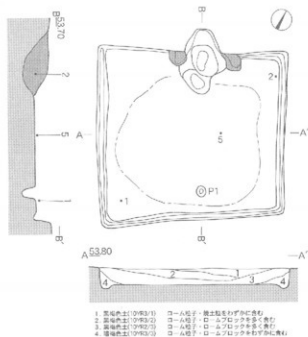
第119図 竪穴建物SI97カマド実測図



第120図 竪穴建物SI97出土遺物

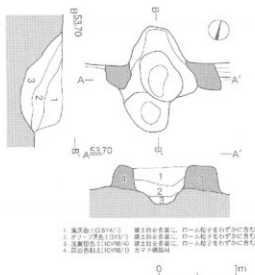


35.0×34.0cmの円形、深さ39.0cm。南東隅P 10は径38.0×35.0cmの円形、深さ61.5cm。南西隅P 11は径58.0×49.0cmの円形、深さ70.8cm。西壁辺南側からP 12は径55.0×46.0cmの円形、深さ72.7cm。P 13は径45.0×38.0cmの円形、深さ53.0cm。P 14は径39.0×36.0cmの円形、深さ26.3cm。P 15は径30.0×28.0cmの円形、深さ



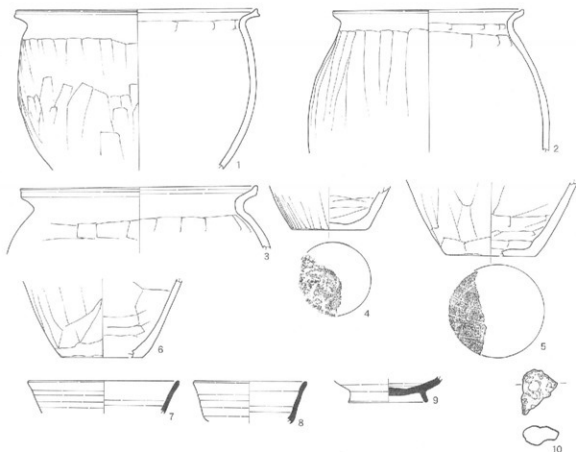
第121図 竪穴建物SI98実測図

0 2m



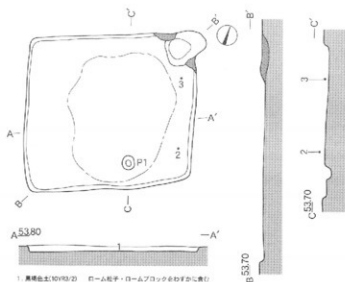
第122図 竪穴建物SI98カマド実測図

0 1m

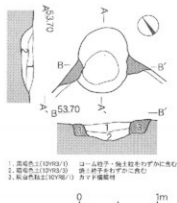


第123図 竪穴建物SI98出土遺物

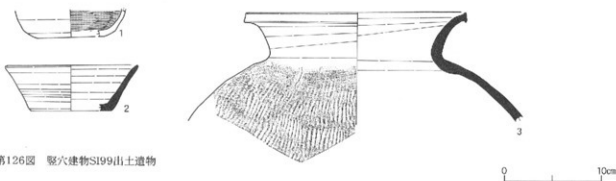
0 10cm



第124図 竪穴建物SI99実測図



第125図 竪穴建物SI99カマド実測図



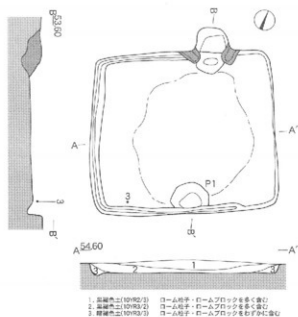
第126図 竪穴建物SI99出土遺物

28.0cmを測る。覆土は2層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。カマドは北壁辺に設置されており、遺存状況は比較的良好である。北壁面を92.0～106.0cm楕円形に掘り込んで煙道部としている。規模は焚口から煙道部までの長さ156.0cm、検出された両袖間の最大幅156.0cm、袖部構築材は灰白色粘土で構築されている。

遺物は土師器・坏、皿、高台付坏、甕、須恵器・坏、甕。灰軸陶器・埴、長頸瓶。円面硯、管状土鍾、砥石、鉄製鎌、刀子、釘、鉄洋が出た。1～46は土師器。1～27は坏。内面はヘラミガキの後に黒色処理を施している。底部は回転ヘラケズリ。1・2・12～19は墨書土器。2は「种生」12は「家」、14・15「大」。他は判読できない。28～33は高台付坏の高台部の破片。高台は貼付け、内面はヘラミガキの後に黒色処理を施している。34～46は甕。48～52は須恵器。50～52は甕の胴部破片で、外面はタタキにより器面調整を施している。54～56は灰軸陶器。54・55は埴。56は長頸瓶。58～64は管状土鍾である。計測は下記のとおりである。

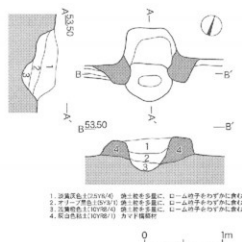
番号	長さcm	幅cm	孔径	重量g	番号	長さcm	幅cm	孔径	重量g	番号	長さcm	幅cm	孔径	重量g
58	7.01	1.43	0.58	13.30	59	5.60	1.75	0.46	11.12	60	5.36	1.75	0.43	10.80
61	4.94	1.99	0.38	13.66	62	5.02	1.84	0.30	11.28	63	3.54	1.86	0.26	8.74
64	2.52	1.48	0.36	11.90										

65は結晶片岩製の砥石。ほぼ完存する。表裏面および側面に研磨面がみられる。長さ6.78cm、幅4.33cm、厚さ



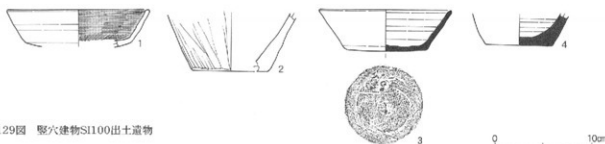
第127図 竪穴建物SI100実測図

0 2m



第128図 竪穴建物SI100カマド実測図

0 1m



第129図 竪穴建物SI100出土遺物

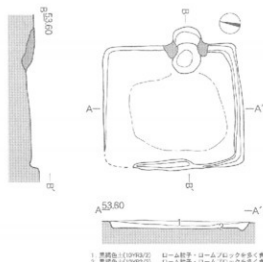
0 10cm

2.57cm、重量88.0g、66は鉄製鎌の折損品。刃先部分を残存する。刃先に向かって次第に狭くなっている。現存長9.03cm、刃幅3.24cm、背厚0.86cm、重量38.50g、67は刀子の刃部だけの破片。現存長1.20cm、刃幅1.60cm、背厚0.58cm、重量1.66g、68・69は鉄製釘であろう。折損品。いずれも断面は四角形を呈する。68は長さ3.33cm、幅0.88cm、厚さ0.63cm、重量2.58g、69は長さ3.05cm、幅1.00cm、厚さ0.51cm、重量2.04g、70・71は粘土塊。70は長さ4.18cm、幅4.83cm、厚さ2.38cm、重量22.94g、71は長さ3.24cm、幅3.95cm、厚さ1.64cm、重量13.90g。これら出土遺物は9世紀後葉に比定される。

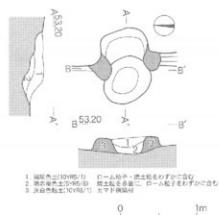
52) 竪穴建物跡SI106 (第149図)

調査区の南側に位置し、東側半分は削平されている。したがって西側のみが残存する。規模は南北軸長2.87m、東西軸長3.70mを測り、平面形は方形を呈するものと推定される。カマドは北壁に設置されており、主軸方位はN-20°-Wを示す。床面はほぼ平坦で、壁面は外傾して立ち上がり、壁高は7.0cmを測る。壁溝は西壁辺、北壁辺西側のみ確認でき、規模は上面幅で14.0~20.0cm、深さ2.0~3.0cmの横断面U字状を呈する。覆土は自然堆積である。

カマドは北壁辺に設置されており、遺存状況は極めて不良である。北壁面を46.0~67.0cm半円形に掘り込んで煙道部としている。規模は焚口部から煙道部までの長さ82.0cm、検出された両袖間の最大幅52.0cm(袖部片側なし)、



第130図 竪穴建物SI101実測図



第131図 竪穴建物SI101カマダ実測図



第132図 竪穴建物SI101出土遺物



袖部構築材は灰白色粘土で構築されている。

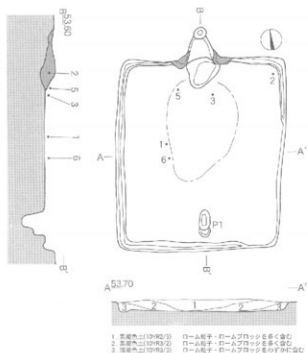
遺物は土師器・坏が出土。坏の体部下半部の破片である。内面はヘラミガキの後に黒色処理。9世紀代に比定される。

53) 竪穴建物跡SI107 (第142・143・145・148図)

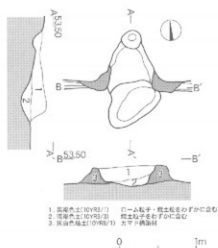
調査区の南側に位置し、東側でSI105に切られている。規模は南北軸長5.90m、東西軸長3.21mを測り、平面形は方形。カマダは北壁に設置されており、主軸方位はN-5°-Wを示す。床面はほぼ平坦で、壁面は外傾して立ち上がり、壁高は3.0~8.0cmを測る。壁溝は北壁辺東側に一部掘削部が欠ける部分が見られる。規模は上面幅で17.0~25.0cm、深さ6.0~12.0cmの横断面U字状を呈する。柱穴は主柱穴2本と入口部施設内に梯子穴1本確認できる。主柱穴P1は径48.0×47.0cmの円形、深さ39.0cm、P2は径47.0×37.0cmの円形、深さ19.0cmを測る。なお、南壁際中央に残り込みの入口部施設があり、施設内には梯子穴が穿ってある。入口部施設の規模は長軸102.0cm、短軸81.0cm、深さ12.0cmの方形を呈し、梯子穴は径40.0×38.0cm、深さ35.0cmを測る。覆土は自然堆積である。カマダは北壁辺に設置されており、遺存状況は不良である。北壁面を50.0cm楕円形に掘り込んで煙道部としている。規模は焚口部から煙道部までの長さ63.0cm、検出された両袖間の最大幅60.0cm、袖部構築材は灰白色粘土で構築されている。

遺物は土師器・坏、甕、須恵器・坏、蓋、釘、鉄滓が出土。1~9は土師器。1の坏体部はヘラケズリ。2~9は甕。7~9の底部に木葉痕が残置する。10・11は須恵器。10の坏底部は回転ヘラケズリ。11の蓋。扁平のツマミが付く。12は鉄製釘であろう。折損品。断面は四角形を呈する。長さ6.28cm、幅1.14cm、厚さ0.70cm、重量7.32g。13は鉄滓。重量33.20gを測る。

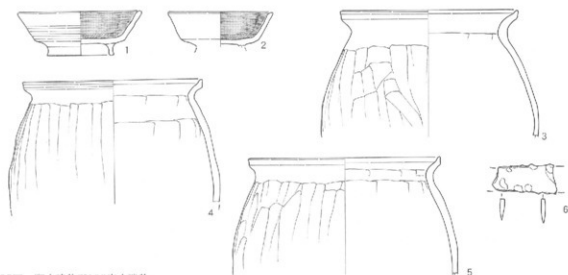
これら出土遺物は8世紀中葉に比定される。



第133図 竪穴建物SI102実測図



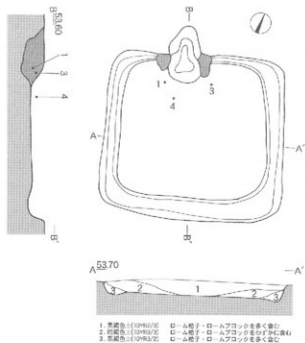
第134図 竪穴建物SI102カマド実測図



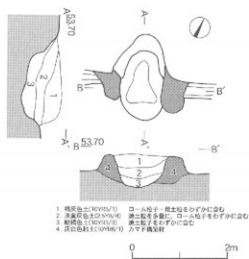
第135図 竪穴建物SI102出土遺物

54) 竪穴建物跡SI108 (第151~153図)

調査区の南側に位置し、西側が未調査区域に広がっている。規模は南北軸長3.72m、検出された東西軸長2.28mを測り、平面形は方形を呈するものと推定される。カマドは北壁に設置されており、主軸方位はN-8°-Wを示す。床面はほぼ平坦で、壁面は外傾して立ち上がり、壁高は18.0~30.0cmを測る。壁溝は全周し、規模は上面幅で13.0



第136図 竪穴建物SI103実測図



第137図 竪穴建物SI103カマダ実測図



第138図 竪穴建物SI103出土遺物



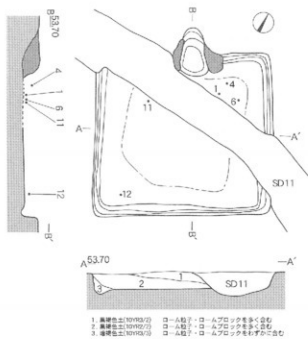
～28.0cm、深さ0.5～11.0cmの横断面U字状を呈する。覆土は2層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。カマダは北壁辺に設置されており、遺存状況は西側半分が未調査区域に延びている。北壁面は43.0cm三角形に掘り込んで煙道部としている。規模は焚口部から煙道部までの長さ98.0cm、検出された両軸間の最大幅58.0cm、袖部構築材は灰白色粘土で構築されている。

遺物は土師器・坏、高台付坏、盤、甕。管状土鍾・刀子が出土。1の坏底部は回転ヘラケズリ。内面はヘラミガキの後に黒色処理。2～4は高台付坏。内面はヘラミガキの後に黒色処理。5・6は盤。内面はヘラミガキの後に黒色処理。9は管状土鍾。細長い紡錘状を呈する。長さ4.29cm、幅1.30cm、孔径0.36cm、重量6.76g。10は刀子。刃部の折損品。錆化が著しい。現存長8.00cm、刃幅0.86cm、背厚0.29cm、重畳10.20g。

これら出土遺物は9世紀前葉に比定される。

55) 竪穴建物跡SI109 (第154・155・157図)

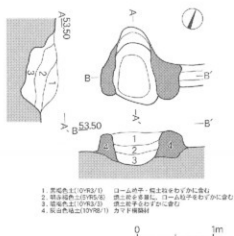
調査区の南側に位置し、SI110、120を切って構築している。規模は南北軸長4.99m、東西軸長5.80mを測り、平面形は長方形。カマダは北壁に設置されており、主軸方位はN-8°-Wを示す。床面はほぼ平坦で、壁面は外傾して立ち上がり、壁高は12.0～35.0cmを測る。壁溝は北壁辺西側、西壁辺、南壁辺西側で掘削されており、その規模は上面幅で11.0～23.0cm、深さ2.0～4.0cmの横断面U字状を呈する。柱穴は梯子穴1本穿つてある。径21.0×



第139図 竪穴建物SI104実測図

0 2m

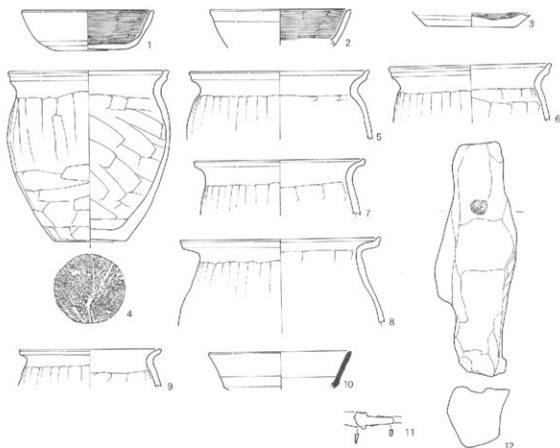
- | | |
|-----------------|--------------------|
| 1 黒緑色土(10YR5/2) | ロ—ム砂子・ロ—ム下ロシカを多く含む |
| 2 黒緑色土(10YR5/2) | ロ—ム砂子・ロ—ム下ロシカを多く含む |
| 3 黒緑色土(10YR5/2) | ロ—ム砂子・ロ—ム下ロシカを多く含む |



第140図 竪穴建物SI104カマド実測図

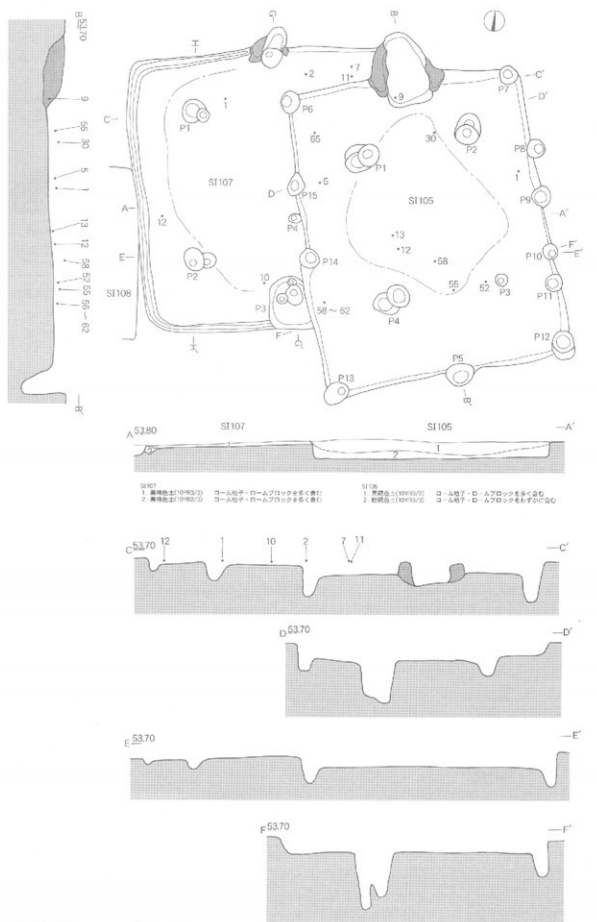
0 1m

- | | |
|-----------------|-----------------------|
| 1 黒褐色土(10YR5/2) | ロ—ム砂子・粘土粒を多く含む |
| 2 黒褐色土(10YR5/2) | 粘土層を多く含む・ロ—ム砂子をわずかに含む |
| 3 黒褐色土(10YR5/2) | 粘土層を多く含む |
| 4 黒褐色土(10YR5/2) | カマド焼跡 |



第141図 竪穴建物SI104出土遺物

0 10cm

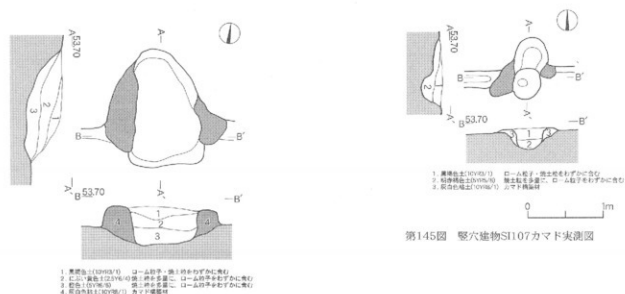


第142図 型穴建物SI105・107実測図(1)

0 2m



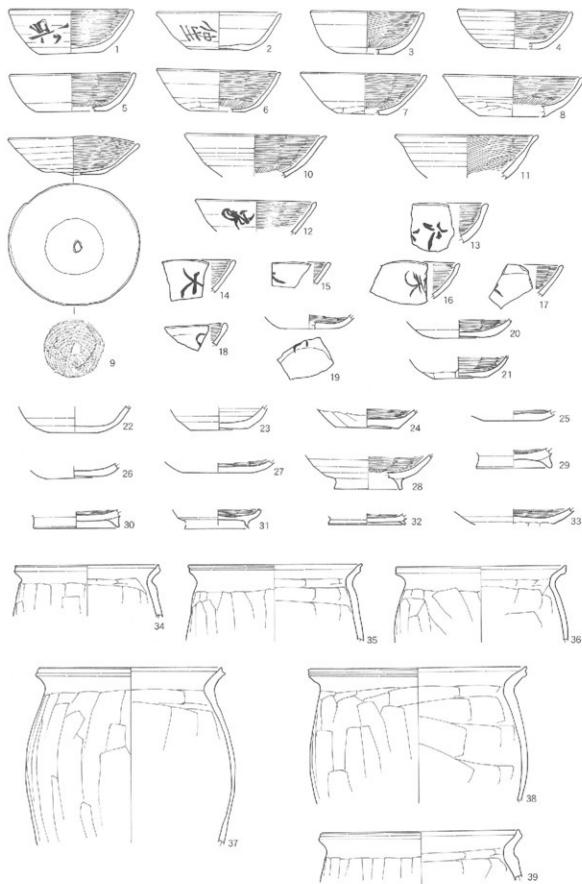
第143図 竪穴建物SI105・107実測図(2)



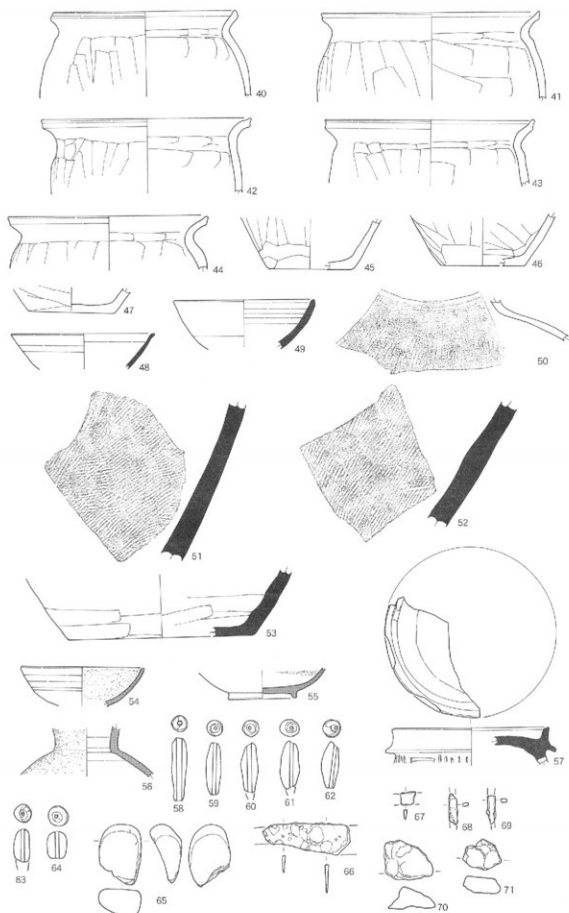
第144図 竪穴建物SI105カマド実測図

20.5cmの円形、深さ42.0cmを測る。覆土は2層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。カマドは北壁辺に設置されており、遺存状況は比較的良好である。北西壁面を53.0~58.0cm箱形に掘り込んで煙道部としている。規模は焚口部から煙道部までの長さ111.0cm、検出された両袖間の最大幅112.0cm、袖部構築材は灰白色粘土で構築されている。

遺物は土師器・環、高台付坏、皿、耳皿、甕、須恵器・甕、灰軸陶器・皿、耳皿、管状土鍾、砥石が出土。1~28は土師器。1~11・16は坏で内面はヘラミガキの後に黒色処理を施している。12~15・17は皿。外面に判読できないが墨書されている。18は高台付坏。内面はヘラミガキの後に黒色処理。19はロク口成形で、高台は貼付け、内面はヘラミガキの後に黒色処理を施している。20は耳皿。高台部の一部を欠損。口縁端縁を両側から折り曲げている。内面ヘラミガキの後黒色処理を施している。21~27は甕、口縁端部は揃み上げられている。29~32は須恵器・甕。29は口唇部が外方へ折り曲げられている。口縁部は横波状文。30~32は外面が平行タタキにより器面調整を施している。28は灰軸陶器・皿の高台部破片。33は灰軸陶器・耳皿。口縁部の一部を欠損する。口縁端縁を両側から折り曲げている。底部は回転糸切り痕を残している。11世紀中葉。34・35は管状土鍾。34は長さ2.90cm、幅2.16cm、孔径0.26cm、重量14.72g。35は細長い紡錘状を呈する。長さ4.52cm、幅1.03cm、孔径0.23cm、重量4.50g。36は凝灰岩製の砥石。上端を欠損している。表裏両面、右側面に研磨面がみられ、とくに右側面は研ぎ減りが著しく巧みになっている。長さ15.80cm、幅4.82cm、厚さ3.12cm、重量300.0g。これら出土遺物は11世紀中

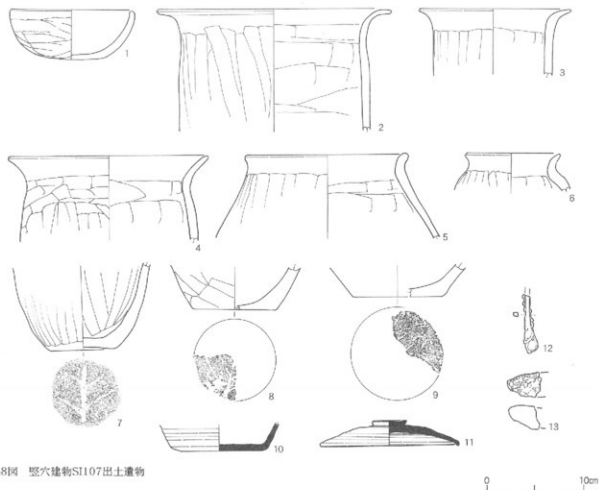


第146図 堅穴建物SI105出土遺物(1)



第147図 聚穴建物SI105出土遺物 (2)

0 10cm



第148図 竪穴建物SI107出土遺物

葉に比定される。

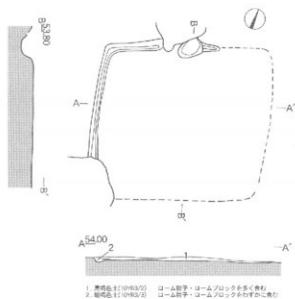
56) 竪穴建物跡SI110 (第154・156図)

調査区の南側に位置し、SI109およびSI120によって切られている。規模は南北軸長0.88m、検出された東西軸長3.39mを測り、平面形は方形を呈するものと推定される。カマドは北壁に設置されているものとする、主軸方位はN-9°-Wを示す。床面はほぼ平坦で、壁面は外傾して立ち上がり、壁高は8.0~21.5cmを測る。壁溝は西壁辺および南壁辺で掘削されており、その規模は上面幅で12.0~22.0cm、深さ1.0~7.0cmの横断面U字状を呈する。覆土は自然堆積である。

遺物は管状土鍾1点のみである。長さ3.42cm、幅1.82cm、孔径0.39cm、重量10.34g。構築時期はSI109の11世紀よりも古期である。

57) 竪穴建物跡SI111 (第158~160図)

調査区の南側に位置し、SI112を切って構築している。規模は南北軸長3.16m、東西軸長3.21mを測り、平面形は方形を呈するものと推定される。カマドは北壁に設置されており、主軸方位はN-10°-Wを示す。床面はほぼ平坦で、壁面は外傾して立ち上がり、壁高は22.0~35.5cmを測る。柱穴は梯子穴1本穿ってある。径44.0×31.0cmの楕円形、深さ24.6cmを測る。覆土は4層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。カマドは北壁辺に設置されており、遺存状況は比較的良好である。北壁面を42.0~47.0cm半円形に掘り込んで煙道部としている。規模は焚口部から煙道部までの長さ91.0cm、検出された両袖間の最大幅135.0cm、袖部構築材は灰白色粘土で構築されている。



第149図 竪穴建物SI106実測図



第150図 竪穴建物SI106出土遺物

6° - Wを示す。床面はほぼ平坦で、壁面は外傾して立ち上がり、壁高は21.0~35.0cmを測る。覆土は自然堆積である。

遺物は土師器・甕、粗製土器が出土。1は内湾気味の体部から口縁部は強く外反し、口縁端部は積み上げられている。3は粗製土器で鉢形を模した手捏土器。底部に木葉痕を残置する。8世紀代と推定する。

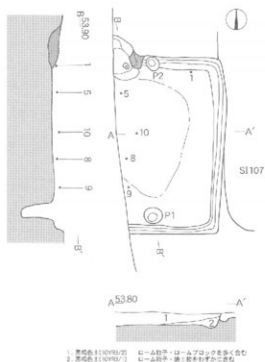
59) 竪穴建物跡SI113 (第162・163図)

調査区の北西側に位置し、西側大半が未調査区域に広がっている。規模は南北軸長5.04m。検出された東西軸長1.52mを測り、平面形は方形を呈するものと推定される。カマドは北壁に設置されているものとして、主軸方位はN-12° - Wを示す。床面は平坦で、壁面はほぼ垂直気味に立ち上がり、壁高は57.0~65.5cmを測る。壁溝は北辺掘削部が欠ける。規模は上面幅で21.0~30.0cm、深さ2.0~8.0cmの横断面U字状を呈する。柱穴は主柱穴2本が検出できる。P1は径40.0×37.0cmの円形、深さ45.9cm。P2は径37.5×25.0cmの楕円形、深さ49.5cm。北壁際P3は径26.0×17.0cmの楕円形、深さ40.3cmを測る。覆土は5層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。北東隅に貯蔵穴P3が設置され、長軸112.0cm、短軸84.0cmの楕円形、深さ8.3cmを測る。

遺物は土師器・碗、甕、須恵器・坏、高台付坏、蓋、甕が出土。1~8は土師器。1は碗。2~8は甕。2~5は内湾気味の体部から口縁部は強く外反し、口縁端部は積み上げられている。9~17は須恵器。9~12は坏。底部はいずれも手持ちヘラケズリ。15は蓋。口縁端部は 擬宝珠状のツマミが付く。16~17は甕の胴部破片で、外面はタタキにより器面調整を施している。これら出土遺物は8世紀後葉に比定される。

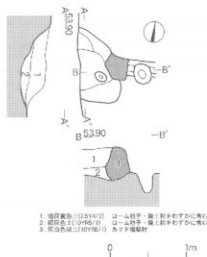
60) 竪穴建物跡SI114 (第164~166図)

調査区の南側に位置し、規模は南北軸長2.81m、東西軸長2.99mを測り、平面形は方形。カマドは北壁に設置されており、主軸方位はN-11° - Wを示す。床面はほぼ平坦で、壁面は外傾して立ち上がり、壁高は14.0~21.5cmを測る。壁溝は北西壁側面に掘削されている。規模は上面幅で8.0~16.0cm、深さ1.0~5.5cmの横断面U字状を呈する。柱穴は梯子穴1本穿ってある。径22.0×21.0cmの円形、深さ51.5cmを測る。覆土は3層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。カマドは北壁側に設置されており、遺存状況は比較的良好である。北壁面を47.0~49.0cm箱形に掘り込んで煙道部としている。規模は焚口部から煙道部までの長さ99.0cm。検出された両袖間の最大幅141.0cm。袖部構築材は灰白色粘土で構築されている。



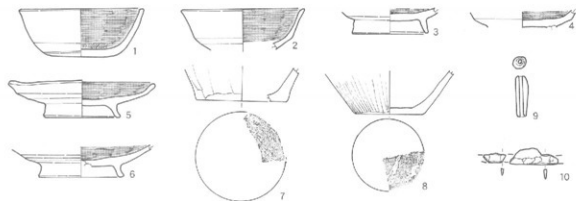
第151図 竪穴建物SI108実測図

0 2m



第152図 竪穴建物SI107カマド実測図

0 1m



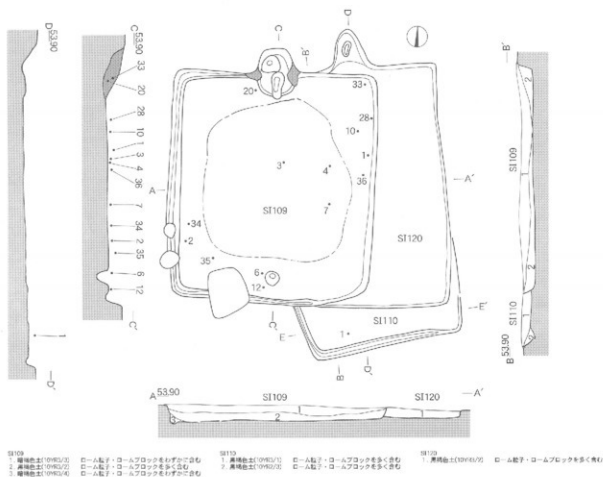
第153図 竪穴建物SI108出土遺物

0 10cm

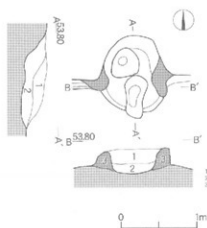
遺物は土師器・埴、甕、須恵器・高台付埴が出土。1～6は土師器。1の埴は内面がヘラミガキの後に黒色処理を施している。2～6は甕。2・3は内湾気味の体部から口縁部は強く外反し、口縁端部は積み上げられている。7は須恵器・高台付埴。これら出土遺物は8世紀後葉に比定される。

61) 竪穴建物跡SI115 (第167・170図)

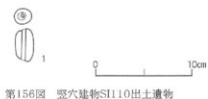
調査区の北西側に位置し、建物東側大半が未調査区域に広がっている。規模は南北軸長2.89m、検出された東西軸長0.71mを測り、平面形は方形を呈するものと推定される。カマドは北壁に設置されているものだとすると、主軸方位はN-7°-Wを示す。床面はほぼ平坦で、壁面は外傾して立ち上がり、壁高は7.0～12.0cmを測る。壁溝は全周し、



第154図 竪穴建物SI109・110・120実測図

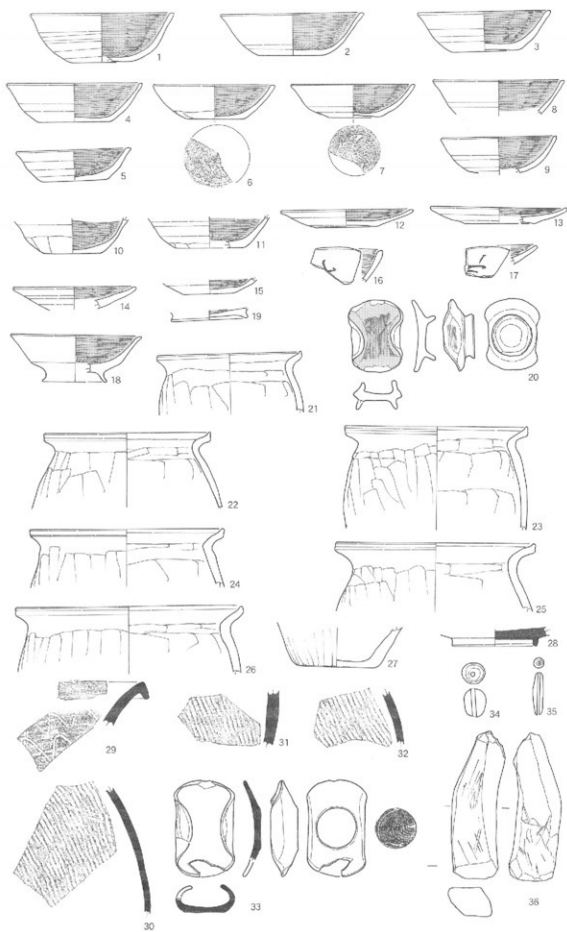


第155図 竪穴建物SI109カマド実測図

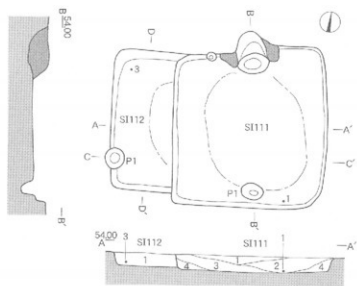


第156図 竪穴建物SI110出土遺物

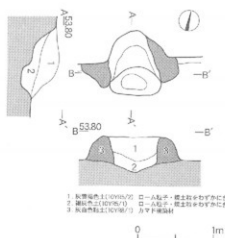
1. 黒褐色土(10%R/1) ①-A転子・黒土粘土をわずかに含む
 2. 黒褐色土(10%R/2) ②-A転子・黒土粘土をわずかに含む
 3. 灰褐色土(10%R/2) マサド凝結材



第157図 竪穴建物SI109出土遺物

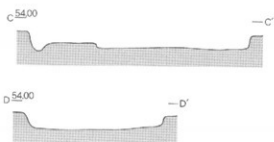


- SI111
 1 黒褐色土(10/R2) ② ローム質子・ロームブロックをわずかに含む
 2 緑褐色土(10/R4) ③ ローム質子・ロームブロックをわずかに含む
 3 暗褐色土(10/R3) ④ ローム質子・ロームブロックをわずかに含む
 4 黒褐色土(10/R2) ⑤ ローム質子・ロームブロックをわずかに含む
 ⑥ 子



- 1 黒褐色土(10/R2) ② ローム質子・ロームブロックをわずかに含む
 2 緑褐色土(10/R4) ③ ローム質子・ロームブロックをわずかに含む
 3 黒褐色土(10/R2) ④ 子

第159図 竪穴建物SI111カマド実測図



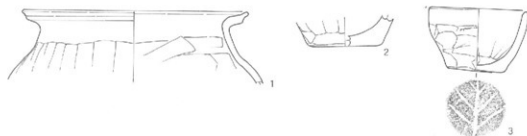
第158図 竪穴建物SI111・112実測図

0 2m



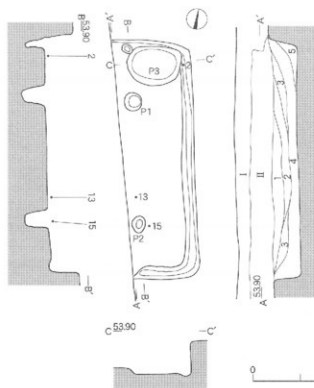
第160図 竪穴建物SI111出土遺物

0 10cm



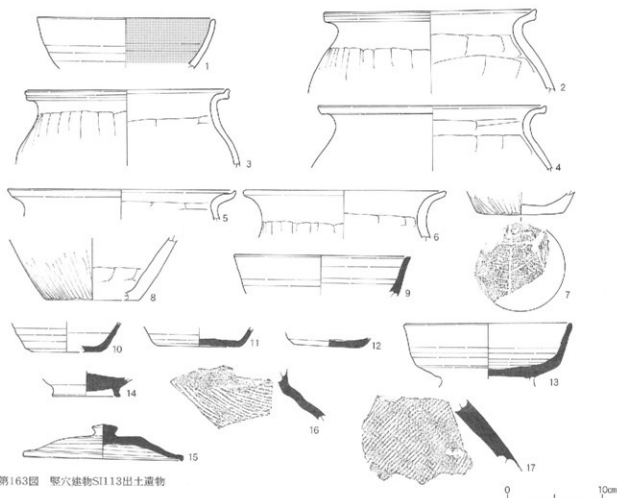
第161図 竪穴建物SI112出土遺物

0 10cm

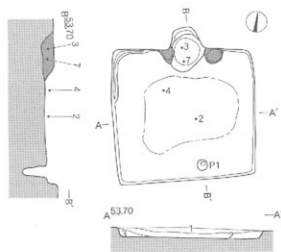


- | | |
|------------------|--------------------|
| 1. 黒川粘土(10964/1) | 新粘土 |
| 2. 黒川粘土(10962/1) | ① 瓦土層・ローム粘土をわずかに含む |
| 3. 黒川粘土(10963/1) | ② 土層・ローム粘土をわずかに含む |
| 4. 黒川粘土(10962/2) | ③ 土層・ローム粘土を多く含む |
| 5. 黒川粘土(10963/2) | ④ 土層・ローム粘土を多く含む |
| 6. 黒川粘土(10962/3) | ⑤ 土層をわずかに含む |
| 7. 黒川粘土(10963/3) | ⑥ 土層・ローム粘土をわずかに含む |

第162図 竪穴建物SI113実測図

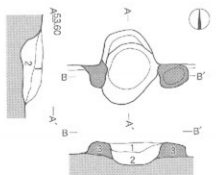


第163図 竪穴建物SI113出土遺物



- 1 黒褐色土(1992/2) □—A段下・ロムブロックを多しに敷付
 2 黒色土(1992/2) □—A段下・ロムブロックをわずかに敷付
 3 黒褐色土(1992/2) □—A段下・ロムブロックをわずかに敷付

第164図 竪穴建物SI114実測図



- 1 黒褐色土(1992/2) □—A段下・黒土をわずかに敷付
 2 黒色土(1992/2) □—A段下・黒土をわずかに敷付
 3 黒褐色土(1992/2) カマド構造部



第165図 竪穴建物SI114カマド実測図



第166図 竪穴建物SI114出土遺物

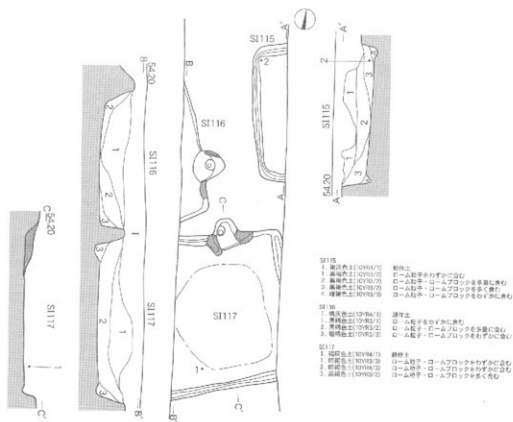


規模は上面幅で12.0～23.0cm、深さ1.0～5.0cmの横断面U字状を呈する。覆土は4層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。

遺物は土師器・灰、甕が出土。1は環の体部下半部。内面はヘラミガキの後に黒色処理を施している。これら出土遺物は9世紀前葉に比定される。

62) 竪穴建物跡SI116 (第167・168・171図)

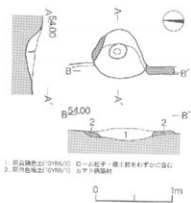
調査区の北西側に位置し、西側大半が未調査区域に広がっている。規模は南北軸長1.90m、検出された東西軸長



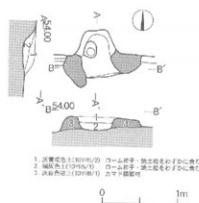
第167図 竪穴建物SI115・116・117実測図

0 2m

- SI115
- | | |
|------------------|--------------------|
| 1. 黒褐色土(10946/1) | 粘粉土 |
| 2. 黒褐色土(10946/2) | ローム層をわずかに含む |
| 3. 黒褐色土(10946/3) | ローム層・ロームブロックを多量に含む |
| 4. 黒褐色土(10946/4) | ローム層・ロームブロックを多く含む |
- SI116
- | | |
|------------------|---------------------|
| 1. 黒褐色土(10946/1) | 適年土 |
| 2. 黒褐色土(10946/2) | ローム層をわずかに含む |
| 3. 黒褐色土(10946/3) | ローム層・ロームブロックを多量に含む |
| 4. 黒褐色土(10946/4) | ローム層・ロームブロックをわずかに含む |
- SI117
- | | |
|------------------|---------------------|
| 1. 黒褐色土(10946/1) | 粘粉土 |
| 2. 黒褐色土(10946/2) | ローム層・ロームブロックをわずかに含む |
| 3. 黒褐色土(10946/3) | ローム層・ロームブロックを多く含む |



第168図 竪穴建物SI116カマド実測図



第169図 竪穴建物SI117カマド実測図



第170図 竪穴建物SI115出土遺物



第171図 竪穴建物SI116出土遺物



第172図 竪穴建物SI117出土遺物

0.42mを測り、平面形は方形を呈するものと推定される。カマドは東壁に設置されており、主軸方位はN-75°-Eを示す。床面はほぼ平坦で、壁面は外傾して立ち上がり、壁高は9.5~22.0cmを測る。覆土は3層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。カマドは東壁辺に設置されており、遺存状況は不良である。北壁面を47.0~49.0cm半円形に掘り込んで煙道部としている。規模は焚口部から煙道部までの長さ66.0cm、検出された両袖間の最大幅63.0cm、袖部構築材は灰白色粘土で構築されている。

遺物は土師器・甕、須恵器・坏が出土。1の土師器・甕は口縁部が外反し、口縁端部は積み上げられている。これら出土遺物は9世紀前半に比定される。

63) 竪穴建物跡SI117 (第167・169・172図)

調査区の北西側に位置し、建物東側・西側は未調査区域に広がっている。規模は南北軸長3.30m、検出された東西軸長2.22mを測り、平面形は方形を呈するものと推定される。カマドは北壁に設置されており、主軸方位はN-9°-Wを示す。床面はほぼ平坦で、壁面は外傾して立ち上がり、壁高は1.0~14.5cmを測る。壁溝は北壁に一部掘削部が欠ける部分のみられるが、検出された東辺および南辺および北辺で確認される。規模は上面幅で14.0~22.0cm、深さ1.0~5.0cmの横断面U字状を呈する。覆土は3層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。カマドは北壁辺に設置されており、遺存状況は比較的良好である。北壁面を32.0~35.0cm箱形に掘り込んで煙道部としている。規模は焚口部から煙道部までの長さ76.0cm、検出された両袖間の最大幅100.0cm、袖部構築材は灰白色粘土で構築されている。

遺物は須恵器・蓋が出土。天井部は回転ヘラケズリ。9世紀前半に比定される。

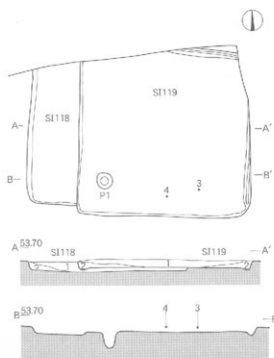
64) 竪穴建物跡SI118 (第173・174図)

調査区の南西側に位置し、SI119によって大半が切られている。確認できる規模は南北軸長2.97m、東西軸長1.07mを測り、平面形は方形を呈するものと推定される。カマドは北壁に設置されているものとする、主軸方位はN-2°-Eを示す。床面はほぼ平坦で、壁面は外傾して立ち上がり、壁高は10.0~20.5cmを測る。覆土は2層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。

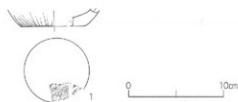
遺物は土師器・甕が出土。底部は木炭痕が残置している。9世紀代と推定する。

65) 竪穴建物跡SI119 (第173・175図)

調査区の南西側に位置し、北西側、北東側は未調査区域に広がっている。規模は南北軸長3.47m、検出された東西軸長3.68mを測り、平面形は方形を呈するものと推定される。カマドは北壁に設置されているものとする、主軸方位はN-1°-Wを示す。床面はほぼ平坦で、壁面は外傾して立ち上がり、壁高は7.0~17.0cmを測る。壁溝は北壁辺・東壁辺に掘削し、規模は上面幅で14.0~19.0cm、深さ2.0~8.0cmの横断面U字状を呈する。覆土は2層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。

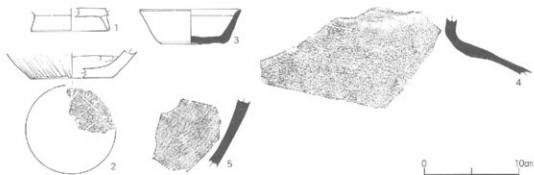


第173図 竪穴建物SI118・119実測図



第174図 竪穴建物SI118出土遺物

- | | | |
|------------------|----------------------|----------------------|
| SI118 | 1. 須恵器土(12000/2) | ロ-A段ナ・ロ-Aブロックをわずかに含む |
| 2. 高埴赤土(12000/2) | ロ-A段ナ・ロ-Aブロックを多く含む | |
| SI119 | 1. 須恵器土(12000/2) | ロ-A段ナ・ロ-Aブロックを多く含む |
| 2. 高埴赤土(12000/2) | ロ-A段ナ・ロ-Aブロックをわずかに含む | |

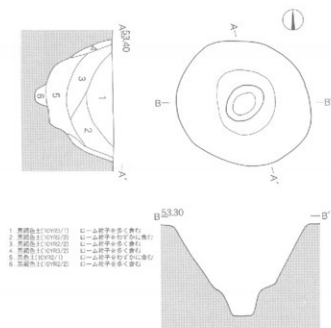


第175図 竪穴建物SI119出土遺物

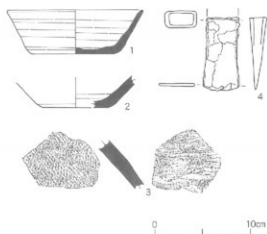
遺物は土師器・高台付坏、甕、須恵器・坏、甕が出土。1・2は土師器。2の甕底部は木炭痕を残置する。3～5は須恵器。3の坏底部は回転ヘラキリ。4・5は甕の胴部破片で、外面はタタキにより器面調整を施している。12～14は平行タタキ。15は平行タタキにより格子目状を呈する。これら出土遺物は8世紀後葉に比定される。

66) 竪穴建物跡SI120 (第154図)

調査区の南側に位置し、SI109に切られ、SI110を切って構築している。規模は南北軸長5.65m、検出された東西軸長3.80mを測り、平面形は長方形を呈するものと推定される。カマドは北壁に設置されており、主軸方位はN-8°-Wを示す。床面はほぼ平坦で、壁面は外傾して立ち上がり、壁高は14.0～17.5cmを測る。覆土は自然堆積である。カマドは北壁面に設置されており、遺存状況は不良である。北東壁面を81.0cm三角形状に掘り込んで煙道部と



第176図 円形有段遺構SX01実測図



第177図 円形有段遺構SX01出土遺物

している。規模は焚口部から燃道部までの長さ92.0cm、検出された両袖間の最大幅70.0cm、遺物の出土はない。構築時期はSI109の11世紀よりも古期である。

第2項 円形有段遺構

1) 円形有段遺構SX01 (第176・177図)

調査区の南側に位置し、いわゆる氷室と想定される円形有段遺構である。平面形は円形を呈し上径2.80×2.59m、下径1.35×1.21m、底面までの深さ131.0cmで、壁面は外傾して立ち上がる。底面中央に径0.89×0.70mの円形の掘り込みがみられる。掘り込みの深さは48.0cmである。覆土は6層に分層でき、レンズ状堆積を示す自然堆積である。

遺物は須恵器・坏、甕が出土。1の坏底部回転ヘラケズリ。胎上に海綿骨針を含む。2の坏底部も回転ヘラケズリ。3は突脚部破片で、外面はタタキにより器面調整を施している。4は鉄斧。有袋式無肩の手斧。小型で整った造りである。長さ8.4cm、幅0.38cm、重量131.0gを測る。これら出土遺物は9世紀前葉に比定される。

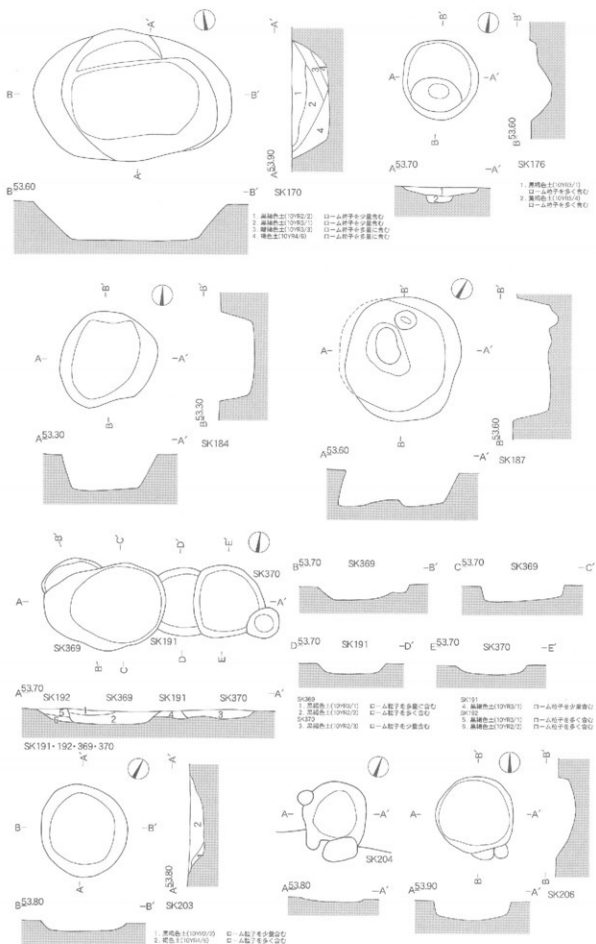
第3項 土坑 (第178～181図)

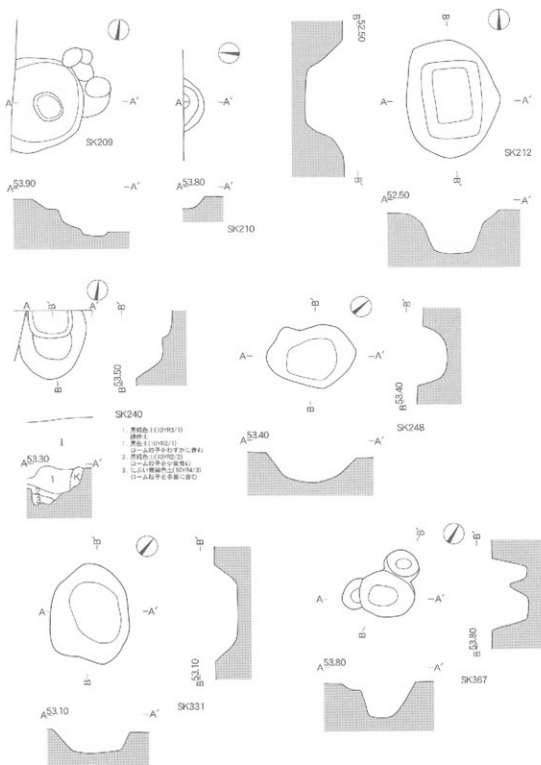
1) 土坑SK170 (第178・180図)

調査区の中央に位置し、平面形は楕円形。長径3.09m、短径2.03m、深さ58.6cm。壁面は外傾して立ち上り、底面は平坦。全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。覆土は4層の自然堆積層である。遺物は土師器・甕、須恵器・坏、高台付坏が出土(第180図1～4)。3の坏底部は回転ヘラケズリ。4の底部にヘラ記号。8世紀後半に比定できる。

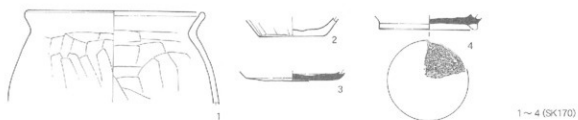
2) 土坑SK176 (第178・180図)

調査区の南側に位置し、平面形は円形。長径1.26m、短径1.17m、深さ26.4cm。南側に0.79×0.55cm、深さ0.12cmの楕円形ピットを伴う。壁面は外傾して立ち上り、底面はほぼ平坦で、全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。覆土は2層の自然堆積層である。遺物は土師器・坏が出土(第180図5)。5は底部回転ヘラケ





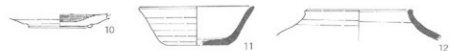
0 1 2m



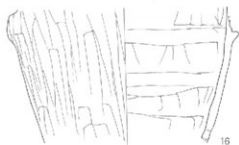
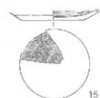
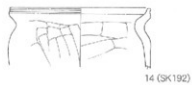
1~4 (SK170)



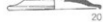
6~9 (SK184)



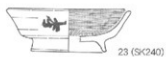
10~12 (SK187)



15・16 (SK204)

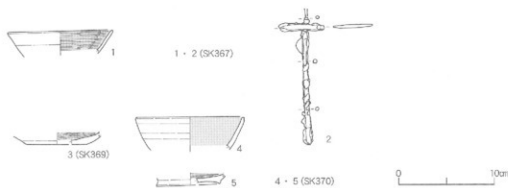


18~20 (SK209)



第180図 土坑(古代)出土遺物 (1)

0 10cm



第181図 土坑(古代)出土遺物(2)

ズリ。9世紀後葉に比定される。

3) 土坑SK184 (第178・180図)

調査区の南西側に位置し、平面形は楕円形。長径1.52m、短径1.43m、深さ54.8cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。覆土は黒褐色土の単一層で少量のローム粒・ロームブロックを含み、締りがなく、粘性に欠ける。自然堆積層である。遺物は土師器・杯、甕が出土(第180図6～9)。7は杯底部は回転ヘラケズリ。9世紀後葉と推定する。

4) 土坑SK187 (第178・180図)

調査区の南側に位置し、平面形は楕円形。長径1.94m、短径1.79m、深さ56.3cm。壁面は外傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦で、全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。北側に33.0×30.0cm、深さ8.2cmの円形ピットを伴う。覆土は黒褐色土の単一層で少量のローム粒を含み、締りがなく、粘性に欠ける。自然堆積層である。遺物は土師器・皿、須恵器・杯、短頸壺が出土(第180図10～12)。10は底部回転ヘラケズリ。11の底部は回転ヘラケズリ。8世紀後葉に比定できる。

5) 土坑SK191 (第178・180図)

調査区の南側に位置し、東側でSK370、西側でSK369によって切られている。平面形は円形を呈するものと推定できる。確認面で長径1.07m、短径0.42m、深さ13.1cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦で、全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。覆土は黒褐色土の単一層で少量のローム粒を含み、締りがなく、粘性に欠ける。自然堆積層である。遺物は土師器・皿が出土(第180図13)。13は底部回転ヘラケズリ。9世紀代と推定する。

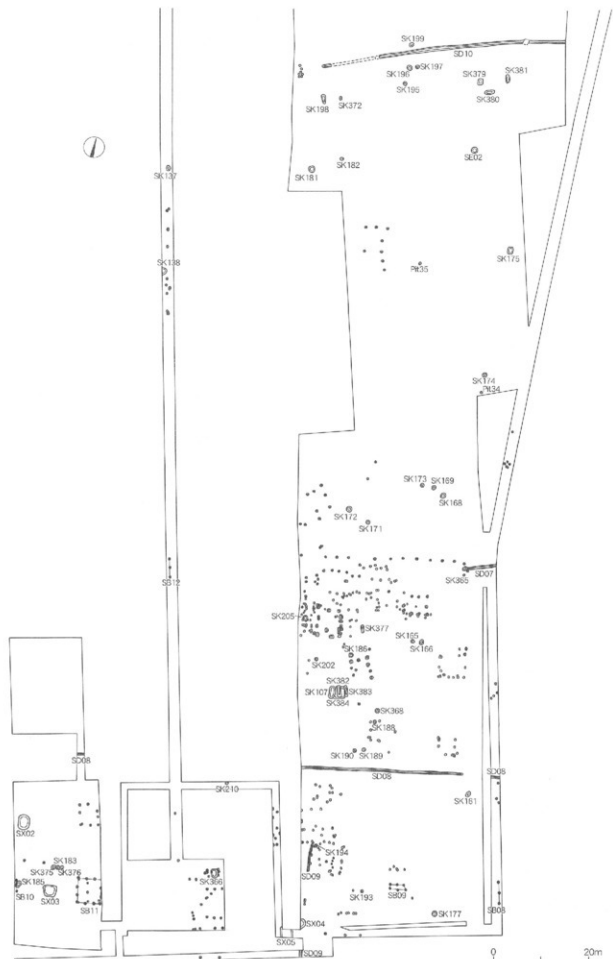
6) 土坑SK192 (第178・180図)

調査区の南側に位置し、南側でSK369によって大きく切られている。平面形は確認面で楕円形。長径0.93m、短径0.25m、深さ12.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦で、全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。覆土は2層の自然堆積層である。遺物は土師器・甕が出土(第180図14)。9世紀代と推定できる。

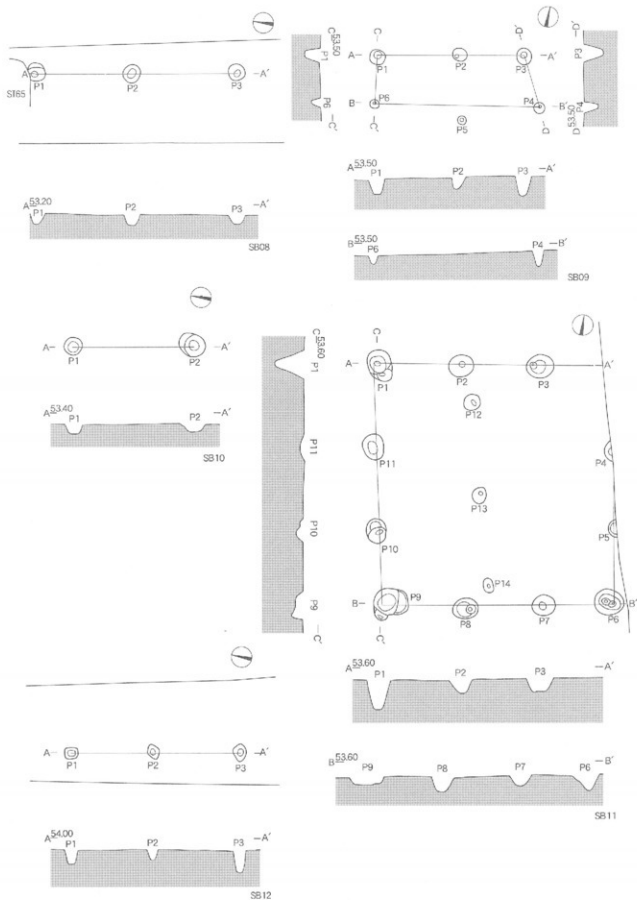
7) 土坑SK203 (第178図)

調査区の南側に位置し、平面形は円形。長径1.46m、短径1.38m、深さ13.9cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦で、全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。覆土は2層の自然堆積層である。遺物は出土していないが、覆土の状況から古代と推定できる。

8) 土坑SK204 (第178・180図)

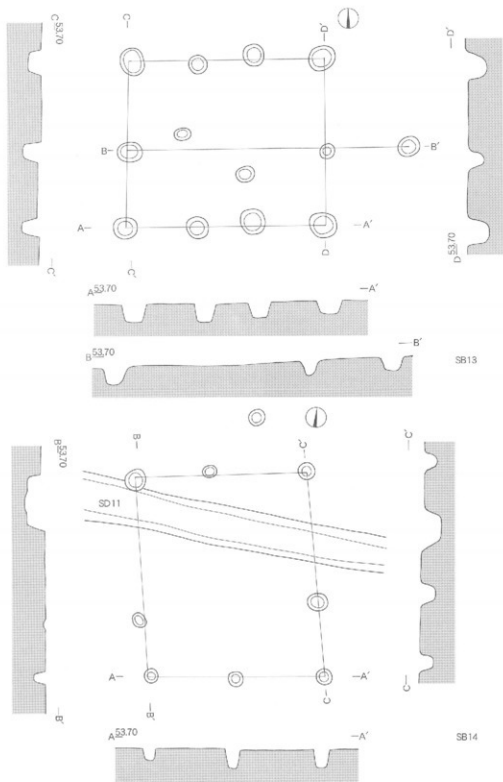


84 第182図 中世以降の遺構



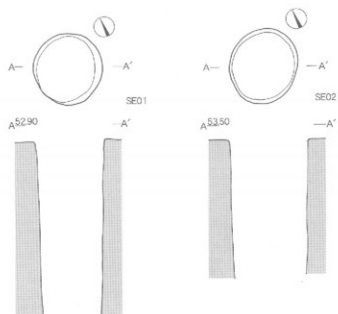
第183図 掘立柱建物跡SB08・09・10・11・12実測図

0 2m



第184図 掘立柱建物跡SB13・14実測図

0 2m



第185図 井戸SE01・02実測図

0 1m



第186図 井戸SE02出土遺物

調査区の南側に位置し、平面形は円形。長径1.01m、短径0.93m、深さ8.0cm。壁面は壁面は外傾して立ち上がる。底面は全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。覆土は黒褐色土の単一層で少量のローム粒を含み、締りがなく、粘性に欠ける。自然堆積層である。遺物は土師器・坏、甗が出土(第180図15・16)、15の坏は底部回転ヘラケズリ。内面ヘラミガキの後黒色処理。17は体部上部に把手が付く。9世紀代に比定される。

9) 土坑SK206 (第178・180図)

調査区の南側に位置し、平面形は円形。長径1.20m、短径1.18m、深さ30.0cm。壁面は外傾して立ち上がる。底面はやや鉢底状で全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。覆土は黒褐色土の単一層で少量のローム粒を含み、締りがなく、粘性に欠ける。自然堆積層である。遺物は須恵器・坏が出土(第180図19)。19の坏は底部回転ヘラキリ。8世紀後葉に比定できる。

10) 土坑SK209 (第179・180図)

調査区の南側に位置し、西側が未調査区域に延びている。平面形は確認面で円形を呈し、長径1.43m、短径1.13m、深さ56.7cm。やや東側で径50.0×42.0cm、8.5cmの楕円形ピットを伴う。壁面は外傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦で、全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。覆土は黒褐色土の単一層で少量のローム粒を含み、締りがなく、粘性に欠ける。自然堆積層である。遺物は土師器・坏、須恵器・高台付坏、蓋が出土(第180図20~22)。22の坏の底部回転ヘラケズリ。22の蓋のカエリは強く屈曲する。8世紀後葉に比定できる。

11) 土坑SK210 (第179・180図)

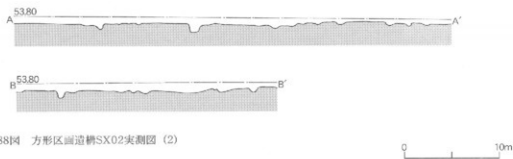
調査区の南西側に位置し、北伴部が未調査区域に延びている。平面形は円形を呈するものと推定する。長径0.78m、短径0.31m、深さ20.0cm。壁面は外傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦で、全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。覆土は黒褐色土の単一層で少量のローム粒を含み、締りがなく、粘性に欠ける。自然堆積層である。遺物は土師器・坏が出土(第180図23)。23の坏は内面ヘラミガキの後黒色処理。9世紀代と推定する。

12) 土坑SK212 (第179・180図)

調査区の北東側に位置し、平面形は楕円形。長径1.88m、短径1.47m、深さ63.5cmを測り、壁面は壁面は外傾し



第187図 方形区画遺構SX02実測図(1)



第188図 方形区画遺構SX02実測図(2)

で立ち上がる。底面はほぼ平坦で、全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。覆土は黒褐色土の単一層で少量のローム粒を含み、締りがなく、粘性に欠ける。自然堆積層である。遺物は鉄製釘が出土(第180図24)。両端が折損する。錆化が顕著で現存の長さ7.27cm、厚さ0.57cmを測る。時期は明確ではないが、古代と推定できる。

13) 土坑SK240 (第179・180図)

調査区の北東側に位置し、北側で長径0.71m、短径0.44m、深さ56.5cmの方形土坑と重複している。また北側が未調査区域に延びている。平面形は楕円形を呈し、確認面で長径1.07m、短径1.00m、深さ41.5cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は西側が深いほぼ平坦で、全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。覆土は黒褐色土の単一層で少量のローム粒を含み、締りがなく、粘性に欠ける。自然堆積層である。遺物は土師器・高台付坏が出土(第180図25)。25は底部回転ヘラケズリ。内面ヘラミガキの後黒色処理。外面に墨書「木カ」が習書されている。9世紀前葉に比定される。

14) 土坑SK248 (第179・180図)

調査区の北東側に位置し、平面形は楕円形。長径1.43m、短径0.93m、深さ43.3cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は鍋底状で、全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。覆土は黒褐色土の単一層で少量のローム粒を含み、締りがなく、粘性に欠ける。自然堆積層である。遺物は土師器・坏が出土(第180図24)。24は内面ヘラミガキの後黒色処理。9世紀代と推定できる。

15) 土坑SK331 (第179・181図)

調査区の北東側に位置し、平面形は楕円形。長径1.50m、短径1.22m、深さ37.8cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦で、全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。覆土は黒褐色土の単一層で少量のローム粒を含み、締りがなく、粘性に欠ける。自然堆積層である。遺物の出土はなかったが、覆土の状況から古代と推定できる。

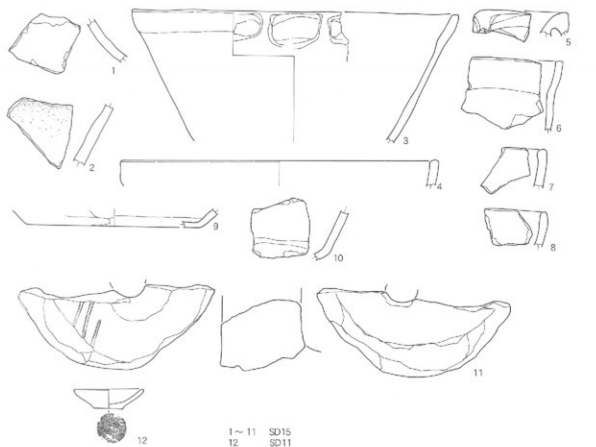
16) 土坑SK367 (第179・181図)

調査区の南西側に位置し、2基のピットが接している。平面形は楕円形。長径0.81m、短径0.70m、深さ55.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面はやや鍋底状を呈し、全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。覆土は黒褐色土の単一層で少量のローム粒を含み、締りがなく、粘性に欠ける。自然堆積層である。遺物は土師器・坏と鉄製紡錘車が出土(第180図1・2)。1の坏は内面ヘラミガキの後黒色処理。2は鉄製紡錘車。軸が半分折損している。現存軸長14.52cm、軸径0.42cm、弾み車径4.49cm、厚さ0.28cmを測る。9世紀代に比定できる。

17) 土坑SK369 (第178・181図)

調査区の南側に位置し、東側でSK191、北西側でSK192を切って構築している。平面形は楕円形で、長径1.93m、短径1.30m、深さ22.3cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面はほぼ平坦で、全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。覆土は2層に分層でき自然堆積である。遺物は土師器・坏が出土(第181図3)。3の坏は底部回転ヘラケズリ。内面ヘラミガキの後黒色処理。9世紀代に推定できる。

18) 土坑SK370 (第178・181図)



第189図 溝SD11・15出土遺物



調査区の南側に位置し、西側でSK191を切って構築している。平面形は円形で、長径1.12m、短径1.12m、深さ14.3cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は西側が深いほぼ平坦で、全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。覆土は黒褐色土の単一層で少量のローム粒を含み、締りがなく、粘性に欠ける。自然堆積層である。遺物は土師器・杯、高台付杯が出土(第181図4・5)。4は内面ヘラミガキの後黒色処理。5の底部は回転ヘラケズリ。内面ヘラミガキの後黒色処理。9世紀代と推定する。

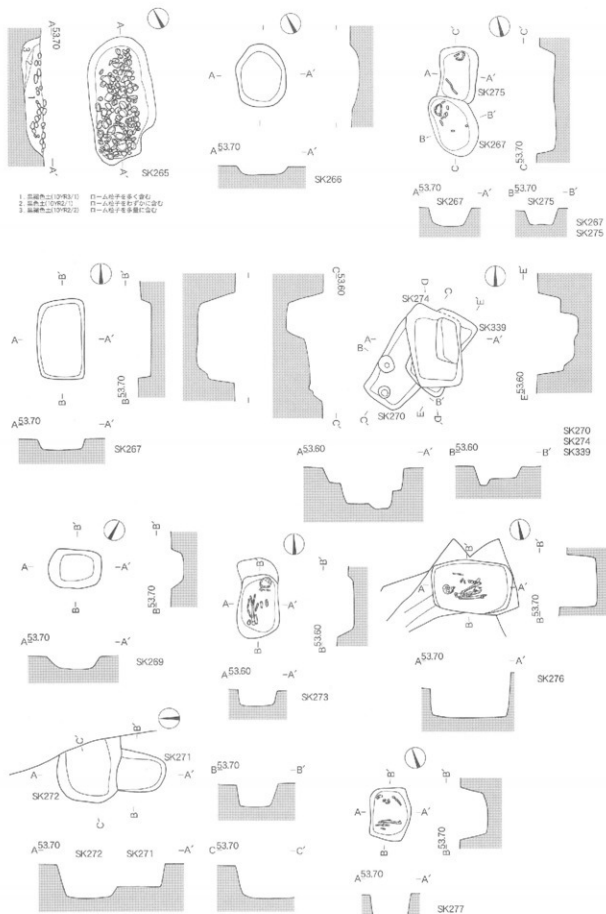
第5節 中世以降の遺構と遺物 (第183~191図)

中世以降の遺構として、掘立柱建物跡7棟、井戸2基、方形区画遺構1基、溝状遺構10条、土坑墓21基、土坑193基、柱穴1,064基が検出された。

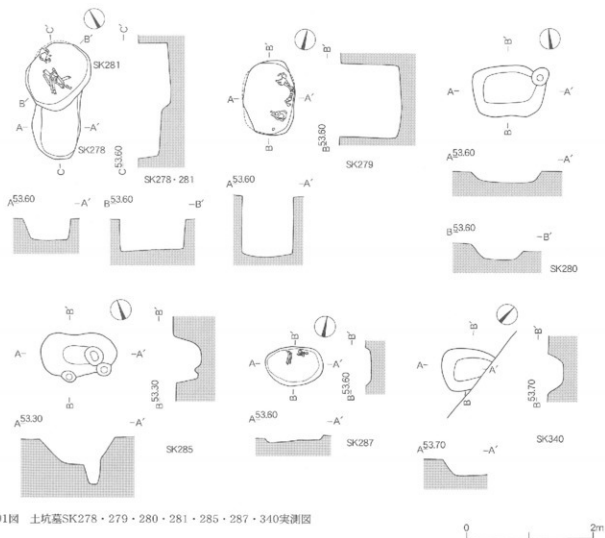
第1項 掘立柱建物跡

1) 掘立柱建物跡SB08 (第183図)

調査区南東隅に位置する。遺構は南北方向の柱穴列のみ検出され、調査区外に展開するようである。検出された規模は2間で、平面形態が不明な側柱建物である。軸方位は南北柱列でN-10°-Wを示す。1間幅、最大2.20m、最小2.10mの間隔である。柱穴の規模は径35.0~40.0cm、深さ16.9~23.5cmの規模をもち、平面形は円形を呈する。各柱穴の底部で、柱当たりによる硬化面は確認できなかった。遺物は出土していないが、覆土の状況から中世以降の所産と推定される。



第190図 土坑遺SK265・266・267・268・269・270・271・272・273・274・275・276・277・339実測図



第191図 土坑墓SK278・279・280・281・285・287・340実測図

2) 掘立柱建物跡SB09 (第183図)

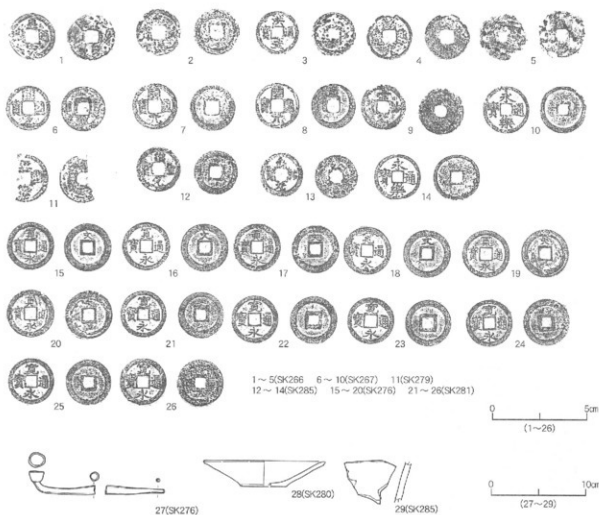
調査区南側に位置する。規模は1間×2間で、平面形態が東西方向に長い長方形を呈する側柱建物である。軸方位は東側柱列で $N-77^{\circ}-W$ を示す。概して1間は1.8m前後の間隔をもつが、最大1.85m、最小1.01mの間隔である。柱穴の規模は径16.0~36.0cm、深さ13.0~40.6cmの規模をもち、平面形は円形もしくは楕円形を呈する。各柱穴の底部で、柱当たりによる硬化面は確認できなかった。遺物は出土していないが、覆土の状況から中世以降の所産と推定される。

3) 掘立柱建物跡SB10 (第183図)

調査区南西側に位置する。遺構は南北方向の柱穴列のみ検出され、調査区外に展開するようである。検出された規模は1間で、平面形態が不明な側柱建物である。軸方位は南北柱列で $N-9^{\circ}-W$ を示す。1間幅2.50mである。柱穴の規模は径36.0~58.0cm、深さ16.5cmの規模をもち、平面形は円形を呈する。各柱穴の底部で、柱当たりによる硬化面は確認できなかった。遺物は出土していないが、覆土の状況から中世以降の所産と推定される。

4) 掘立柱建物跡SB11 (第183図)

調査区南西側に位置し、東側の一部が未調査区域に伸びている。規模は3間×3間で、平面形態がほぼ正方形を呈する側柱建物である。軸方位は東側柱列で $N-10^{\circ}-W$ を示す。概して1間は1.8mで、最大1.90m、最小1.40mの



第192図 土坑墓SK266・267・276・279・280・281・285出土遺物

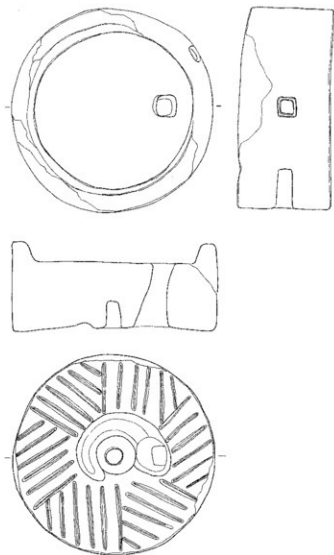
間隔である。柱穴の規模は径41.0~68.0cm、深さ13.6~63.6cmの規模をもち、平面形は円形もしくは楕円形を呈する。各柱穴の底部で、柱当たりによる硬化面は確認できなかった。遺物は出土していないが、覆土の状況から中世以降の所産と推定される。

5) 掘立柱建物跡SB12 (第183図)

調査区西側に位置する。遺構は南北方向の柱穴列のみ検出され、調査区外に展開するようである。検出された規模は2間で、平面形態が不明な掘立柱建物である。軸方位は南北柱列でN-9°-Wを示す。1間幅、最大1.75m、最小1.70mの間隔である。柱穴の規模は径24.0~48.0cm、深さ22.3~46.6cmの規模をもち、平面形は円形・方形を呈する。各柱穴の底部で、柱当たりによる硬化面は確認できなかった。遺物は出土していないが、覆土の状況から中世以降の所産と推定される。

6) 掘立柱建物跡SB13 (第184図)

調査区北側、方形区画遺構SX02の南側に位置し、SB14に近接している。規模は桁行3間×梁行2間に東側に庇が付く。主軸方位はN-88°-Eを示す。桁間は1.1~1.6m、梁間は1.6mと1.8mの間隔である。柱穴は9本検出され、径31.0~60.0cm、深さ24.0~38.0cmである。柱当たりによる硬化面は確認できなかった。出土遺物はないが、掘形



第193図 土坑SK265出土遺物

0 10cm

築である。

2) 井戸跡SE02 (第185・186図)

調査区の北側に位置する。規模は長径1.25m、短径1.18mを測り、開口部と下位面がほぼ同じの円筒形の素掘り井戸で、平面形はほぼ円形を呈する。壁面は検出面からほぼ垂直の筒状に掘り込まれている。掘削痕はみられず、起伏もなく比較的丁寧な造りである。なお湧水のため底面まで完掘することができなかったが、湧水層までは検出面から210cmである。上層はレンズ状堆積を示す自然堆積である。遺物として陶器・土受付皿の口縁部破片。近世である。

第3項 方形区画遺構SX02 (第187～189図)

調査区北端で検出された遺構で、地山であるローム面を一部掘削し削平した造成地である。広場的な空間をもち、上坑墓をはじめ、井戸(SE01)、方形堅穴遺構、土坑、柱穴などが集中して検出された。但し、北側および西側が未調査区域に延びているため、南辺と東辺の一部が明らかにされたのみで、全容は把握できない。まず、南限と東限を

が比較的簡素であることから中世以降と推定される。

7) 掘立柱建物跡SB14 (第184図)

調査区北側、方形区画遺構SX02の南側で、区内溝SD11と重複し、本跡が新規である。規模は桁行3間×梁行2間と推定される。主軸方位はN-15°-Wを示す。溝SD11と重複しているため、桁行東西列1本ずつが検出できなかった。桁間は1.6～1.7m、梁間は1.5mと2.0mの間隔である。柱穴は8本検出され、径29.0～46.0cm、深さ18.0～27.0cmである。柱当たりによる硬化面は確認できなかった。出土遺物はないが、掘形が比較的簡素であること、中世溝(15世紀後半から16世紀前半)であるSD11を切って構築していることから中世以降と推定される。

第2項 井戸跡

1) 井戸跡SE01 (第185図)

調査区の北側方形区画遺構SX02内に位置する。規模は長径1.16m、短径1.08mを測り、開口部と下位面がほぼ同じの円筒形の素掘り井戸で、平面形は円形を呈する。壁面は検出面からほぼ垂直の筒状に掘り込まれている。掘削痕はみられず、起伏もなく比較的丁寧な造りである。なお湧水のため底面まで完掘することができなかったが、湧水層までは検出面から275cmである。上層はレンズ状堆積を示す自然堆積である。遺物の出土はないが、周辺から判断して中世の構築である。

区画するのは溝SD10・11の2条で、外側がSD10、内側がSD11。いずれも南東隅から北方向に向かって延びており、外側のSD11は東西方向から南東側から鈍角の120°の角度で広がっていく。ここを区画1と呼称する。主に墓域とした空間である。

また内側の溝SD12は東西方向から南東側で直角に北走する。ここを区画2と呼称する。主に竪穴遺構や土坑、さらに建物跡と推定される柱穴群が集中している。これら2条の内側には比較的幅のある直線溝・溝SD15が掘削されている。なお、これら3条の区画溝については次項溝状遺構において詳細している。

まず溝SD11で区画されている区画1での空間は南東側に限られているが、ここに土坑墓20基が集中して検出された。存続期間については、副葬品である銭貨の出土から中世後期から近世中期にかけてであろう。確認された墓域(区画1)の規模は南北17.2m、東西13.4mである。また内側の溝SD12・15に区画された区画2内では井戸1基、土坑墓1基、方形竪穴遺構・土坑が123基と柱穴672基が検出された。ほぼ全面に遺構が検出されている。存続期間については出土遺物から中世後期から近世後期と判断できる。確認された規模は南北31.2m、東西61.9mを測る。

これら区画の性格については、区画1は明らかに墓域であり、区画2では方形竪穴遺構や土坑あるいは粘土土坑の集中から墓地を伴う。小規模な貯蔵施設空間と推定される。また区画1と区画2の関係については、今後の北側調査に委ねるほかないが、出土遺物の検証から判断してほぼ同時期に造成されたものと推定できる。

第4項 溝状遺構

1) 溝状遺構SD07 (第182図)

調査区南東側、ほぼ直線的に東西に走る溝である。東側が未調査区域に延びている。軸はN-75°-Eにとり、検出された長さ6.28m、幅0.53~0.65m、深さ6.5~21.5cmを測る。壁面は外傾して立ち上がり、横断面形はU字状を呈し、畑地区画を目的とした根切り溝と思われる。遺構の年代については、出土遺物もなく、不明な点が多いが、覆土の状態から近世以降で扱うべきと判断した。

2) 溝状遺構SD08 (第182図)

調査区南側から西側および東側排水溝予定地であるトレンチ区で検出されたほぼ直線的な東西溝である。調査区の関係で部分的であるが、ほぼ調査区域を横断して、さらに東西方向に延びている。軸はN-79°-Eにとり、全長は35m以上である。また幅0.24~0.54m、深さ2.75~28.0cmを測る。壁面は外傾して立ち上がり、横断面形はU字状を呈する。区画溝と推定される。遺構の年代については、出土遺物もなく、不明な点が多いが、覆土の状態から中世以降で扱うべきと判断した。

3) 溝状遺構SD09 (第182図)

調査区南端中央、ほぼ直線的に南北に走る溝で、南側は未調査区域に延びるため全貌を明らかにではない。軸はN-5°-Wにとり、全長は20m以上である。検出された長さ6.34m、幅0.29~0.49m、深さ2.5~5.25cmを測る。壁面は外傾して立ち上がり、横断面形はU字状を呈し、畑地区画を目的とした根切り溝と思われる。遺構の年代については、出土遺物もなく、不明な点が多いが、覆土の状態から近世以降で扱うべきと判断した。

4) 溝状遺構SD10 (第182図)

調査区北側、ほぼ直線的に東西に走る溝である。東側が未調査区域に延びている。軸はN-66°-Eにとり、検出された長さ57.24m、幅0.30~0.76m、深さ4.5~32.5cmを測る。壁面は外傾して立ち上がり、横断面形はU字状を呈し、畑地区画を目的とした根切り溝と思われる。遺構の年代については、出土遺物もなく、不明な点が多いが、覆土の状態から近世以降で扱うべきと判断した。

5) 溝状遺構SD11 (第187・189図)

調査区北側、方形区画遺構の南側を区画する溝で、東端で南北方向に向きを変え、北走する。また西側は未調査区域に延びており、区画の範囲を把握できず、方形区画するものか、あるいはコの状に区画するものかは不明。まず南限する東西方向の軸はN-81°-W。東側の北走する軸はN-22°-Eにとり、検出された全長77.56m、南側長さ74.56m、東側長さ3.0m、幅0.68~1.24m、深さ30.5~72.8cmを測る。壁面は外傾して立ち上がり、横断面形は逆台形の箱形を呈する。方形区画遺構の区画溝で、北側には溝SD12および溝SD15が並行している。年代は中世から近世であり、方形区画遺構に関連しており中世で扱うべきと判断した。区画1と呼称する。遺物として、土師質土

器・小皿の完形品が出上している(第189図12)。口径7.9cm、器高2.25cm。口縁成形で、底部に糸切り痕を残す。15世紀後半から16世紀前半に位置する。

6) 溝状遺構SD12 (第187図)

調査区北側、方形区画遺構の南側を区画する溝で、溝SD11および溝SD15に挟まれている。なお、溝SD11と同じく東端で南北方向に向きを変え、北走する。また西側は未調査区域に延びており、区画の範囲を把握できず、方形区画するものか、あるいはコの状に区画するものかは不明。まず南限する東西方向の軸はN-85°-W。東側の北走する軸はN-8°-Eにとり、検出された全長75.86m、南側長さ60.36m、東側長さ15.5m、幅0.44~2.50m、深さ2.0~16.8cmを測る。壁面は外傾して立ち上がり、横断面形はU字状を呈する。方形区画遺構の区画溝で、南側には溝SD11、北側には溝SD15が並行している。年代は中世から近世であり、方形区画遺構に関連しており中世で扱うべきと判断した。区画2と呼称する。

7) 溝状遺構SD13 (第187図)

調査区北西側の排水溝予定地であるトレンチ区で検出されたほぼ直線的な南北溝である。調査区の関係で部分的であるが、方形区画遺構の西側区画溝と推定される。軸はN-5°-Eにとり、検出された長さ1.37m、幅1.07~1.12m、深さ32.5cmを測る。壁面は外傾して立ち上がり、横断面形は逆台形の箱形を呈する。方形区画遺構の区画溝で、南側で溝SD12と接続できそうであるが、未調査区に当たるため不明である。年代は中世から近世であり、方形区画遺構に関連しており中世で扱うべきと判断した。区画2に関連するものと推定される。

8) 溝状遺構SD14 (第187図)

調査区北東端、方形区画遺構内の区画1内に位置する。ほぼ直線的な東西溝であるが、軸はN-65°-Eにとり、検出された長さ7.26m、幅0.36~0.66m、深さ21.0~38.5cmを測り、東側は未調査区域に延びている。区画1内の墓域内に掘削されているが、墓地との関連性は把握できず、壁面は外傾して立ち上がり、横断面形はU字状を呈し、掘地区画を目的とした根切り溝と思われる。遺構の年代については、出土遺物もなく、不明な点が多いが、覆土の状態から近代以降で扱うべきと判断した。

9) 溝状遺構SD15 (第187・189図)

調査区北側、方形区画遺構の内側を区画する溝である。並行する溝SD11・12と異なり、南限となる東西方向の直線溝である。軸はN-79°-W、長さ43.20m、幅0.34~2.82m、深さ8.8~14.5cmを測る。壁面は外傾して立ち上がり、横断面形はU字状を呈する。方形区画遺構の区画溝で、南側には溝SD11および溝SD12が並行している。年代は中世から近世であり、方形区画遺構に関連しており中世で扱うべきと判断した。区画2と呼称する。遺物として陶器・土師質土器が出上している(第189図1~11)。1・2は常滑・変壺類の胴部破片。3~8は土師質土器・内耳鏡。3は口径37.0cmの口縁部。耳部を残存している。9・10は底部破片。丸味をもつ。11は安山岩製の石臼。厚減のため擦り目が3条のみ確認。下白である。

第5項 土坑墓 (第190~193図)

1) 土坑墓SK265 (第190・193図)

調査区の北側、方形区画遺構区画1内に位置し、平面形は楕円形を呈し、主軸方位はN-29°-Eを示す。長軸0.89m、短軸0.73m、深さ31.5cmを測る。床面はほぼ平坦である。覆土上面に自然礫による墓石が施されている。床面上より人骨と推定される骨片がわずかに残存していた。棺桶などの構造物の痕跡が確認できないことから直葬と推定される。骨片以外の遺物として、上面より石臼が出上している。第193図1は安山岩製の石臼で、6分画6溝。径32.6cm、厚さ14.9cmを測る。掘形から判断して中世に比定できる。

2) 土坑墓SK266 (第190・192図)

調査区の北側、方形区画遺構区画1内に位置し、平面形は楕円形を呈し、主軸方位はN-30°-Eを示す。長軸1.01m、短軸0.79m、深さ13.1cmを測る。床面はほぼ平坦である。覆土は埋め戻し土層の様相を示す。床面上より鉄貨5枚が出上(第192図1~5)。皇宋通寶(北宋1033年)、元祐通寶(北宋1086年)、洪武通寶(民1368年)各1枚、不明2枚である。人骨については検出できなかった。中世に比定できる。

3) 土坑墓SK267 (第190・192図)

調査区の北側、方形区画遺構区画1内に位置し、北側で土坑墓SK275と重複し、本跡が新期である。平面形は楕円形を呈し、主軸方位は $N-16^{\circ}-W$ を示す。長軸1.41m、短軸0.70m、深さ30.0cmを測る。床面はほぼ平坦である。覆土は埋め戻し土層の様相を示す。床面上より人骨である頭部と副葬品である銭貨5枚が検出された。人骨は頭部を北側に置き、壁に接している。顔は東側に向く側臥屈葬であろう。棺桶などの構造物の痕跡が確認できないことから直葬と推定される。銭貨は開元通寶(唐621年)2枚、同じく開元通寶(唐845年・紀地銭)1枚、豊祐通寶(北宋1034年)、永樂通寶(明1408年)各1枚である(第192図6~10)。中世に比定できる。

4) 土坑墓SK268 (第190図)

調査区の北側、方形区画遺構区画1内に位置し、平面形は長方形を呈し、主軸方位は $N-0^{\circ}$ を示す。長軸1.25m、短軸0.75m、深さ18.1cmを測る。床面はほぼ平坦である。覆土は埋め戻し土層の様相を示す。床面上より人骨と推定される骨片がわずかに残存していた。棺桶などの構造物の痕跡が確認できないことから直葬と推定される。骨片以外の遺物は検出されなかった。掘形から判断して近世に比定できる。

5) 土坑墓SK269 (第190図)

調査区の北側、方形区画遺構区画1内に位置し、平面形は長方形を呈し、主軸方位は $N-65^{\circ}-E$ を示す。長軸0.83m、短軸0.60m、深さ20.0cmを測る。床面はほぼ平坦である。覆土は埋め戻し土層の様相を示す。床面上より人骨と推定される骨片がわずかに残存していた。棺桶などの構造物の痕跡が確認できないことから直葬と推定される。骨片以外の遺物は検出されなかった。掘形から判断して近世に比定できる。

6) 土坑墓SK270 (第190図)

調査区の北側、方形区画遺構区画1内に位置し、土坑墓SK270、SK339に切られている。平面形は長方形を呈し、主軸方位は $N-34^{\circ}-E$ を示す。長軸0.96m、短軸0.76m、深さ29.3cmを測る。床面はほぼ平坦で、柱穴が2本穿ってある(径 27.0×24.0 cm、深さ10.3cm、径 19.5×18.0 cm、深さ15.5cm)。覆土は埋め戻し土層の様相を示す。床面上より人骨と推定される骨片がわずかに残存していた。棺桶などの構造物の痕跡が確認できないことから直葬と推定される。骨片以外の遺物は検出されなかった。掘形から判断して近世に比定できる。

7) 土坑墓SK271 (第190図)

調査区の北側、方形区画遺構区画1内に位置し、土坑墓SK272に切られている。平面形は長方形を呈し、主軸方位は $N-3^{\circ}-E$ を示す。長軸0.74m、短軸0.63m、深さ34.4cmを測る。床面はほぼ平坦である。覆土は埋め戻し土層の様相を示す。床面上より人骨と推定される骨片がわずかに残存していた。棺桶などの構造物の痕跡が確認できないことから直葬と推定される。骨片以外の遺物は検出されなかった。掘形から判断して近世に比定できる。

8) 土坑墓SK272 (第190図)

調査区の北側、方形区画遺構区画1内に位置し、土坑墓SK271を切り、東側は未調査区域に延びている。平面形は長方形を呈し、主軸方位は $N-87^{\circ}-E$ を示す。長軸0.94m、短軸0.90m、深さ51.9cmを測る。床面はほぼ平坦である。覆土は埋め戻し土層の様相を示す。床面上より人骨と推定される骨片がわずかに残存していた。棺桶などの構造物の痕跡が確認できないことから直葬と推定される。骨片以外の遺物は検出されなかった。掘形から判断して近世に比定できる。

9) 土坑墓SK273 (第190図)

調査区の北側、方形区画遺構区画1内に位置し、平面形は長方形を呈し、主軸方位は $N-0^{\circ}$ を示す。長軸0.99m、短軸0.64m、深さ21.6cmを測る。床面はほぼ平坦である。覆土は埋め戻し土層の様相を示す。床面上より人骨である頭部と脛部が検出された。頭部を北東側に置き、壁に接している。顔は東側に向き、膝を曲げていることから側臥屈葬であろう。棺桶などの構造物の痕跡が確認できないことから直葬と推定される。人骨以外の遺物は検出されなかったが、中世と推定する。

10) 土坑墓SK274 (第190図)

調査区の北側、方形区画遺構区画1内に位置し、土坑墓SK270、SK339を切って構築している。平面形は長方形を呈し、主軸方位は $N-6^{\circ}-W$ を示す。長軸1.31m、短軸0.78m、深さ58.0cmを測る。床面はほぼ平坦である。覆土は埋め戻し土層の様相を示す。床面上より人骨と推定される骨片がわずかに残存していた。棺桶などの構造物の痕跡が確認できないことから直葬と推定される。骨片以外の遺物は検出されなかった。掘形から判断して近世に比定できる。

きる。

11) 土坑墓SK275 (第190回)

調査区の北側、方形区画遺構区画1内に位置し、南側で土坑墓SK267によって切られており、本跡が古期である。平面形は長方形を呈し、主軸方位は $N-16^{\circ}-E$ を示す。長軸0.84m、短軸0.55m、深さ23.5cmを測る。床面はほぼ平坦である。覆土は埋め戻し土層の様相を示す。床面上より人骨である頭部と脚部が検出された。頭部を西側に置き、腕に接している。顔は北側に向き、膝を強く曲げていることから側臥屈葬であろう。棺桶などの構造物の痕跡が確認できないことから直葬と推定される。人骨以外の遺物は検出されなかったが、中世に比定できる。

12) 土坑墓SK276 (第190・192回)

調査区の北側、方形区画遺構区画1内に位置し、平面形は長方形を呈し、主軸方位は $N-76^{\circ}-W$ を示す。長軸1.27m、短軸0.84m、深さ59.3cmを測る。床面はほぼ平坦である。覆土は埋め戻し土層の様相を示す。床面上より人骨である頭部と腕、背、腰、脚部が検出された。頭部を西側に置き、腕に接している。顔は北側に向き、膝を強く曲げていることから側臥屈葬であろう。棺桶などの構造物に埋葬されたものと推定される。人骨以外には銭貨6枚、キセルが副葬品として出土している。銭貨は寛永通寶でいずれも「文銭」と呼ばれている新寛永(第189回15~20)。銅製品・喫煙具であるキセルは雁首と吸口(第189回28)が出土している。雁首は火皿から煙管端部まで遺存し、火皿は半球で、上端部がわずかに内傾する。首部は湾曲し、火皿の底中央に接合する。長さ7.2cmである。近世中期に比定できる。

13) 土坑墓SK277 (第190回)

調査区の北側、方形区画遺構区画1内に位置し、平面形は長方形を呈し、主軸方位は $N-27^{\circ}-E$ を示す。長軸0.83m、短軸0.63m、深さ43.3cmを測る。床面はほぼ平坦である。覆土は埋め戻し土層の様相を示す。床面上より人骨である頭部、背、脚部が検出された。頭部を北西側に置き、腕に接している。胸部は北東側、脚部は南側に位置しており、しかも膝を強く曲げていることから側臥屈葬であろう。棺桶などの構造物の痕跡が確認できないことから直葬と推定される。人骨以外の遺物は検出されなかったが、人骨の遺存状況から判断して近世の可能性が高い。

14) 土坑墓SK278 (第191・192回)

調査区の北側、方形区画遺構区画1内に位置し、北側で近世墓SK281に切られている。平面形は長方形を呈し、主軸方位は $N-23^{\circ}-E$ を示す。長軸0.78m、短軸0.76m、深さ35.2cmを測る。床面上より人骨と推定される骨片がわずかに残存していた。棺桶などの構造物の痕跡が確認できないことから直葬と推定される。骨片以外の遺物は検出されなかったが、中世に比定できる。

15) 土坑墓SK279 (第191・192回)

調査区の北側、方形区画遺構区画1内に位置し、平面形は長方形を呈し、主軸方位は $N-12^{\circ}-W$ を示す。長軸1.17m、短0.82軸m、深さ96.4cmを測る。床面はほぼ平坦である。覆土は埋め戻し土層の様相を示す。床面上より人骨である頭部、胸部、脚部が検出された。頭部を北東側に置き、全体が東壁に接している。顔は西側に向き、膝を強く曲げていることから側臥屈葬であろう。棺桶などの構造物の痕跡が確認できないことから直葬と推定される。人骨の他、副葬品として銭貨が1枚出土している(第189回11)。天聖元元(北宋1023年)は折損している。中世に比定できる。

16) 土坑墓SK280 (第191・192回)

調査区の北側、方形区画遺構区画1内に位置し、平面形は長方形を呈し、主軸方位は $N-89^{\circ}-E$ を示す。長軸1.12m、短軸0.80m、深さ19.8cmを測る。床面はほぼ平坦で、北東隅に柱穴(径30.0×23.5cm、深さ5.5cm)が穿つてある。本跡との関連は不明である。覆土は埋め戻し土層の様相を示す。床面上より人骨と推定される骨片と副葬品である土師質土器・小皿(第189回28)が出土している。孔径14.0cm、器高2.5cm、ロウク成形。15~16世紀。棺桶などの構造物の痕跡が確認できないことから直葬と推定される。中世に比定できる。

17) 土坑墓SK281 (第191・192回)

調査区の北側、方形区画遺構区画1内に位置し、中世墓SK278を切っている。平面形は円形を呈し、長軸1.05m、短軸0.90m、深さ47.8cmを測る。床面はほぼ平坦である。覆土は自然埋土層の様相を示す。床面上より人骨である頭部、胸部、脚部が検出された。頭部を北側に置き、腕に接している。顔は下向きで膝を強く曲げていることから座

葬であろう。棺桶内埋葬されていたものと推定する。人骨以外には錢貨6枚が副葬品として出土している。錢貨は寛永通寶でいずれも古寛永である(第189図21~26)。これら副葬品から近世前期に比定できる。

18) 土坑墓SK285 (第191・192図)

調査区の北側、方形区画遺構区画2内に位置し、平面形は楕円形を呈し、主軸方位はN-74°-Wを示す。長軸1.17m、短軸0.65m、深さ41.9cmを測る。床面は陥底状である。覆土は埋め戻し土層の様相を示す。床面上より人骨と推定される骨片と、副葬品である錢貨3枚、内耳土鍋の小破片1点が出土している(第189図12~14・29)。錢貨12は紹興元寶(南宋1131年)、その他は判読不明である。29は土師質土器・内耳鍋の胴部破片である。また棺桶などの構造物の痕跡が確認できないことから直葬と推定される。中世に比定できる。

19) 土坑墓SK287 (第191図)

調査区の北側、方形区画遺構区画1内に位置し、平面形は楕円形を呈し、主軸方位はN-86°-Eを示す。長軸0.90m、短軸0.61m、深さ7.1cmを測る。床面はほぼ平坦である。覆土は埋め戻し土層の様相を示す。床面上より人骨である頭部と脚部が検出された。頭部を西側に置き、壁に接している。顔は東側に向き、膝を強く曲げていることから側臥埋葬であろう。棺桶などの構造物の痕跡が確認できないことから直葬と推定される。人骨以外の遺物は検出されなかったが、中世に比定できる。

20) 土坑墓SK339 (第190図)

調査区の北側、方形区画遺構区画1内に位置し、土坑墓SK270を切り、土坑墓SK274に切られている。平面形は長方形を呈し、主軸方位はN-28°-Eを示す。長軸1.30m、短軸0.72m、深さ39.5cmを測る。床面はほぼ平坦である。覆土は埋め戻し土層の様相を示す。床面上より人骨と推定される骨片がわずかに残存していた。棺桶などの構造物の痕跡が確認できないことから直葬と推定される。骨片以外の遺物は検出されなかった。掘形から判断して近世に比定できる。

21) 土坑墓SK340 (第191図)

調査区の北側、方形区画遺構区画1内に位置し、東側は未調査区域に延びている。平面形は長方形を呈し、主軸方位はN-43°-Eを示す。長軸0.70m、短軸0.66m、深さ18.2cmを測る。床面はほぼ平坦である。覆土は埋め戻し土層の様相を示す。床面上より人骨と推定される骨片がわずかに残存していた。棺桶などの構造物の痕跡が確認できないことから直葬と推定される。骨片以外の遺物は検出されなかった。掘形から判断して近世に比定できる。

第6項 土坑 (第187・194~198図)

中世および近世の土坑墓以外で明確に中世と判断できるものを一括する。長方形を基調とする方形堅穴遺構と呼称されているもので、いわゆる粘土貼土坑も含まれる。出土遺物は豊富ではないが、覆土中に包含されていた。また出土遺物が検出できない土坑についても形状および覆土の状況から判断して中世とした。なお、それ以外は近世以降の土坑とし、それらは個々の記述は割愛して「一覧表としてまとめた表2」。

1) 土坑SK201 (第194図)

調査区の北東側に位置し、平面形は長径2.17m、短径2.16mの方形を呈する。深さ40.9cmを測り、壁面は外傾気味に立ち上がる。底面は全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。覆土は黒褐色土の埋戻し土層である。遺物は出土しなかったが、形状および覆土の締りの状況から判断して中世と推定する。

2) 土坑SK202 (第182・198図)

調査区の中央に位置し、平面形は長径0.935m、短径0.90mの円形。深さ37.8cmを測り、壁面は外傾気味に立ち上がる。底面は全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。覆土は黒褐色土の埋戻し土層である。遺物として土師質土器・内耳鍋の口縁部破片が出土している(第198図2・3)。中世後期・15世紀後半から16世紀前半である。

3) 土坑SK204 (第182・198図)

調査区の中央に位置し、平面形は長径1.01m、短径0.935mの方形。深さ18.3cmを測り、壁面は外傾気味に立ち上がる。底面は全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。覆土は黒褐色土の埋戻し土層である。遺物として土師質土器・内耳鍋の口縁部破片が出土している(第198図4)。中世後期・15世紀後半から16世紀前半である。

4) 土坑SK211 (第194・198図)

調査区の北、方形区画遺構SX02内北東隅に位置し、南側が攪乱を受けている。平面形は長径1.52m、短径0.93mの方形を呈するものと推定される。深さ10.3cm、壁面は外傾気味に立ち上がる。底面は全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。北西隅に径34.0×17.0cm、深さ7.9cm、南東隅に径45.0×33.5cm、深さ8.1cmの柱穴が伴う。覆土は黒褐色土の単一層の埋戻し土層である。遺物として瀬戸美濃系・挿鉢の底部破片が出土している。鉄軸を施し、内壁面の襷目は縦方向。見込みは同心円状を呈する。大空期から登空期に相当し、中世末から近世に比定される(第198図1)。

5) 土坑SK214 (第194図)

調査区の北、方形区画遺構SX02内北東側に位置し、平面形は長径1.30m、短径1.20mの方形を呈し、深さ72.6cmを測り、壁面は外傾気味に立ち上がる。底面は全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。覆土は黒褐色土の単一層で埋戻し土層である。遺物は出土しなかったが、覆土の締りの状況から判断して中世と推定する。

6) 土坑SK216 (第194図)

調査区の北側方形区画遺構SX02内北側に位置し、西側の一部が攪乱を受けている。平面形は長径1.70m、短径1.53mの隅丸方形を呈し、深さ57.6cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。覆土は黒褐色土の単一層で埋戻し土層である。遺物として土師質土器・内耳鍋の口縁部破片が出土している(第198図5・6)。5は内耳が遺存している。中世後期・15世紀後半から16世紀前半である。

7) 土坑SK219 (第194図)

調査区の北側方形区画遺構SX02内北側に位置し、平面形は長径1.46m、短径0.79mの長方形を呈し、深さ44.6cmを測り、壁面は外傾気味に立ち上がる。底面は全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。北西隅に径31.0×25.0cm、深さ7.0cm、南東隅に径32.0×31.0cm、深さ26.5cmの柱穴を伴う。覆土は黒褐色土の単一層で埋戻し土層である。遺物として土師質土器・内耳鍋の口縁部破片が出土している(第198図7)。中世後期・15世紀後半から16世紀前半である。

8) 土坑SK221 (第194図)

調査区の北側方形区画遺構SX02内北側に位置し、平面形は長径1.55m、短径1.13mの長方形を呈し、深さ13.6cmを測り、壁面は外傾気味に立ち上がる。底面は全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。南壁辺に径45.0×40.0cm、深さ42.9cmの柱穴を伴う。覆土は黒褐色土の単一層で埋戻し土層である。遺物は出土しなかったが、覆土の締りの状況から判断して中世と推定する。

9) 土坑SK224 (第194・198図)

調査区の北側方形区画遺構SX02内北西に位置し、北側が未調査区域に延び、東側で土坑SK225と重複している。平面形は確認面で長径1.35m、短径1.22mを測り、方形を呈するものと推定する。深さ35.5cmを測り、壁面は外傾気味に立ち上がる。底面は全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。柱穴が3本伴う。北東側径33.0×30.0cm、深さ31.5cm、南東側径29.0×18.0cm、深さ24.0cm、南西側径21.5×17.5cm、深さ10.5cm。覆土は黒褐色土の埋戻し土層である。遺物として陶器と土師質土器が出土している(第198図8～11)。8は古瀬戸・灰釉三足釜の底部破片。底径12.0cmの大型の壺もしくは浅鉢であろう。底部はヘラケズリで調整し、内面体部には鋭いヘラによるおろし目を刻んでいる。15世紀中葉。9・10は土師質土器・内耳鍋。9は口縁部破片である。口径25.0cmを測る。10は底部破片。丸底気味となっている。中世後期・15世紀後半から16世紀前半である。方形堅穴遺構である。

10) 土坑SK225A (第194図)

調査区の北側方形区画遺構SX02内北西に位置し、北側が未調査区域に延び、南側で土坑SK225Bと重複している。平面形は確認面で長径0.97m、短径0.38mの方形を呈するものと推定する。深さ22.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。覆土は黒褐色土の単一層で埋戻し土層である。遺物は出土しなかったが、覆土の締りの状況から判断して中世と推定する。

11) 土坑SK225B (第194図)

調査区の北側方形区画遺構SX02内北西に位置し、北側が未調査区域に延び、西側で土坑SK225A・Bと重複して

いる。平面形は確認面で長径0.51m、短径0.41mを測り、楕円形を呈するものと推定する。深さ33.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。覆土は黒褐色土の単一層で埋戻し土層である。遺物は出土しなかったが、覆土の締りの状況から判断して中世と推定する。

12) 土坑SK225 C (第194図)

調査区の北側方形区画遺構SX02内北西に位置し、北側が未調査区域に延び、土坑SK224、225 A・B・Dと重複している。平面形は確認面で長径1.63m、短径0.82mを測り、方形を呈するものと推定する。深さ58.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。覆土は黒褐色土の単一層で埋戻し土層である。遺物は出土しなかったが、覆土の締りの状況から判断して中世と推定する。

13) 土坑SK225 D (第194図)

調査区の北側方形区画遺構SX02内に位置し、北側が未調査区域に延び、土坑SK224、225 C・Eと重複している。平面形は確認面で長径1.00m、短径0.94mを測り、楕円形を呈する。深さ44.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。覆土は黒褐色土の単一層で埋戻し土層である。遺物は出土しなかったが、覆土の締りの状況から判断して中世と推定する。

14) 土坑SK225 E (第194図)

調査区の北側方形区画遺構SX02内北西に位置し、北側で土坑SK225 Dと重複している。平面形は確認面で長径0.61m、短径0.41mを測り、楕円形を呈する。深さ最大40.5cm、壁面は外傾して立ち上がる。底面は全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。覆土は黒褐色土の単一層で埋戻し土層である。遺物は出土しなかったが、覆土の締りの状況から判断して中世と推定する。

15) 土坑SK227 A (第194図)

調査区の北側方形区画遺構SX02内北西に位置し、北側が未調査区域に延び、南側で土坑SK227 Bと重複している。平面形は確認面で長径0.96m、短径0.32mを測り、円形を呈する。深さ8.5cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。覆土は黒褐色土の単一層で埋戻し土層である。遺物は出土しなかったが、覆土の締りの状況から判断して中世と推定する。

16) 土坑SK227 B (第194図)

調査区の北側方形区画遺構SX02内北西に位置し、北側が未調査区域に延び、北側で土坑SK227 Aと重複している。平面形は確認面で長径1.12m、短径0.86mを測り、長方形を呈する。深さ11.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。東側に径22.5×20.5cm、深さ19.0cm、西側に径21.0×21.0cm、深さ30.0cmの2本の柱穴が伴う。覆土は黒褐色土の単一層で埋戻し土層である。遺物は出土しなかったが、覆土の締りの状況から判断して中世と推定する。

17) 土坑SK228 (第187図)

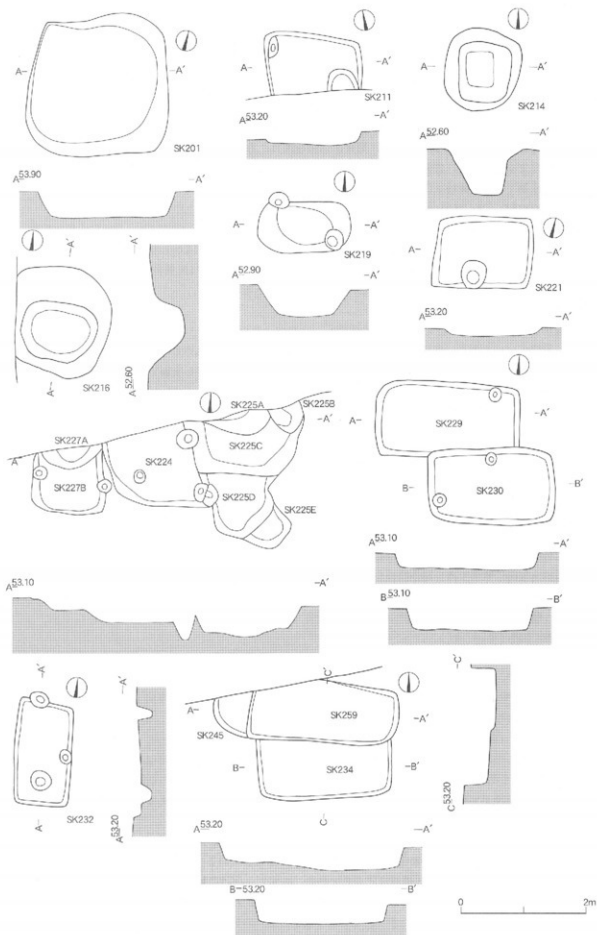
調査区の北側方形区画遺構SX02内北西に位置し、北側が未調査区域に延びている。平面形は確認面で長径1.10m、短径0.35mを測り、長方形を呈するものと推定する。深さ40.0cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。覆土は黒褐色土の単一層で埋戻し土層である。遺物は出土しなかったが、覆土の締りの状況から判断して中世と推定する。

18) 土坑SK229 (第194図)

調査区の北側方形区画遺構SX02内北西側、土坑SK230と重複している。平面形は長径2.27m、短径1.19mの長方形。深さ24.9cmを測り、壁面は外傾気味に立ち上がる。底面は全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。北東隅に径23.0×19.5cm、深さ36.7cm。覆土は黒褐色土の埋戻し土層である。遺物は出土しなかったが、形状および覆土の締りの状況から判断して中世と推定する。

19) 土坑SK230 (第194図)

調査区の北側方形区画遺構SX02内北西側、土坑SK230と重複している。平面形は長径2.00m、短径1.20mの長方形。深さ32.3cmを測り、壁面は外傾気味に立ち上がる。底面は全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。北東隅に径20.0×17.0cm、深さ12.8cm。南西隅に径22.0×21.0cm、深さ12.8cm。覆土は黒褐色土の埋戻し土層である。遺物は出土しなかったが、形状および覆土の締りの状況から判断して中世と推定する。



第194圖 中世土坑SK201・211・214・216・219・221・224・225・227・229・230・232・234・245・259実測図

20) 土坑SK232 (第194回)

調査区の北側方形区画遺構SX02内北西側に位置し、平面形は長径1.63m、短径0.91mの長方形。深さ11.9cmを測り、壁面は外傾気味に立ち上がる。底面は全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。北壁辺径30.0×25.0cm、深さ21.5cm。東壁辺径33.0×30.0cm、深さ26.4cm。南側径21.0×18.0cm、深さ9.5cm。覆土は黒褐色土の埋戻し土層である。遺物は出土しなかったが、覆土の締りの状況から判断して中世と推定する。

21) 土坑SK233 (第195回)

調査区の北側方形区画遺構SX02内西側に位置し、平面形は長径2.20m、短径1.38mの長方形。深さ58.2cmを測り、壁面は垂直気味に立ち上がる。底面は全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。東壁辺径26.0×25.0cm、深さ81.5cm。覆土は黒褐色土の埋戻し土層である。遺物は出土しなかったが、形状および覆土の締りの状況から判断して中世の方形竪穴遺構である。

22) 土坑SK234 (第194・198回)

調査区の北側方形区画遺構SX02内北西、土坑SK245・259と重複している。平面形は長径2.11m、短径0.88mの長方形。深さ36.3cmを測り、壁面は外傾気味に立ち上がる。底面は全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。覆土は黒褐色土の埋戻し土層である。遺物として十節貫土器・内耳鍋の口縁部破片が出土している(第198図11)。中世後期・15世紀後半から16世紀前半である。

23) 土坑SK235 (第195回)

調査区の北側方形区画遺構SX02内西側に位置し、平面形は長径2.32m、短径1.23mの長方形。深さ34.6cmを測り、壁面は外傾気味に立ち上がる。底面は全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。北西側径27.0×23.0cm、深さ35.1cm。覆土は黒褐色土の埋戻し土層である。遺物は出土しなかったが、覆土の締りの状況から判断して中世の方形竪穴遺構である。

24) 土坑SK236 (第195回)

調査区の北側方形区画遺構SX02内西側、土坑SK258と重複している。平面形は確認面で長径2.22m、短径1.47mを測り、長方形を呈する。また検出面からの深度は最大79.2cmを測り、壁面は垂直気味に立ち上がる。底面は全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。東壁辺径31.0×26.0cm、深さ68.6cm。西壁辺径28.0×20.0cm、深さ52.8cm。覆土は黒褐色土の埋戻し土層である。遺物は出土しなかったが、形状および覆土の締りの状況から判断して中世の方形竪穴遺構である。

25) 土坑SK239 (第187回)

調査区の北側方形区画遺構SX02内北西に位置し、北側は未調査区域に延びている。平面形は長径0.97m、短径0.26mの方形を呈するものと推定する。深さ36.0cmを測り、壁面は外傾気味に立ち上がる。底面は全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。覆土は黒褐色土の埋戻し土層である。遺物は出土しなかったが、形状および覆土の締りの状況から判断して中世と推定する。

26) 土坑SK241 (第187回)

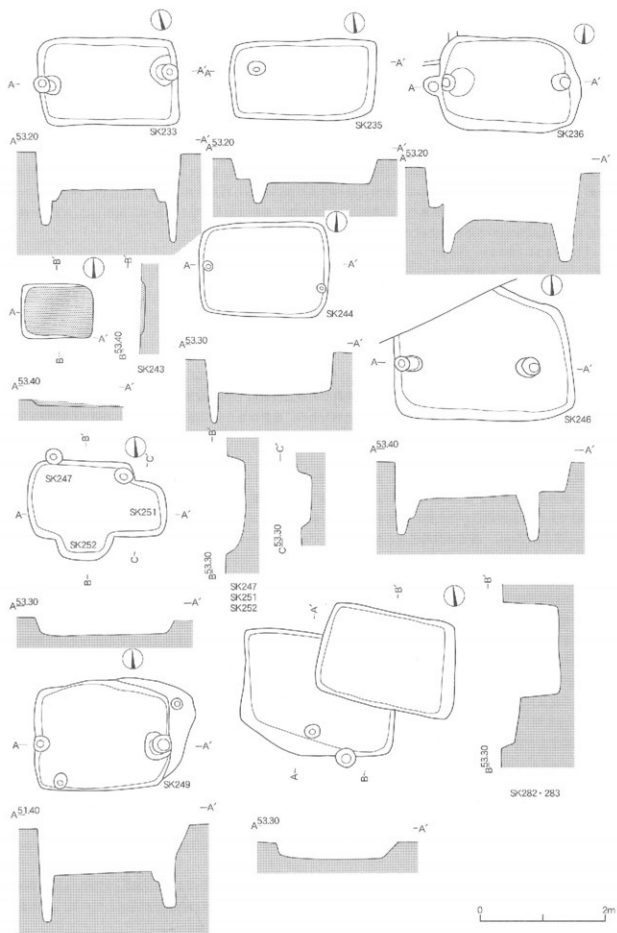
調査区の北側方形区画遺構SX02内北西隅、土坑SK250と重複している。平面形は長径0.32m、短径0.24mの方形。深さ72.7cmを測り、壁面は外傾気味に立ち上がる。底面は全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。覆土は黒褐色土の自然堆積層である。遺物は出土しなかったが、形状および覆土の締りの状況から判断して中世と推定する。

27) 土坑SK242 (第187回)

調査区の北側方形区画遺構SX02内北西側、大半が攪乱を受けている。平面形は長径2.00m、短径0.47mの長方形。深さ6.5cmを測り、壁面は垂直気味に立ち上がる。底面は全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。覆土は黒褐色土の埋戻し土層である。遺物は出土しなかったが、覆土の締りの状況から判断して中世と推定する。

28) 土坑SK243 (第195回)

調査区の北側方形区画遺構SX02内西に位置し、粘土貼土坑である。平面形は長径1.13m、短径0.95mの長方形。深さ7.0cmを測り、壁面は外傾気味に立ち上がる。底面はほぼ平坦。覆土は灰白色粘土が充填している。遺物は出土しなかったが、中世の竪穴遺構と推定する。



第195図 中世土坑SK233・235・236・243・244・246・249・251・252・282・283実測図

29) 十坑SK244 (第195・198図)

調査区の北側方形区画遺構SX02内西側に位置し、平面形は長径2.04m、短径1.49mの長方形。深さ58.5cmを測り、壁面は垂直気味に立ち上がる。底面は全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。東壁辺に径16.0×13.0cm、深さ59.2cm、西壁辺径17.5×14.0cm、深さ48.0cmの2本の柱穴を伴う。覆土は黒褐色土の埋戻し土層である。遺物として陶器と土師質土器が出土している(第198図12・13)。12は常滑・壺蓋類口縁部破片である。VI~VII型式。14世紀代。13は土師質土器・小皿。ロ口ロ成形で底部に回転系切り痕を残す。中世の方形竈穴遺構である。

30) 土坑SK245 (第194図)

調査区の北側方形区画遺構SX02内北西隅、土坑SK259と重複している。平面形は長径0.65m、短径0.56mの楕円形。深さ33.8cmを測り、壁面は垂直気味に立ち上がる。底面は全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。覆土は黒褐色土の埋戻し土層である。遺物は出土しなかったが、覆土の締りの状況から判断して中世と推定する。

31) 土坑SK246 (第195図)

調査区の北側方形区画遺構SX02内西側に位置し、平面形は長径2.80m、短径2.10mの長方形。深さ55.5cmを測り、壁面は垂直気味に立ち上がる。底面は全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。東側に径30.5×36.0cm、深さ72.5cm、西壁辺径25.0×24.0cm、深さ66.0cm、覆土は黒褐色土の埋戻し土層である。遺物は出土しなかったが、覆土の締りの状況から判断して中世の方形竈穴遺構である。

32) 土坑SK247 (第195・198図)

調査区の北側方形区画遺構SX02内西側、土坑SK251・252と重複している。平面形は長径1.60m、短径1.19mの長方形。深さ25.6cmを測り、壁面は外傾気味に立ち上がる。底面は全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。北東隅に径28.5×25.5cm、深さ37.0cmの柱穴を伴う。覆土は黒褐色土の埋戻し土層である。遺物として土師質土器・内耳鍋の口縁部破片が出土している(第198図14)。中世後期・15世紀後半から16世紀前半である。

33) 土坑SK249 (第195図)

調査区の北側方形区画遺構SX02内西側に位置し、平面形は長径2.45m、短径1.73mの長方形。深さ73.4cmを測り、壁面は垂直気味に立ち上がる。底面は全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。東壁辺に径30.0×28.0cm、深さ57.5cm、西壁辺に径24.5×24.5cm、深さ75.0cm、南西側に径26.0×22.0cm、深さ8.7cmの柱穴3本を伴う。覆土は黒褐色土の埋戻し土層である。遺物は出土しなかったが、覆土の締りの状況から判断して中世の方形竈穴遺構である。

34) 土坑SK250 (第187図)

調査区の北側方形区画遺構SX02内北西隅、土坑SK241と重複している。平面形は長径1.03m、短径0.98mの長方形。深さ34.0cmを測り、壁面は外傾気味に立ち上がる。底面は全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。覆土は黒褐色土の埋戻し土層である。遺物は出土しなかったが、覆土の締りの状況から判断して中世と推定する。

35) 土坑SK251 (第195図)

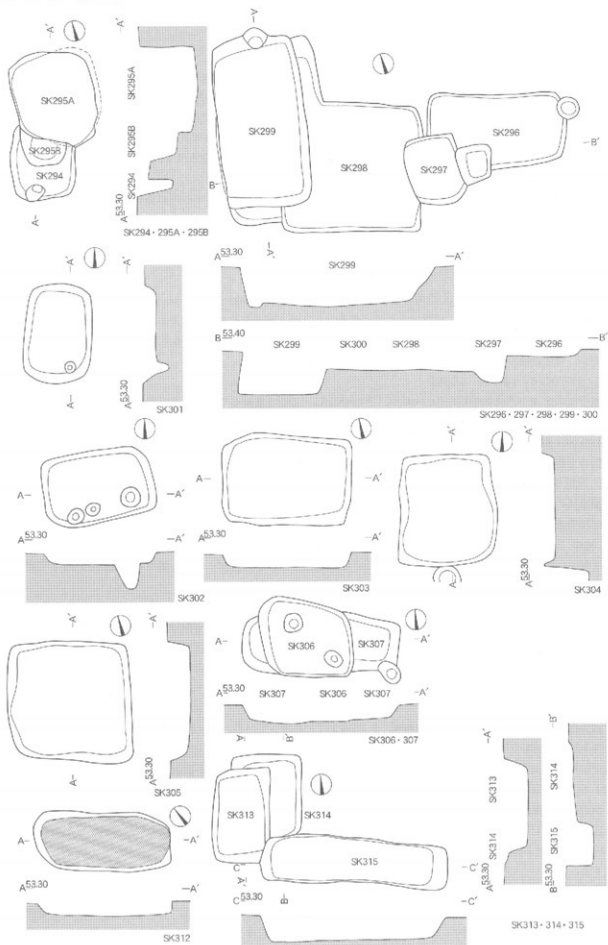
調査区の北側方形区画遺構SX02内西側、土坑SK252と重複している。平面形は長径0.86m、短径0.65mの長方形。深さ20.8cmを測り、壁面は外傾気味に立ち上がる。底面は全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。覆土は黒褐色土の埋戻し土層である。遺物は出土しなかったが、覆土の締りの状況から判断して中世と推定する。

36) 土坑SK252 (第195図)

調査区の北側方形区画遺構SX02内西側、土坑SK247・251と重複している。平面形は長径0.86m、短径0.38mの長方形。深さ15.3cmを測り、壁面は外傾気味に立ち上がる。底面は全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。覆土は黒褐色土の埋戻し土層である。遺物は出土しなかったが、覆土の締りの状況から判断して中世と推定する。

37) 土坑SK259 (第194図)

調査区の北側方形区画遺構SX02内北西隅、土坑SK234・245と重複している。平面形は長径2.37m、短径0.96mの長方形。深さ39.5cmを測り、壁面は垂直気味に立ち上がる。底面は全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認



第196図 中世土坑SK294・295A・295B・296・297・298・299・300・301・302・303・304・305・306・307・312・313・314・315実測図

められない。覆土は黒褐色土の埋戻し土層である。遺物は出土しなかったが、覆土の締りの状況から判断して中世と推定する。

38) 土坑SK282 (第195・198図)

調査区の北側方形区画遺構SX02内東側、土坑SK283と重複している。平面形は長径2.43m、短径1.93mの長方形。深さ30.8cmを測り、壁面は外傾気味に立ち上がる。底面は全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。南壁辺に径25.0×22.5cm、深さ8.2cmの柱穴1本を伴う。覆土は黒褐色土の埋戻し土層である。遺物として土師質土器・内耳鍋の口縁部破片が出土している(第198図15)。中世後期・15世紀後半から16世紀前半である。

39) 土坑SK283 (第195・198図)

調査区の北、方形区画遺構SX02内東側、土坑SK282と重複している。平面形は長径2.14m、短径1.51mの長方形。深さ83.5cmを測り、壁面は垂直気味に立ち上がる。底面は全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。覆土は黒褐色土の埋戻し土層である。遺物として土師質土器・内耳鍋の口縁部破片が出土している(第198図16・17)。16は内耳が遺存している。17は底部破片。丸底気味である。中世後期・15世紀後半から16世紀前半である。方形竪穴遺構である。

40) 土坑SK290 (第187図)

調査区の北、方形区画遺構SX02内東側、土坑SK282と重複している。平面形は長径1.38m、短径0.98mの長方形。深さ34.9cmを測り、壁面は垂直気味に立ち上がる。底面は全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。覆土は黒褐色土の埋戻し土層である。遺物は出土しなかったが、覆土の締りの状況から判断して中世と推定する。

41) 土坑SK294 (第196図)

調査区の北、方形区画遺構SX02内東側に位置し、北側で土坑SK295と重複している。平面形は長径1.00m、短径0.97mの長方形。深さ19.5cmを測り、壁面は垂直気味に立ち上がる。底面は全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。南壁辺に径25.0×22.5cm、深さ38.2cmの柱穴1本を伴う。覆土は黒褐色土の埋戻し土層である。遺物は出土しなかったが、形状および覆土の締りの状況から判断して中世と推定する。

42) 土坑SK295A (第196図)

調査区の北側方形区画遺構SX02内南東に位置し、南側で土坑SK295Bと重複している。平面形は長径1.39m、短径1.28mの長方形。深さ95.5cmを測り、壁面は垂直気味に立ち上がる。底面は全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。覆土は黒褐色土の埋戻し土層である。遺物は出土しなかったが、形状および覆土の締りの状況から判断して中世の方形竪穴遺構である。

43) 土坑SK295B (第196図)

調査区の北側方形区画遺構SX02内南東に位置し、北側で土坑SK295Aと重複している。平面形は長径0.71m、短径0.46mの長方形。深さ53.5cmを測り、壁面は外傾気味に立ち上がる。底面は全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。覆土は黒褐色土の埋戻し土層である。遺物は出土しなかったが、覆土の締りの状況から判断して中世と推定する。

44) 土坑SK296 (第196図)

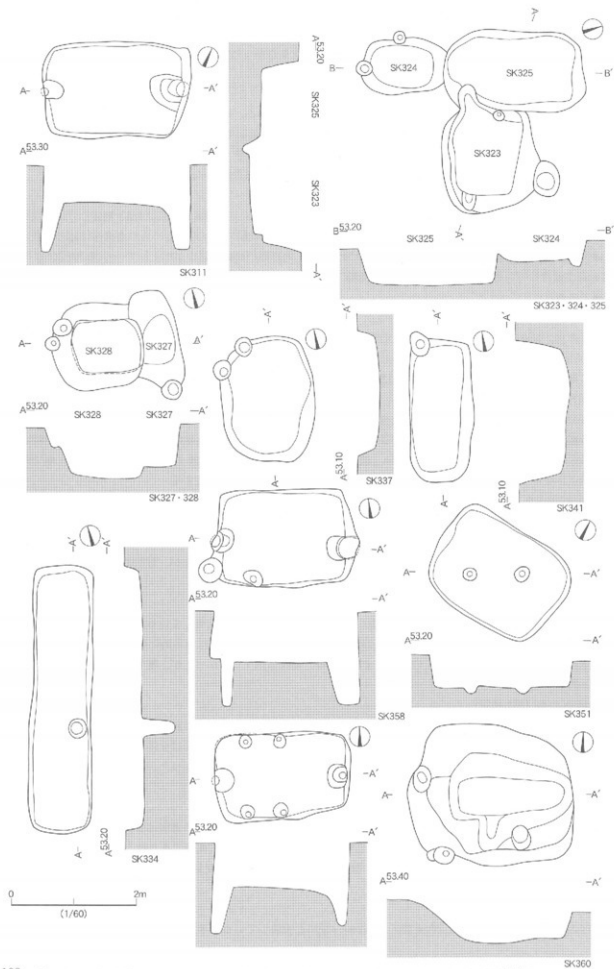
調査区の北、方形区画遺構SX02内東側、土坑SK297と重複している。平面形は確認図で長径2.21m、短径1.15mを測り、長方形を呈する。深さ4.7cmを測り、壁面は外傾気味に立ち上がる。底面は全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。覆土は黒褐色土の埋戻し土層である。遺物は出土しなかったが、形状および覆土の締りの状況から判断して中世の方形竪穴遺構と推定する。

45) 土坑SK297 (第196図)

調査区の北、方形区画遺構SX02内東側、土坑SK296・298と重複している。平面形は長径1.09m、短径0.86mの長方形。深さ29.7cmを測り、壁面は外傾気味に立ち上がる。底面は全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。覆土は黒褐色土の埋戻し土層である。遺物は出土しなかったが、覆土の締りの状況から判断して中世の方形竪穴遺構と推定する。

46) 土坑SK298 (第196図)

調査区の北、方形区画遺構SX02内東側、土坑297・300と重複している。平面形は長径2.19m、短径2.04mの正



方形。深さ28.1cmを測り、壁面は外傾気味に立ち上がる。底面は全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。覆土は黒褐色土の埋戻し土層である。遺物は出土しなかったが、形状および覆土の締りの状況から判断して中世の方形竪穴遺構である。

47) 土坑SK299 (第196・198図)

調査区の北、方形区画遺構SX02内東側、土坑SK298・300と重複している。平面形は長径2.73m、短径1.38mの長方形。深さ69.7cmを測り、壁面は外傾気味に立ち上がる。底面は全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。北壁辺に径35.0×35.0cm、深さ3.5cmの柱穴を伴う。覆土は黒褐色土の埋戻し土層である。遺物として陶器と土師質土器が出土している(第198図18・19)。18は古瀬戸・灰箱折縁深皿の口縁部破片。口縁部を外方に折り返している。灰軸は外面・内面体部上部に掛けられている。後期。19は土師質土器・内耳鍋の口縁部破片である。中世後期・15世紀後半から16世紀前半である。方形竪穴遺構である。

48) 土坑SK300 (第196図)

調査区の北、方形区画遺構SX02内東側、土坑SK298・299と重複している。平面形は長径2.83m、短径1.50mの長方形。深さ26.5cmを測り、壁面は垂直気味に立ち上がる。底面は全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。覆土は黒褐色土の埋戻し土層である。遺物は出土しなかったが、形状および覆土の締りの状況から判断して中世と推定する。

49) 土坑SK301 (第196図)

調査区の北、方形区画遺構SX02内北東隅に位置し、平面形は長径1.59m、短径1.05mの長方形。深さ21.6cmを測り、壁面は外傾気味に立ち上がる。底面は全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。南壁辺に径19.5×17.0cm、深さ20.5cmの柱穴を伴う。覆土は黒褐色土の埋戻し土層である。遺物は出土しなかったが、形状および覆土の締りの状況から判断して中世の方形竪穴遺構である。

50) 土坑SK302 (第196図)

調査区の北、方形区画遺構SX02内北東側に位置し、平面形は長径1.76m、短径1.13mの長方形。深さ18.1cmを測り、壁面は外傾気味に立ち上がる。底面は全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。南壁辺東側に径32.5×28.5cm、深さ38.6cm。中央に径24.5×20.5cm、深さ13.0cm。西側に径27.5×24.5cm、深さ21.8cmの3本の柱穴を伴う。覆土は黒褐色土の埋戻し土層である。遺物は出土しなかったが、覆土の締りの状況から判断して中世の方形竪穴遺構と推定する。

51) 土坑SK303 (第196・198図)

調査区の北、方形区画遺構SX02内北東側に位置し、平面形は長径2.06m、短径1.42mの長方形。深さ19.9cmを測り、壁面は垂直気味に立ち上がる。底面は全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。覆土は黒褐色土の埋戻し土層である。遺物として陶器と土師質土器が出土している(第198図20～22)。20は古瀬戸・灰箱縁袖皿・中～後期。21・22は土師質土器・内耳鍋の口縁部破片である。中世後期・15世紀後半から16世紀前半である。方形竪穴遺構である。

52) 土坑SK304 (第196図)

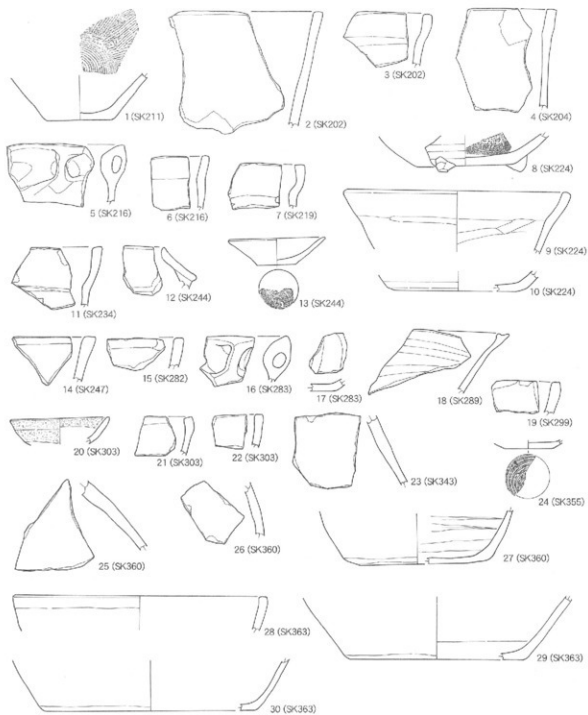
調査区の北、方形区画遺構SX02内北東側に位置し、平面形は長径1.75m、短径1.53mの長方形。深さ17.3cmを測り、壁面は垂直気味に立ち上がる。底面は全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。覆土は黒褐色土の自然堆積層である。遺物は出土しなかったが、形状および覆土の締りの状況から判断して中世の方形竪穴遺構である。

53) 土坑SK305 (第196図)

調査区の北、方形区画遺構SX02内北東側に位置し、平面形は長径1.96m、短径1.87mの正方形。深さ27.9cmを測り、壁面は垂直気味に立ち上がる。底面は全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。覆土は黒褐色土の埋戻し土層である。遺物は出土しなかったが、形状および覆土の締りの状況から判断して中世の方形竪穴遺構である。

54) 土坑SK306 (第196図)

調査区の北、方形区画遺構SX02内南東側、土坑SK307と重複している。平面形は長径1.41m、短径1.20mの正



第198図 中世土坑出土遺物

0 10cm

形。深さ26.8cmを測り、壁面は垂直気味に立ち上がる。底面は全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。北西側に径29.0×29.0cm、深さ18.3cm、南東側に径30.0×22.0cm、深さ22.7cmの柱穴を伴う。覆土は黒褐色土の埋戻し土層である。遺物は出土しなかったが、覆土の締りの状況から判断して中世の方形竪穴遺構と推定する。

55) 土坑SK307 (第196図)

調査区の北、方形区画遺構SX02内南東側、土坑SK306と重複している。平面形は確認面で長径2.50m、短径0.92mを測り、長方形を呈する。深さ25.9cmを測り、壁面は外傾気味に立ち上がる。底面は全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。覆土は黒褐色土の埋戻し土層である。遺物は出土しなかったが、形状および覆土の締りの状況から判断して中世の方形竪穴遺構と推定する。

56) 土坑SK311 (第187図)

調査区の北側方形区画遺構SX02内中央に位置し、東側が攪乱を受けている。平面形は長径1.49m、短径1.09mの長方形。深さ18.5cmを測り、壁面は外傾気味に立ち上がる。底面は全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。覆土は黒褐色土の埋戻し土層である。遺物は出土しなかったが、覆土の締りの状況から判断して中世と推定する。

57) 土坑SK312 (第196図)

調査区の北、方形区画遺構SX02内東側に位置し、粘土貼土坑である。平面形は長径2.13m、短径0.91mの長方形。深さ21.9cmを測り、壁面は外傾気味に立ち上がる。底面は平坦で、覆土は灰白色粘土が充填している。中世の竪穴遺構である。

58) 土坑SK313 (第196図)

調査区の北側方形区画遺構SX02内東に位置し、東側で土坑SK314、315と重複している。平面形は長径1.49m、短径0.81mの長方形。深さ38.0cmを測り、壁面は外傾気味に立ち上がる。底面は全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。覆土は黒褐色土の埋戻し土層である。遺物は出土しなかったが、形状および覆土の締りの状況から判断して中世の方形竪穴遺構と推定する。

59) 土坑SK314 (第196図)

調査区の北側方形区画遺構SX02内東に位置し、西側で土坑SK313と重複している。平面形は長径1.29m、短径1.11mの長方形。深さ9.8cmを測り、壁面は外傾気味に立ち上がる。底面は全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。覆土は黒褐色土の埋戻し土層である。遺物は出土しなかったが、形状および覆土の締りの状況から判断して中世の方形竪穴遺構と推定する。

60) 土坑SK315 (第196図)

調査区の北側方形区画遺構SX02内東に位置し、平面形は長径2.97m、短径0.69mの長方形。深さ39.3cmを測り、壁面は垂直気味に立ち上がる。底面は全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。覆土は黒褐色土の埋戻し土層である。遺物は出土しなかったが、形状および覆土の締りの状況から判断して中世の方形竪穴遺構と推定する。

61) 土坑SK316 (第187図)

調査区の北側方形区画遺構SX02内東に位置し、平面形は長径1.23m、短径0.95mの長方形。深さ12.3cmを測り、壁面は垂直気味に立ち上がる。底面は全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。覆土は黒褐色土の自然堆積層である。遺物は出土しなかったが、形状および覆土の締りの状況から判断して中世と推定する。

62) 土坑SK317 (第197図)

調査区の北側方形区画遺構SX02内東に位置し、平面形は長径2.30m、短径1.50m長方形。深さ59.3cmを測り、壁面は垂直気味に立ち上がる。底面は全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。東壁辺に径32.5×28.0cm、深さ79.8、西壁辺に径27.5×27.0cm、深さ73.7cmの柱穴を伴う。覆土は黒褐色土の埋戻し土層である。形状および覆土の締りの状況から判断して中世と推定する。

63) 土坑SK323 (第197図)

調査区の北側方形区画遺構SX02内中央に位置し、平面形は長径2.07m、短径1.51mの長方形。深さ78.7cmを測り、

壁面は垂直気味に立ち上がる。底面は全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。西壁辺に径19.0×16.0cm、深さ10.0cm、東壁辺に径26.5×21.0cm、深さ17.5cmの柱穴を伴う。覆土は黒褐色土の埋戻し土層である。遺物は出土しなかったが、形状および覆土の締りの状況から判断して中世と推定する。

64) 土坑SK324 (第197図)

調査区の北側方形区画遺構SX02内中央に位置し、平面形は長径1.29m、短径0.88mの楕円形。深さ30.2cmを測り、壁面は垂直気味に立ち上がる。底面は全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。径26.5×24.0cm、深さ12.5cm。覆土は黒褐色土の埋戻し土層である。遺物は出土しなかったが、形状および覆土の締りの状況から判断して中世と推定する。

65) 土坑SK325 (第197図)

調査区の北側方形区画遺構SX02内中央に位置し、平面形は長径2.19m、短径1.27mの長方形。深さ56.5cmを測り、壁面は垂直気味に立ち上がる。底面は全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。覆土は黒褐色土の埋戻し土層である。遺物は出土しなかったが、形状および覆土の締りの状況から判断して中世と推定する。

66) 土坑SK327 (第197図)

調査区の北側方形区画遺構SX02内中央に位置し、平面形は長径1.55m、短径0.70mの楕円形。深さ67.5cmを測り、壁面は垂直気味に立ち上がる。底面は全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。覆土は黒褐色土の埋戻し土層である。遺物は出土しなかったが、形状および覆土の締りの状況から判断して中世と推定する。

67) 土坑SK328 (第197図)

調査区の北側方形区画遺構SX02内中央に位置し、平面形は長径1.45m、短径1.37mの長方形。深さ82.0cmを測り、壁面は垂直気味に立ち上がる。底面は全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。覆土は黒褐色土の埋戻し土層である。遺物は出土しなかったが、形状および覆土の締りの状況から判断して中世と推定する。

68) 土坑SK330 (第187図)

調査区の北側方形区画遺構SX02内中央に位置し、平面形は長径1.28m、短径1.05mの楕円形。深さ43.9cmを測り、壁面は垂直気味に立ち上がる。底面は全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。覆土は黒褐色土の埋戻し土層である。遺物は出土しなかったが、形状および覆土の締りの状況から判断して中世と推定する。

69) 土坑SK331 (第187図)

調査区の北側方形区画遺構SX02内南に位置し、平面形は長径1.50m、短径1.22mの長方形。深さ37.8cmを測り、壁面は垂直気味に立ち上がる。底面は全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。覆土は黒褐色土の埋戻し土層である。遺物は出土しなかったが、覆土の締りの状況から判断して中世と推定する。

70) 土坑SK333 (第187図)

調査区の北側方形区画遺構SX02内に位置し、平面形は長径1.49m、短径1.07mの長方形。深さ25.3cmを測り、壁面は垂直気味に立ち上がる。底面は全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。覆土は黒褐色土の埋戻し土層である。遺物は出土しなかったが、覆土の締りの状況から判断して中世と推定する。

71) 土坑SK334 (第197図)

調査区の北側方形区画遺構SX02内に位置し、平面形は長径4.22m、短径0.92mの長方形。深さ30.7cmを測り、壁面は外傾気味に立ち上がる。底面は全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。東壁辺中央に径31.0×28.0cm、深さ46.2cmの柱穴を伴う。覆土は黒褐色土の埋戻し土層である。遺物は出土しなかったが、覆土の締りの状況から判断して中世と推定する。

72) 土坑SK336 (第187図)

調査区の北側方形区画遺構SX02内南に位置し、平面形は確認面で長径1.12m、短径0.93mを測り、長方形を呈する。また検出面からの深度は最大64.7cmを測り、壁面は外傾して立ち上がる。底面は全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。覆土は黒褐色土の単一層で埋戻し土層である。遺物は出土しなかったが、形状および覆土の締りの状況から判断して中世と推定する。

73) 土坑SK337 (第197図)

調査区の北側方形区画遺構SX02内南に位置し、平面形は長径1.96m、短径1.47mの長方形。深さ33.8cmを測り、

壁面は垂直気味に立ち上がる。底面は全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。覆土は黒褐色土の埋戻し土層である。遺物は出土しなかったが、形状および覆土の締りの状況から判断して中世と推定する。

74) 土坑SK341 (第197図)

調査区の北側方形区画遺構SX02内南側に位置し、平面形は長径2.26m、短径0.99mの長方形。深さ82.0cmを測り、壁面は外傾気味に立ち上がる。底面は全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。覆土は黒褐色土の埋戻し土層である。遺物は出土しなかったが、形状および覆土の締りの状況から判断して中世と推定する。

75) 土坑SK342 (第187・198図)

調査区の北側方形区画遺構SX02内に位置し、平面形は長径2.67m、短径1.05mの長方形。深さ38.3cmを測り、壁面は外傾気味に立ち上がる。底面は全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。覆土は黒褐色土の埋戻し土層である。遺物として土師質土器が出土している(第198図23)。23は内耳鍋の体部破片である。中世後期・15世紀後半から16世紀前半である。方形竪穴遺構である。

76) 土坑SK343 (第187・198図)

調査区の北側方形区画遺構SX02内中央に位置し、平面形は長径2.01m、短径0.80mの長方形。深さ77.5cmを測り、壁面は垂直気味に立ち上がる。底面は全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。覆土は黒褐色土の埋戻し土層である。遺物は出土しなかったが、形状および覆土の締りの状況から判断して中世と推定する。

77) 土坑SK346 (第187図)

調査区の北側方形区画遺構SX02内中央に位置し、平面形は長径1.04m、短径0.96mの方形。深さ32.2cmを測り、壁面は垂直気味に立ち上がる。底面は全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。覆土は黒褐色土の埋戻し土層である。遺物は出土しなかったが、形状および覆土の締りの状況から判断して中世と推定する。

78) 土坑SK348 (第187図)

調査区の北側方形区画遺構SX02内南側に位置し、平面形は長径1.45m、短径0.77mの長方形。深さ12.5cmを測り、壁面は垂直気味に立ち上がる。底面は全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。覆土は黒褐色土の埋戻し土層である。遺物は出土しなかったが、覆土の締りの状況から判断して中世と推定する。

79) 土坑SK350 (第187図)

調査区の北側方形区画遺構SX02溝SD12内に位置し、平面形は長径2.03m、短径0.70mの長方形。深さ4.9cmを測り、壁面は垂直気味に立ち上がる。底面は全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。覆土は黒褐色土の埋戻し土層である。遺物は出土しなかったが、覆土の締りの状況から判断して中世と推定する。

80) 土坑SK351 (第197図)

調査区の北側方形区画遺構SX02内中央に位置し、平面形は長径2.15m、短径1.59mの長方形。深さ46.6cmを測り、壁面は垂直気味に立ち上がる。底面は全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。北東側に径25.0×22.0cm、深さ10.5cm、南西側に径22.0×19.0cm、深さ11.0cmの柱穴2本を伴う。覆土は黒褐色土の埋戻し土層である。遺物は出土しなかったが、形状および覆土の締りの状況から判断して中世の方形竪穴遺構である。

81) 土坑SK352 (第187図)

調査区の北側方形区画遺構SX02内南に位置し、平面形は長径2.16m、短径0.83mの長方形。深さ25.9cmを測り、壁面は垂直気味に立ち上がる。底面は全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。覆土は黒褐色土の埋戻し土層である。遺物は出土しなかったが、形状および覆土の締りの状況から判断して中世と推定する。

82) 土坑SK353 (第187図)

調査区の北側方形区画遺構SX02内中央に位置し、平面形は長径1.47m、短径0.79mの長方形。深さ22.1cmを測り、壁面は垂直気味に立ち上がる。底面は全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。覆土は黒褐色土の埋戻し土層である。遺物は出土しなかったが、覆土の締りの状況から判断して中世と推定する。

83) 土坑SK355 (第187・198図)

調査区の北側方形区画遺構SX02内中央に位置し、平面形は長径1.23m、短径0.51mの楕円形。また検出面からの深度は最大3.7cmを測り、壁面は垂直気味に立ち上がる。底面は全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。覆土は黒褐色土の埋戻し土層である。遺物として陶器が出土している(第198図24)。24は古瀬戸・灰釉折縁深

黒褐色上の埋戻し土層である。遺物は出土しなかったが、形状および覆土の締りの状況から判断して中世の方形竪穴遺構である。

86) 土坑SK360 (第197・198図)

調査区の北側方形区画遺構SX02内南西に位置し、平面形は長径2.61m、短径2.22mの長方形。深さ63.9cmを測り、壁面は外傾気味に立ち上がる。底面は全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。覆土は黒褐色上の埋戻し土層である。遺物として陶器と土師質土器が出土している(第198図25~27)。25・26は常滑・竜巻類の胴部破片。27は土師質土器・内耳鍋の底部破片である。丸底気味である。中世後期・15世紀後半から16世紀前半である。方形竪穴遺構である。

87) 土坑SK363 (第187・198図)

調査区の北側方形区画遺構SX02内南西に位置し、平面形は長径1.25m、短径1.20mの楕円形。深さ56.9cmを測り、壁面は垂直気味に立ち上がる。底面は全体的に軟弱であり踏み固められた痕跡は認められない。覆土は黒褐色上の埋戻し土層である。遺物として土師質土器が出土している(第198図28~30)。28は土師質土器・内耳鍋の口縁部破片。29・30は底部破片である。底部は丸底気味を呈している。中世後期・15世紀後半から16世紀前半である。方形竪穴遺構である。

(小川 和博)

第7項 柱穴状遺構(ピット)(第182・187図)

本調査区きた南側および北端で検出された方形区画遺構内を中心にいわゆるピットと呼称される柱穴状遺構が検出された。調査されたピットの総数は1,064基で、形状からみるといずれも円形もしくは楕円形を呈している。また規模についてみると全体的にかなり締まりがみられ径52cmを最大径、径8cmを最小径とし、また深さについても最大深度44.5cm、最小深度9.5cmである。これらの平均値は径35.0cm、深さ25.0cmとなり、その±5cm幅に収まるピットが全体の60%を占め、結果的に径30~40cm、深さ20~35cmの円形ピットが最も多いということになる。なお、これらはいずれも配列等に規則性がほとんど認められず、建物跡等に復元できなかったものである。しかも覆土中より遺物の出土はなかったため、その性格については明瞭ではない。少なくとも埋土は黒色土で覆われていたこと、円形もしくは楕円形でほぼ垂直気味に落ち込んでいたことから単独もしくは複数が組み合わさって何らかの機能をもった構造物の存在が想定される。小屋や物置などの粗雑で貧弱な柱構造の建物あるいは棚状構造物、物下し杭などの柱あるいは杭跡等が考えられるがいずれもこれといった決定的な痕跡を検証することができなかった。また構築時期についても中世から現代にいたるまで確認されて、とくに近世以降に集中するようである。

(大淵淳志・遠藤晋子)

第3章 まとめ

1. はじめに

上ノ宿遺跡は、久慈川の右岸、玉川に挟まれた舌状台地上に立地している。ここは平成18年5月第1次調査として本調査区西側に隣接した区域1,980㎡(小川他2008)を実施している。因みに今回報告した東側半分のみ検出の1号竪穴建物跡(SI01)は、前回西側部分を調査済みで、遺物跡の命名も第1次調査からの踏襲である。また調査区南側については第2次調査1区域として9,820㎡を実施、さらに南側は平成15年7月に実施した上宿上坪遺跡(小川他2004)である。今回の調査面積は12,787㎡であり、南側調査区および第1次調査区を合わせると実に24,587㎡という大規模調査を実施したこととなる。全体を通して、旧石器時代をはじめ、縄文時代の土坑、奈良・平安時代の集落跡、さらに中世以降においては大規模な方形区画遺構内に方形竪穴遺構をはじめ、土坑墓や井戸、土坑などが重層的に発見された。これらの内容については前章で述べた通りである。ここで時代ごとにまとめとして観視したい。

2. 旧石器時代・縄文時代

まず旧石器時代ではいかに安山岩製の剥片2点のみ検出である。南調査区においてもやはり安山岩製の剥片1点が出土しており、確実に旧石器時代の痕跡は確認できるものの、貧弱な様相は払拭することができない。ここ那珂川流域における旧石器時代の調査はそれほど多いものではないが、こうしたわずかな検出例でも当該期の様相を解明するうえで貴重な資料を提供したものと捉えることができる。

次の縄文時代では遺構として土坑が調査区南側に應まつて3基検出された。うち土坑SK179と命名した円筒形の土坑層土中から完形に近い後期初頭・網取1式の深鉢を含む土器が出土した。網取式土器はいわき市網取貝塚をはじめ周辺遺跡出土の検討により馬日順一氏が型式設定したものである。1式・2式に細分され、前者が称名寺2式、後者が堀之内1式に併行するものとされている。とくに県北部では称名寺2式は客体的で網取1式土器が主体となる。本例もその典型である。また他の2基の土坑からは遺物の出土はない。しかし、南側調査区では中期末葉から後期前半の竪穴建物4軒や土坑101基が検出されており、その北限が本調査区で確認されたことになる。なお、本遺跡における縄文集落の実態を十分に把握されたわけではなく、やはり部分的である。さらに広範囲におよぶ調査による資料の蓄積が必要であろう。

3. 奈良・平安時代

本遺跡における主体は奈良・平安時代である。当調査区では竪穴建物跡が66軒、円形有段遺構1基、土坑18基が検出された。中でも竪穴建物跡はさらに南側調査区の43軒、第1次調査区(小川他2008)の4軒(1軒は本調査区と重複しており、数値にはいれていない)、南側に隣接する上宿上坪遺跡(小川他2004)の4軒を加えると実に117軒となる。この集落の範囲は北限が中世の方形区画遺構SX02まで、南限は上宿上坪遺跡の南端浅い谷頭までであるが、東西方向の広がりが明瞭ではない。西側についてはすでに試掘調査において集落の広がりは確認できていないものの、東側については南東方向の久慈川に向かって台地が突出しており、より河川に近い区域まで集落の展開が予想される。あいに畑地部分は少なく大半が宅地化された検証は困難であるが、将来的に資料の増加を期待したい。

なお、南側の49軒と比較すると、北側調査区の70軒は営為期間幅が長い。ここでは8世紀前葉を上限とし最終集落営為は11世紀中葉である。8世紀代は20軒確認されている。大きく二期に分けたが中葉から後葉にかけて集中している。とくに規模よりも柱配置に特徴がみられ、SI72では主柱穴4本に北壁際当たるカマド両脇と南壁際に併行して2本が穿っており、4本ずつ並列している。8世紀前葉に比定した。また同じようにSI73も4本主柱穴にカマド両脇に柱穴がみられる。8世紀中葉に比定した。このように8世紀代では4本主柱穴を基本とするものが多く9軒確認できる。また9世紀代では41軒確認でき、無柱建物が主体を占め、わずかに梯子穴を伴う建物が3軒のみである。しかし、SI71は一辺3m強の小型建物であるが、隅柱構築である。またSI105は9世紀後葉に比定したもので、4本主柱穴に隅柱を含む壁柱穴4本を伴う特徴的な建物跡である。10世紀から11世紀にかけては極端に竪穴建物の構築が減少するが、SI109は一辺5m前後の当該期としては大型竪穴建物で、ここから灰種陶器と土師器の耳皿各1点が伴っており、特筆される。とくに灰種・耳皿は側縁を折り曲げた筒素なつくりで、底部に糸切り痕を残す灰種陶器終末期の所産で、11世紀中葉に比定されている。こうしたやや大型竪穴建物の存在、さらに灰種耳皿、模倣品

である土師器耳皿の検出は古代における上ノ宿遺跡の特殊性を物語る資料の提供となった。

また調査区中央で円形有段遺構SX01が検出された。9世紀前葉に比定され、平面形は円形を呈し、横断面形は扇鉢状で底面に一段の掘り込みをもつ特徴ある遺構のひとつである。すでに当遺構については茨城県内において相当数検出されており、成島一也氏はその遺構の集成と属性規定を明記している(成島1996)。なお、本遺構については大型竪穴状遺構をはじめいくつもの名称で呼ばれているが、ここでは円形有段遺構と呼称した。

4. 中世・近世以降

本調査区の南に宇留野城跡が存在する。主郭部三曲輪が直線的に並ぶ佐竹系連郭式城郭の典型とされる佐竹氏の重要な拠点のひとつである。2004年に当該城跡に隣接する上宿上坪遺跡を調査した際、溝や方形竪穴遺構、土坑など中世遺構と共に古瀬戸や瓦などの遺物も多量に出土していた(小川2004)。そこから500m北の区域に二重溝で囲まれた方形区画遺構SX02が検出された。いわゆる段切遺構と呼称されるもので、北側と西側が未調査区域に広がることから全体の規模は把握できない。しかし、確認部分からは方形竪穴遺構、土坑、井戸、土坑墓が密集して検出された。重複遺構は少なく、東西軸もしくは南北軸を主軸する長方形の方形竪穴遺構を中心に規則性は認められないものの比較的整然と構築されている。この方形竪穴遺構についてはすでに松本直人氏が県内の検出例を詳細に集成し分析が試みられている(松本2005)。そのなかでA類とした「柱穴が2か所で規則的に並ぶ」タイプが目立つ。とくに壁際に穿ってあるものが6基確認されており、当区画内の特徴といえる。また粘土土坑も2基検出されている。遺物も遺構数と比較すれば量的に少ないが陶器(古瀬戸・常滑)や土師質土器(内耳鍋)が目立つ。とくに内耳鍋は底部が丸みをもつ丸底が多く、県北や県央の特徴ではないかとの指摘がある。いずれも15世紀後半から16世紀前半の遺物である。また二重区画の南東端に墓域が検出された。狭い区画内であるが21基が集中していた。但し、中世だけではなく、近世も含まれており長期間継続的に墓域として機能していたことが判明している。現在明確ではないが、ここがのちに村内寺院として建立されることとなる。

5. おわりに

今回の上ノ宿遺跡の発掘調査は12,787㎡という膨大な面積が対象となった。第1次調査および南側I区域を含めると20,000㎡を遙かに超える。ここに旧石器時代、縄文時代、奈良・平安時代、中世、近世以降の遺構群・遺物類が重層的に検出された。なかでも奈良・平安時代の集落営為は特筆される。8世紀前葉から11世紀中葉という長期間継続した営為の要因は久慈川を巡る交通の要衝に形成された村落であることを意味し、少なくとも周辺地域を支配していた拠点の集落であることに間違いはない。しかし、竪穴建物群およびそこから出土した遺物の充実に対し、主要集落要素の基準のひとつでもある独立柱建物などが貧弱で十分把握できていない。東側区域の調査が行われておらず、この未調査区域に造営されたこととみることがあっても推測の域をでない。

また中世における動態も重要な発見である。とくに北端で検出された方形区画遺構は部分的とはいえ、中世城郭に隣接した平地構築物としては概要であると判断できる。溝によって区画された区内には方形竪穴遺構、土坑、井戸が密集し、東端には墓域を設定する。この墓域は近世以降も継続使用され、後に区画内は寺院としての機能を持つものと推定される。

今回古代から中世および近世以降についても多くの成果を得ることができた。しかし、何度も繰り返すが上ノ宿遺跡の一部である。全体を把握しているわけではない。今後さらに本地点の成果などを含め久慈川支配の全体的な動きを視野に入れつつ、改めて上ノ宿遺跡における旧石器時代から中世以降の在り方について議論を進めていきたい。

(小川和博・大淵淳志・志藤晋子)

参考文献

- 浅井 哲也1992「茨城県における奈良・平安時代の土器(I)」研究ノート創刊号(財)茨城県教育財団
浅井 哲也1993「茨城県における奈良・平安時代の土器(II)」研究ノート2号(財)茨城県教育財団
石野 博信1990「日本原始・古代住居の研究」吉川弘文館
小川和博他2004「上宿上坪遺跡発掘調査報告書」大宮町教育委員会
小川和博他2008「上ノ宿遺跡発掘調査報告書」常陸大宮市教育委員会
斉藤 弘道2006「茨城の縄文土器」茨城県立歴史館資料叢書9
成島 一成1996「茨城県の「大型竪穴状遺構」について」研究ノート6号(財)茨城県教育財団
松本 直人2005「茨城県における方形竪穴遺構の集成」年報24平成16年度(財)茨城県教育財団

墓穴 区画 地物	発掘 層位	器種	法量 (cm)			形状・蒔絵	胎土	焼成	色調	透光度	備考
			口径	器高	器径						
SI113	163-9	深底器 坪	18.6	(4.1)	-	口タロ成形	黒色粘土・石灰・炭石	良好	灰オリーブ色	口縁1/6残	
	163-10	深底器 坪	-	(2.1)	7.4	底面回転ヘラケズリ	黒色粘土・石灰・炭石	良好	灰色	底面1/3残	
	163-11	深底器 坪	-	(2.1)	9.0	底面ヘラキリ	黒色粘土・石灰・炭石	良好	灰色	底面1/4残	
	163-12	深底器 坪	-	(1.1)	7.0	底面手締ちヘラケズリ	黒色粘土・石灰・炭石	良好	灰色	口縁1/3残	
	163-13	深底器 高台付坪	19.2	(5.3)	-	底面回転ヘラケズリ	黒色粘土・石灰・炭石	良好	灰白色	口縁1/3残	
	163-14	深底器 高台付坪	-	(2.4)	7.2	底面回転ヘラケズリ	黒色粘土・石灰・炭石	良好	灰白色	底面残	
	163-15	深底器 皿	18.0	3.9	97.28	外周面回転ヘラケズリ	黒色粘土・石灰・炭石	良好	黒褐色	口縁1/4残	
163-16	深底器 皿	-	-	-	外周平行タタキ	赤土・石灰・炭石	良好	にじい青褐色	底面破片		
163-17	深底器 皿	-	-	-	外周平行タタキ	黒色粘土・石灰・炭石	良好	灰色	底面破片		
SI114	166-1	土器器 坪	13.2	(5.0)	-	口タロ成形	石灰・炭石	良好	にじい青褐色	口縁1/5残	
	166-2	土器器 皿	22.4	(21.5)	-	外周ヘラケズリ	海神骨針・石灰・炭石	良好	褐色	口縁1/3残	
	166-3	土器器 皿	20.4	(7.0)	-	外周ヘラケズリ	黒色粘土・石灰・炭石	良好	淡黄褐色	口縁1/4残	
	166-4	土器器 皿	-	(3.2)	11.0	外周ヘラケズリ	赤土・石灰・炭石	良好	赤褐色	底面1/4残	
	166-5	土器器 皿	-	(2.2)	11.0	外周ヘラケズリ	黒色粘土・石灰・炭石	良好	にじい褐色	底面残	
	166-6	深底器 坪	-	(1.1)	8.0	底面回転ヘラケズリ	黒色粘土・石灰・炭石	良好	灰白色	底面残	
	166-7	深底器 高台付坪	15.5	5.8	11.2	底面回転ヘラケズリ	黒色粘土・石灰・炭石	良好	灰白色	口縁1/4残、底面1/2残	
SI115	170-1	土器器 坪	-	(2.0)	7.0	底面回転ヘラケズリ	海神骨針・石灰・炭石	良好	赤褐色	底面1/4残	
	170-2	土器器 皿	14.4	(5.7)	-	外周ヘラケズリ	黒色粘土・石灰・炭石	良好	赤褐色	口縁1/3残	
SI116	171-1	土器器 皿	17.6	(4.9)	-	外周ヘラケズリ	海神骨針・石灰・炭石	良好	赤褐色	口縁1/5残	
	171-2	深底器 高台付坪	-	-	-	底面回転ヘラケズリ	海神骨針・石灰・炭石	良好	灰色	底面破片	
SI117	172-1	深底器 皿	-	(2.3)	-	外周面回転ヘラケズリ	黒色粘土・石灰・炭石	良好	灰色	天下割焼	
SI118	174-1	土器器 皿	-	(1.7)	7.0	外周ヘラケズリ	赤土・石灰・炭石	良好	赤褐色	底面1/5残	底面木炭痕
SI119	175-1	土器器 高台付坪	-	(2.5)	8.2	底面回転ヘラケズリ	海神骨針・石灰・炭石	良好	にじい褐色	底面1/4残	
	175-2	土器器 皿	-	(2.7)	9.0	外周ヘラナデ	石灰・炭石	良好	褐色	底面1/4残	
	175-3	深底器 坪	10.8	3.6	7.0	底面回転ヘラキリ	海神骨針・石灰・炭石	良好	褐色	口縁1/2残、底面残	
	175-4	深底器 皿	-	-	-	外周平行タタキ	黒色粘土・石灰・炭石	良好	灰白色	底面破片	
	175-5	深底器 皿	-	-	-	外周平行タタキ	海神骨針・石灰・炭石	良好	灰白色	底面破片	

写真図版



1. 遺跡調査区航空写真



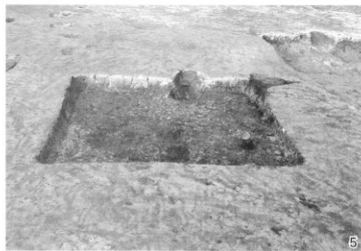
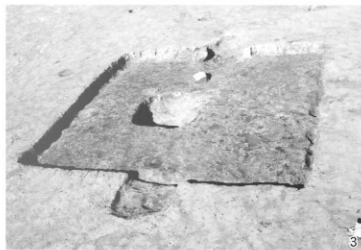
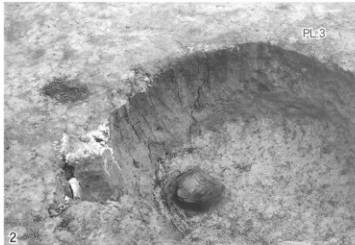
2. 遺跡調査区航空写真



1. 遺跡調査区航空写真



2. 調査区全景



1. 旧石器時代試掘グリッド1

2. SK179

3. SI67

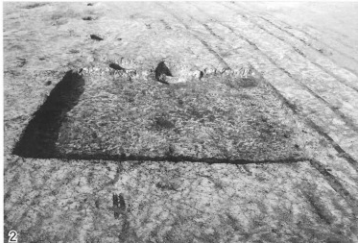
4. SI68

5. SI69

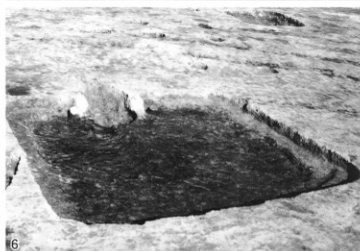
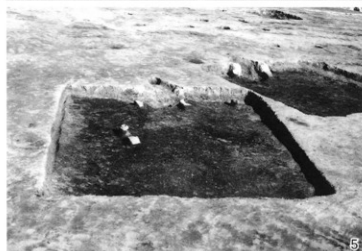
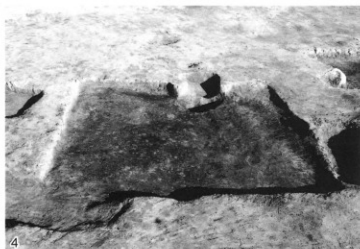
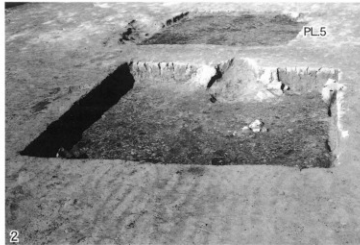
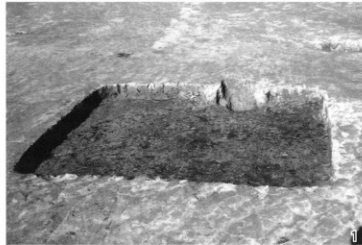
6. SI71

7. SI72

8. SI73



1. SI79 2. SI80 3. SI82 4. SI88 5. SI92 6. SI93 7. SI95 8. SI96



1. SI97

2. SI98

3. SI100

4. SI101

5. SI102

6. SI103

7. SI109 - 110

8. SI109



1



2



3



4



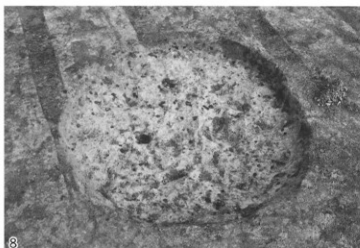
5



6



7



8

1. 調査区全景

2. SE01

3. SD06

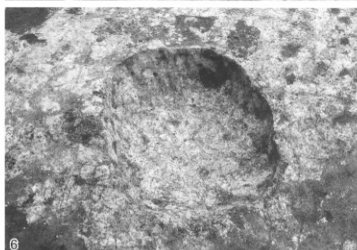
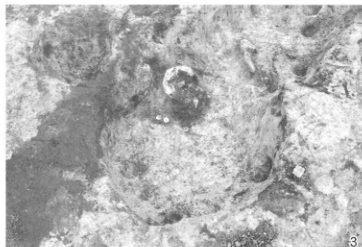
4. 方形区画遺構全景

5. SK170

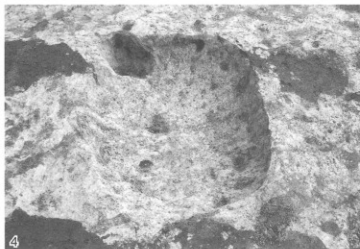
6. SK244

7. SK255

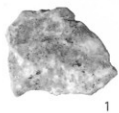
8. SK256



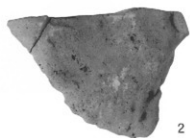
1. SK265 · 286(1) 2. SK265 · 286(2) 3. SK266 · 277 · 275(1) 4. SK266 · 267 · 275(2)
5. SK268 6. SK269 7. SK273 8. SK276



1. SK277 2. SK278 · 281 3. SK279 4. SK280



1



2

1・2 旧石器時代剥片



3



4

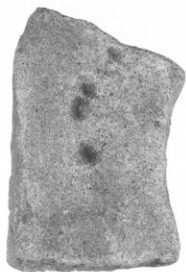


5

3～5 (SK179) 6・7 遺構外出土石器



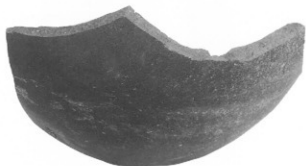
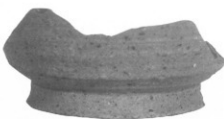
6



7



1 2



4



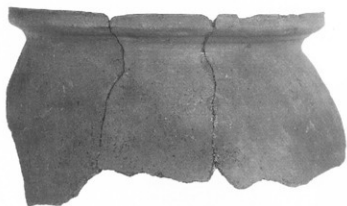
3



5



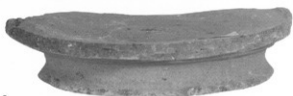
6



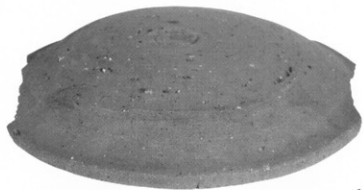
7



8



9



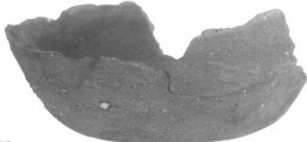
10

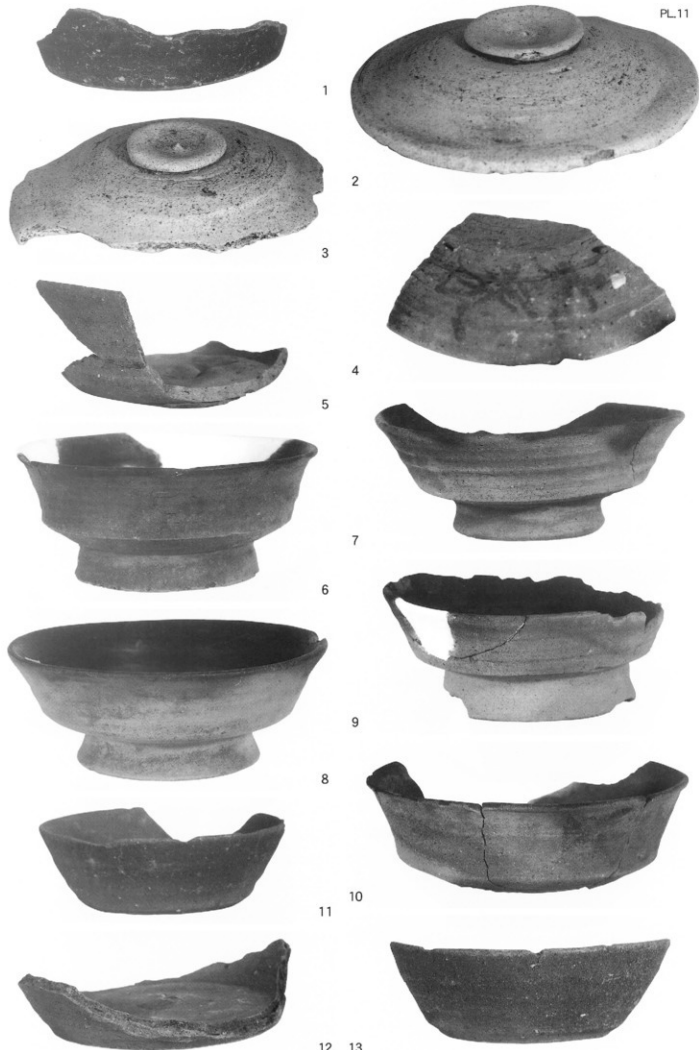


11



12 13



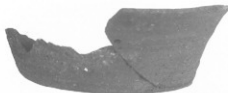




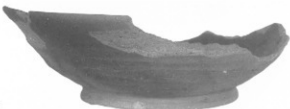
2



1 3



5



4 6



7



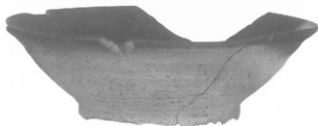
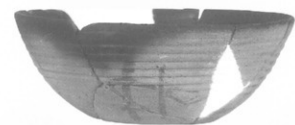
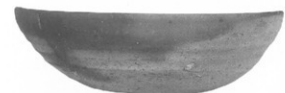
8



10



9

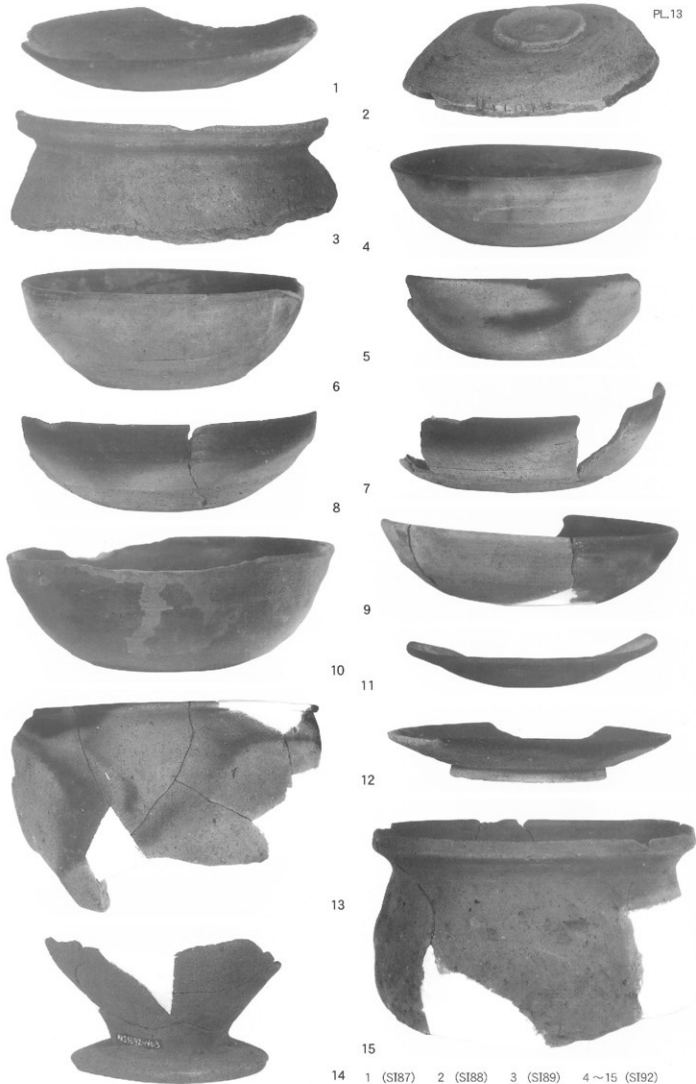


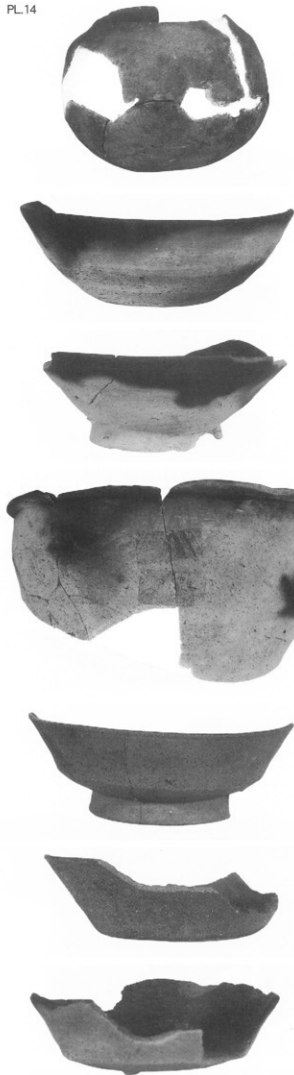
11



12

1 (SI75) 2~4 (SI77)
5·6 (SI82) 7~12 (SI85)





2

1

4

3

6

5

8

7

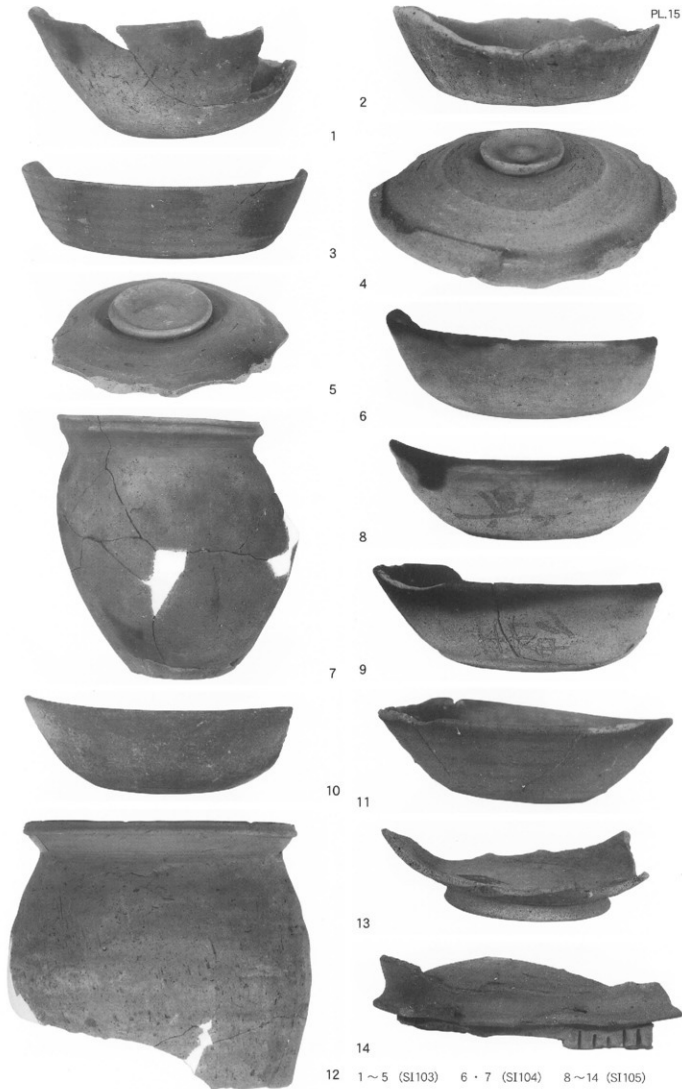
9

10

11

12

1 (SI93) 2 (SI94) 3~8 (SI95) 9 (SI96)
10 (SI99) 11 (SI100) 12・13 (SI102)





1



2



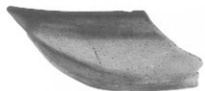
3



4



5



6



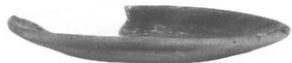
7

7



8

8



9

9



10

10



11

11



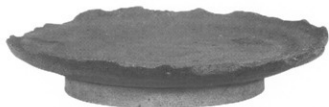
12

12

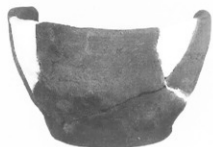


13

13

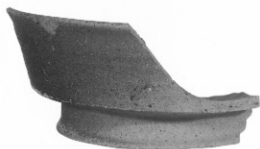


14 15





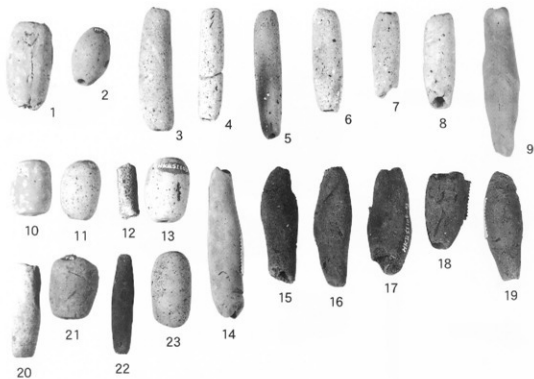
1 2



4

3
5

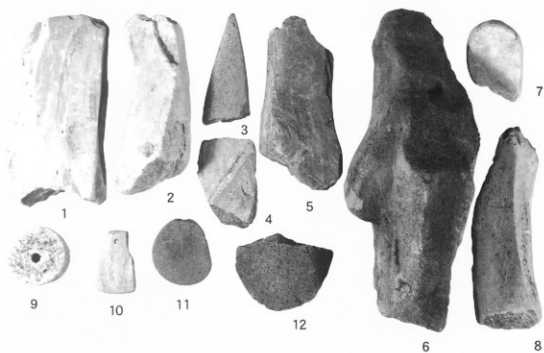
1・2 (SI113) 3・4 (SI114) 5 (SI119)



土製品

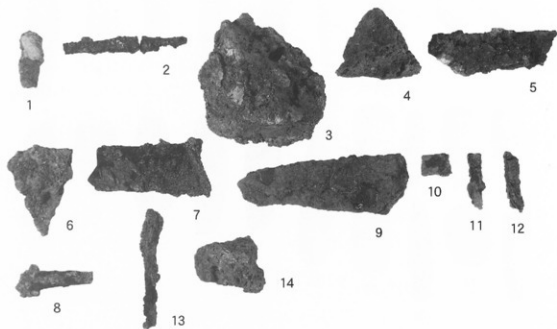
1・2 (SI28) 3~7 (SI72) 8 (SI74) 9 (SI92) 10~12 (SI95) 13~19 (SI105) 20 (SI108)

21・22 (SI109) 23 (SI110)



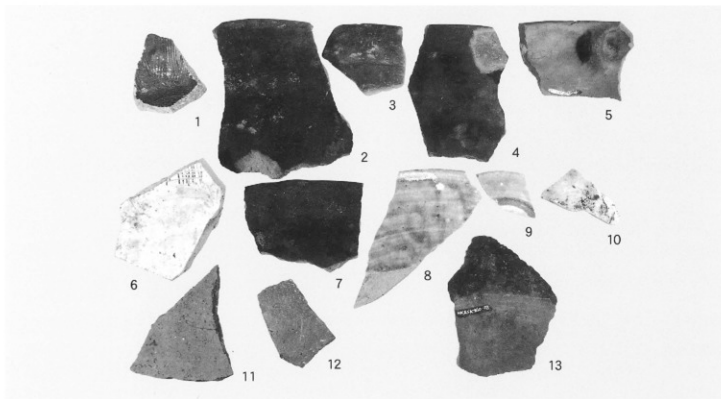
石製品

- 1 (SI29) 2 (SI73) 3 (SI92) 4・5 (SI94) 6 (SI104) 7 (SI105) 8 (SI109) 9 (SI77) 10 (SI82)
 11 (SI64) 12 (SI93)



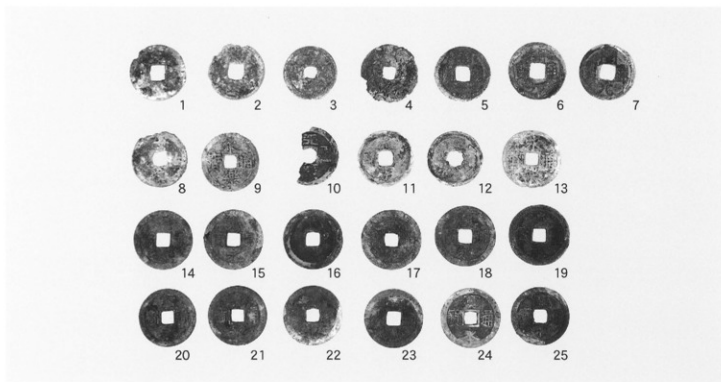
鉄製品

- 1 (SI77) 2 (SI79) 3 (SI80) 4 (SI92) 5 (SI95) 6 (SI98) 7 (SI102) 8 (SI104)
 9~12 (SI105) 13・14 (SI107)



中世・方形竪穴遺構、土坑出土

1 (SK211) 2・3 (SK212) 4 (SK214) 5 (SK216) 6・7 (SK224) 8 (SK299) 9 (SK303)
10 (SK355) 11~13 (SK360)



中・近世土坑墓出土銭貨

1~4 (SK266) 5~9 (SK267) 10 (SK279) 11~13 (SK285) 14~19 (SK276) 20~25 (SK281)

報告書抄録

ふりがな	かみのしゅくいせき はつかつちょうさほうこくしょ							
書名	上ノ宿遺跡 発掘調査報告書							
副書名	第2次調査II							
巻次								
編著者名	小川和博 大淵淳志 遠藤啓子							
編集機関	有限公社 日考研茨城							
所在地	〒300-0508 茨城県稲敷市佐倉3321-1 TEL.029-892-1112							
発行機関	常陸大宮市教育委員会							
所在地	〒319-2292 茨城県常陸大宮市中富町3135-6 TEL.0295-52-1111							
発行年月日	2009年12月28日							
収録遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
上ノ宿遺跡	ひらきまのり 常陸大宮市 字留野3061-1 他14筆	334	117	36度 32分 51秒 95	140度 25分 9秒 97	20080611 ～ 20081226	12,787㎡	店舗建設に伴う記録 保存のための調査
遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
上ノ宿遺跡	集落跡	縄文時代、奈良・平安時代、中世以降	竪穴建物跡 掘立柱建物跡 土坑 土坑墓 円形有段遺構 井戸 柱穴 溝 方形区画遺構	66軒 6棟 202基 21基 1基 2基 1,064基 9条 1基	縄文土器・土師器・須 恵器・灰釉陶器・鉄製 品(刀子・紡錘中)・土 製品(管状土師)・銭貨・ 石製品(砥石・紡錘車 石臼)	奈良・平安時代の 集落跡である。 竪穴建物跡から 灰釉陶器・耳皿 や墨書土器が出 土している。		
要約	縄文時代後期初期の土坑3基をはじめ、奈良・平安時代の竪穴建物跡64軒、中世以降の掘立柱建物跡6棟が検出されている。竪穴建物跡は南側調査区と合わせると109軒にのぼり、周辺地域における一大拠点集落である。その中で一辺6m級の竪穴建物跡から灰釉陶器と土師器の耳皿各1点が共に伴って出土しており特筆される。また調査区北端では、溝によって区画された方形区画遺構が検出され、区画内には中世の方形竪穴遺構や土坑および井戸とともに墓域が広がっている。							

常陸大宮市上ノ宿遺跡

—第2次調査II—
発掘調査報告書

発行日 平成21年（2009）12月28日

編集 有限会社 日考研茨城
茨城県船歌市佐倉3321-1

発行 常陸大宮市教育委員会
茨城県常陸大宮市中富町3135-6

印刷 有限会社 田辺印刷
千葉県いすみ市菊谷663-4
